

愛知学院大学

語研紀要

第45巻 第1号 (通巻46号)

論 文

- トマス・ハーディと法律
 吉 井 浩司郎 (3)
- 「同じ戦いを戦う」——*Angels in America*の再演が今示すこと
 藤 田 淳 志 (21)
- Teaching the 1960s to Japanese College Students
 Russell NOTESTINE (37)
- Vocabulary Acquisition: Verbs First
 R. Jeffrey BLAIR (51)
- ベケット、不在者の存在
 堀 田 敏 幸 (71)
- Animal-Animal and Human-Animal Relationships in Proverbs,
 Fables and Stories: Interpretations and Responses
 David DYKES (95)
- Federation of American Immigration Reform (FAIR)
 and Racist Discourse 大門ゴーフ裕子 (115)
- 19世紀の人々と本のつながりに関する一考察
 ——ボルドーの貸本屋と教会の関係に着目して——
 水 町 いおり (135)
- 韓国語教育における翻訳の活用の試み——大江健三郎
 『万延元年のフットボール』の韓国語翻訳を事例に——
 李 承 俊 (157)

翻 訳

- 中華人民共和国民法総則
 李 智 基・加 藤 幸 英 (177)

2020年1月

愛知学院大学語学研究所

目 次

論 文

- トマス・ハーディと法律
..... 吉 井 浩司郎 (3)
- 「同じ戦いを戦う」—— *Angels in America* の再演が今示すこと
..... 藤 田 淳 志 (21)
- Teaching the 1960s to Japanese College Students
..... Russell NOTESTINE (37)
- Vocabulary Acquisition: Verbs First
..... R. Jeffrey BLAIR (51)
- ベケット、不在者の存在
..... 堀 田 敏 幸 (71)
- Animal-Animal and Human-Animal Relationships in Proverbs,
Fables and Stories: Interpretations and Responses
..... David DYKES (95)
- Federation of American Immigration Reform (FAIR)
and Racist Discourse 大門ゴーフ裕子 (115)
- 19世紀の人々と本のつながりに関する一考察
——ボルドーの貸本屋と教会の関係に着目して——
..... 水 町 いおり (135)
- 韓国語教育における翻訳の活用の試み——大江健三郎
『万延元年のフットボール』の韓国語翻訳を事例に——
..... 李 承 俊 (157)

翻 訳

- 中華人民共和国民法総則
..... 李 智 基・加 藤 幸 英 (177)

トマス・ハーディと法律

吉井 浩司郎

(1)序

ハーディと法律と言えば、ハーディは小説家としての出発点の頃から法律には関心があったようだ。例えば、*Desperate Remedies* と *Under the Greenwood Tree* とを Tinsley 社から出版していた頃の事情をまず調べてみよう。

ハーディの幻の処女作 *The Poor Man and the Lady* の出版を巡って当時 Chapman and Hall 社の編集顧問⁽¹⁾をしていた George Meredith から、文学上に仕事を残したいのなら、社会改良の旗幟^{きし}を鮮明にしないで、もっと入念な筋立ての芸術的な作品を書く方がよい、なぜなら因襲的な書評家から総攻撃を受けて作家としての将来が損なわれてしまうからだ、という旨の助言⁽²⁾を受け、ハーディはこの処女作の出版を断念した。そしてその助言に従って創作したのが *Desperate Remedies* であり、この作品を Tinsley 社から出版する際、当時のハーディの全財産123ポンドのうち75ポンドを前金としてハーディが支払うという条件で出版にこぎ着けたのであった⁽³⁾。ティンズレイ社はこの作品を500部印刷し、そのうちの370部が売れたので、75ポンドの前金のうちの60ポンドの小切手をハーディに送ってきたのであった⁽⁴⁾。この頃のハーディはまだ建築の仕事に従事

していたのであり、小説家としてのこのような出発ではあまり将来性を感じることができず、次作 *Under the Greenwood Tree* を制作していたものの、積極的に出版しようとは思っていなかった。次にティンズレイと会ったとき、ティンズレイから乞われるままに、*Under the Greenwood Tree* の原稿を見直しもせずティンズレイに送ってしまう。すると、*Under the Greenwood Tree* の版權としてティンズレイから30ポンドが送られてきたのである。その後追加の10ポンドが送られてきた。結果、ハーディは *Under the Greenwood Tree* の版權をティンズレイ社にわずか40ポンドで売ってしまったのである。この経験が引き金になってハーディは版權に関する書物を購入し、出版社と出版契約を結ぶとき、版權に関する法律を勉強してその後不利を被ることを回避しようとしたようである。⁽⁵⁾

以上の経験が、ハーディの関心をその後法律に向かわせたかどうかは分からないが、小説家になる以前からハーディはジョン・スチュアート・ミルの愛読者であったことの方がハーディの関心を法律問題に向かわせたことは十分に考えられる。例えば、*The Life of Thomas Hardy* によれば、1865年のある日ハーディは、ロンドンの Covent Garden で、国会議員選出選挙の候補者であったジョン・スチュアート・ミルの演説を聞いているのであるが、その時の様子を *The Life* は以下のように記述している。

It was a day in 1865, about three in the afternoon, during Mill's candidature for Westminster. The hustings had been erected in Covent Garden, near the front of St. Paul's Church; and when I—a young man living in London—drew near to the spot, Mill was speaking. The appearance of the author of the treatise *On Liberty* (which we students of that date knew almost by heart) was so different from the look of persons

who usually address crowds in the open air that it held the attention of people for whom such a gathering in itself had little interest.⁽⁶⁾

上掲の引用中にあるように、ハーディはミルの『自由論』をほぼ暗唱していたほどのミルの著作の愛読者であったようである。また Fred Reid は、ハーディは *The Life*. の中でミルの著作のうち *On Liberty* についてしか言及していないが、ミルの他の著作も読んで知っていたろう、と指摘している。⁽⁷⁾ 従って、ハーディはミルの *The Subjection of Women* (『女性の隷従』)⁽⁸⁾ の内容にも精通していたと見ていいだろう。そして以下は、この『女性の隷従』の書き出しとその浅見公子氏の訳である。

The object of this Essay is to explain as clearly as I am able, the grounds of an opinion which I have held from the very earliest period when I had formed any opinions at all on social or political matters, and which, instead of being weakened or modified, has been constantly growing stronger by the progress of reflection and the experience of life: That the principle which regulates the existing social relations between the two sexes—the legal subordination of one sex to the other—is wrong in itself, and now one of the chief hindrances to human improvement; and that it ought to be replaced by a principle of perfect equality, admitting no power or privilege on the one side, nor disability on the other.⁽⁹⁾

「この小論の目的とするところは、わたくしがいやしくも社会的なまたは経済的な事柄について意見を持ちはじめた最も初期の頃から心に抱き続け、人生についての反省や体験が深まることによって、弱められたり、修正されたりする代わりに、絶えずより強まってきている一つの考えの根拠を、できるだけ明快に説くことなのである。

すなわち、両性間の現在の社会関係を規制している原理——一方の性が他方に対して法律的に従属するという事——は、それ自体において誤りであり、また、現在、人類の進歩発展に対する主たる障害物の一つとなっているものなのである。そして、この原理は、一方の側に何らの権力ないし特権をも認めず、また他方の側に何らの無能をも認めないところの、完全な平等の原理によって置き換えられるべきである。⁽¹⁰⁾」

このように、『女性の隷従』の書き出しは、男女の完全な平等こそが実現されるべき課題であると高らかに宣言しているのである。

ミルは、1851年にハリエット・テイラー夫人と結婚するときに、当時の結婚法に反対しているのだが、Mary Lyndon Shanley が紹介しているのを次に見てみよう。

When John Stuart Mill and Harriet Taylor married in 1851, Mill wrote out a formal protest against the laws that would govern their marriage. He objected to

the whole character of the marriage relation as constituted by law... for this amongst other reasons, that it confers upon one of the parties to the contract, legal power & control over the person, property, and freedom of action of the other party, independent of her own wishes and will... [H]aving no means of legally divesting myself of these odious powers... [I] feel it my duty to put on record a formal protest against the existing law of marriage, in so far as conferring such powers; and a solemn promise never in any case or under any circumstances to use them.⁽¹¹⁾

ジョン・スチュアート・ミルとハリエット・テイラーとが1851年に結婚するとき、ミルは、彼等の結婚を司る法律に対して正式の抗議を表明した。彼は反対した、

法に定められている婚姻関係の性格全般に、(反対理由が様々ある内、特に以下の理由によって。)法律は、婚姻契約の当事者の一方の側に他方の側の肉体、財産、行動の自由を法的に管理する力を付与している、女性(妻)の自由意志を無視して。これらの憎むべき権力を法的に放棄する手段がないので、私は、そのような権力を男性の側に付与している点において、現行の結婚法に対して正式の反対声明をここに記すのが私の義務だと思う。そしていかなる場合にも、いかなる状況においてもこれらの権力を行使しないことを厳粛に約束することもここに記す。

ジョン・スチュアート・ミルと言えば、フェミニズム運動の指導者であり、彼の『女性の隷従』は当時の女性運動のバイブルであったと言われている。男女の「完全な平等の原理」を主張し、女性(妻)の権利を一切認めない当時の結婚法に反対するミルの考え方は間違いなくハーディに影響を及ぼしたであろうことは推測できる。例えば、後で具体的に見る *Far from the Madding Crowd* の女主人公バスシバの結婚観の中にハーディがいかに影響されて作品の中に盛り込んでいるかが見て取れる。

ところで、ハーディが法律の問題に相当な関心を持っていたこと、また、ハーディがドーチェスターでの治安判事として1884年～1919年まで、また、ドーセット州での治安判事としては1894年～1916年まで、勤めていたこと、等が近年明らかにされている。ハーディがいかに法律に関心を持ち、様々な手段を駆使して法律に関する知識、情報を収集し

たかについて、Harold Orel⁽¹²⁾ や William A. Davis⁽¹³⁾ や Trish Ferguson⁽¹⁴⁾ らが明らかにしているが、中でも William A. Davis が最も詳細な研究を発表している。その Davis によれば、ハーディは当時の裁判記録等を丹念に調べた内容とか、治安判事としての経験から知り得た法律上の知識を小説の中に生かしているというのである。また、ハーディには裁判官や弁護士を職業とする友人があり、彼らから法律上の知識を得たり確認したりしたという。また、the *Times* や the *Dorset County Chronicle* に掲載されている裁判報告を調べたり、様々な裁判を傍聴したりという具合に、様々な方法を利用して法律上の知識を蓄積したようである。その調査した結果を“Literary Notes III: Facts from Newspapers, Histories, Biographies, other Chronicles (mainly Local)” にまとめ上げ、ここに記録された情報を元にして、小説を創作する際に法律の問題を正確に扱った、というのである。因みに、William A. Davis は、“Hardy was, in fact, an active magistrate longer than he was a practicing novelist.”⁽¹⁵⁾ とまで言っているのである。

それでは、法律の問題がハーディの小説の中でどのように扱われているのか具体的に見ていこう。

(2) 小説に扱われている法律問題

ハーディのそれぞれの小説の主題が何であるかについて検討するとき、我々は、それぞれの主題には法律の問題が潜んでいることに気づかされる。例えば、*Far from the Madding Crowd* (1874) をまず最初に取り上げてみよう。この作品の主題、すなわち、男性のいかなる生き方が女性との結婚に至るかということが、三つの恋愛模様を描くことによって示されている。ゲイブリエル・オークとバスシバとの恋愛、ボールドウッドのバスシバに対する一方的な恋愛、サージャント・トロイとバスシ

バとの恋愛と結婚およびその結婚の破綻、これらの三様態の恋愛が描かれて、オークの、実生活に裏打ちされた、堅忍不拔の献身的なバスシバに対する愛が彼女の心を最終的に射止めるという内容になっている。しかし、これは、三人の男性の生き方に焦点を当てた場合の解釈であって、女性のバスシバに焦点を当てると、この作品で描かれる恋愛と結婚との別の側面が浮かび上がってくる。例えば、ハーディはオークとバスシバとの最初の恋愛を次のように描くことによって、当時の結婚制度（すなわち、女性は結婚と同時に夫の所有財産となってしまうという制度）にももの申す姿勢を示している。

バスシバが伯父の死によって伯父の農場の経営権を相続する以前、伯母の家に遊びに来ていたときに、当時酪農場の経営者であったオークと知り合い、彼から求婚されたときに、次のように応える。

“I hate to be thought men’s property in that way, though possibly I shall be had some day.”⁽¹⁶⁾

「私はそんな風に男性の所有物だと思われるのが大嫌いなの。いつかは男性に所有されることには多分なるんでしょうけど。」

独立心旺盛なバスシバは、結婚と同時に女性は夫の所有物となるという当時の結婚制度に同意できないのである。上の引用はそのようなバスシバの考え方を示していると同時に、当時の結婚制度に対するハーディの不同意の考えも間接的ながら示していそうである。そればかりか、伯父の農場を相続したあとバスシバが女農場主として澁刺としてデビューしたのに、トロイ軍曹の妻となると、彼女の一切の所有財産はトロイのものになってしまい、農場経営の表舞台から身を引かざるを得ない、また、既に指摘したが、彼女自身夫トロイの所有財産になってしまうという女性の妻としての立場（coverture）に対してもハーディは不同意を表明し

ているのである。

次に、*The Woodlanders* (1887) について見てみよう。この作品の中で扱われている法律上のトピックスは、離婚法である。ここで扱われるのは「1857年の離婚法」である。この法律の内容を確認しておくと、こうである。

ヴィクトリア時代のイギリスで初めて成立した離婚法であるが、**sexual double standard** の甚だしい法律であった。例えば、妻は姦通を犯しただけで離婚されたのに、夫の姦通は次の4つのいずれか1つと重ならないと、妻は離婚を申し立てることができなかつた⁽¹⁷⁾。

- ①近親相姦
- ②別居が許されるような虐待
- ③重婚
- ④もっともな理由なくして妻を2年間以上遺棄すること（妻の同意を得ずに別居すること）

但しこの法律は妻の所有権という点で、次のような前進も見られた。つまり、別居中かあるいは遺棄された妻の財産を保護するための条項を含む。すなわち、夫と別居中の女性が別居後に相続したり取得したいかなる財産をも自由に使用できるということを保証している。

この法律のどのような内容がこの作品の物語と関連してくるかを見てみよう。

グレースという妻がありながら、チャーモンド夫人が昔の恋人であったことから深い関係になり挙げ句の果てに大陸に駆け落ちしてしまったフィッツピアズをグレースから何とか離婚させようとグレースの父メルベリーは奔走するが、結局、フィッツピアズの行為が離婚を許すほど残酷なものではなかったことを知ることに終わる。精神的な意味での残酷さは当事者にとっても判決を下す判事にとっても主観性が入り込む問題であっただけに証明しづらいものであった、とデイヴィスは述べて

⁽¹⁸⁾
いる。

The Mayor of Casterbridge (1886) においては、巡回裁判の場面が出てくる。それは、教会のそばで小便をした咎で訴えられた *furnity woman* を治安判事のヘンチャードが裁こうとする場面で、ヘンチャードが逆にその女から20年前の妻子売却の犯罪を暴露されて、潔く、治安判事の椅子から降りてしまうのである。ヘンチャードが治安判事をするこの場面は、ハーディ自身がドーチェスターで治安判事をしてきた経験が生かされている、という。

巡回裁判と言えば、ハーディの短編に “On the Western Circuit”(「西部巡回裁判途上にて」) という作品がある。これは *Life's Little Ironies* (1894) に収められている作品で、作品最後に “Autumn 1891” と記されているので、1891年の作ということになる。この作品はタイトルに巡回裁判とあるが、内容は裁判を扱っているわけではない。メルチェスター（実名ソールズベリー）の祭りの夜に、回転木馬に乗った Anna という女中見習いの娘に、巡回裁判の途上にこの町に滞在中の弁護士兼判事の若者 Charles Bradford Raye が心奪われて、互いに知り合いになり、そのあと、レイがロンドンに帰ってから、二人の間で文通が続き、やがては、結婚に至るという筋書きだが、その実、アンナは無学文盲で、彼女の女主人の Mrs. Harnham に手紙の代筆を頼んだのであった。ハーナム夫人は裕福なワイン商人を夫に持ち、アンナに泣きつかれて、仕方なく代筆を続けるうち、つつい彼女の毎日の生活の不満のはげ口として本音の恋心を手紙にしたためてしまい、それがレイの心を虜にしたのであった。レイは、結婚登記所で結婚式を挙げた日に、自分の文通の相手がアンナの companion (付添人) 兼 witness (立会人) として来ているハーナム夫人であったことを知り、自分の妻となったアンナは手紙一つ書けないことを知るに至る。そしてこの短編は、新婚旅行で Knollsea に向かう列車の客となっているレイとアンナとの会話で幕を閉じている。

‘What are you doing, dear Charles?’ she said timidly from the other window, and drew nearer to him as if he were a god.

‘Reading over all those sweet letters to me signed “Anna,” ’ he replied with dreary resignation.⁽¹⁹⁾

次に、節を改めて、*Tess of the d'Urbervilles* と *Jude the Obscure* とを見てみよう。

(3) *Tess of the d'Urbervilles* と *Jude the Obscure* とにおける法律問題

『テス』における法律の問題で第一に扱われなければならないのは、テスの人生と運命とを決定づけてしまったチェイスの森の事件であろう。この事件がテスに対するアレックによる誘惑 (seduction) なのか強姦 (rape) なのか、ハーディ小説の研究の中では長らく論争が続いて来ていたが、William A. Davis の *Thomas Hardy and the Law* が出版されて、ほぼ決着がついた、と言っていいだろう。

これまで、この事件がどのように解釈されてきたかを、すべての研究者の研究を調べ上げたわけではないものの、調査結果をここに示してみよう。

筆者が調査した54名の研究者のうち、seduction と解釈する者37名、rape とする者13名、seduction か rape か判断できないとする者6名、そして、seduction でありかつ rape とするもの1名、という内訳である。これで57名となるのだが、それは、seduction か rape か判断できずにしていた Leon Waldoff と Peter Widdowson が二人とも seduction に解釈を変更しており、また、seduction だとしていた Richard Nevesvari が rape に解釈を変更しており、これら3名が二重にカウントされているからで

ある。

以上の54名の中には含まれていないデイヴィスの議論がいかに決定的かを述べておこう。デイヴィスは当時の法律を根拠に rape だとするのである。

If the woman is asleep when the connection takes place, she is incapable of consent, and although no violence is used, the prisoner may be convicted of rape, if he knew that she was asleep.⁽²⁰⁾

眠っている女性を犯した場合、その女性は男性に対して consent (同意) を意思表示できないので、rape となるのである。

テスがアレックに犯される前後の状況を見つめてみよう。

縁日兼市の日にテスは仲間の労働者たちと共に Chaseborough に遊びに行き、その帰りにひょんなことから喧嘩になってしまい、そこを馬に乗ったアレックに助けられて、The Chase の森に分け入っていくのであるが、それが、アレックがテスを犯すか誘惑するかの目的であったかどうかは定かではない。街道 (the highway) から分かれて Trantridge へ向かう小道を歩き過ぎたのは、馬でちょっとばかり散歩しようと思ったからだ、とアレックはテスに言っているが、この流れは seduction の雰囲気を読者に感じさせる。このような作品の展開が seduction だと解釈する研究者が多い理由だろうと考えられる。しかし seduction であったのか rape であったのかを判断するためには、実際の事件が起こった時のテスがどうであったかをもっと詳細に見てみる必要がある。アレックは「チェイスの森」の中で道に迷ってしまったので、寒いと言うテスに自分の上着を着せ、枯れ葉を集めてテスをそこに休ませ、それから自分の位置を確かめるためランドマークとなるものを探しに行き、位置が分かったので、テスのいる所に迷いに迷い、探しに探して戻ってくるのであ

る。そしてアレックはぐっすり眠り込んでいるテスを見つけるのである。

(21)

She was sleeping soundly, and upon her eyelashes there lingered tears.

この後、テスがアレックに犯される場面の描写は一切ない。それは、ヴィクトリア時代の性の道徳観の限界と言うべきか。語り手は、次のように暗示的に語るのみである。

Why was it that upon this beautiful tissue, sensitive as gossamer, and practically blank as snow as yet, there should have been traced such a coarse pattern as it was doomed to receive; why so often the coarse appropriate the finer thus, the wrong man the woman, the wrong woman the man, many thousand years of analytical philosophy have failed to explain to our sense of order.⁽²²⁾

以上の記述から読者は、テスに対するアレックによる rape 事件が起きたことを理解するよう求められているのである。そしてチェイスの森の事件が seduction であれ rape であれ、ヴィクトリア時代の性の道徳観からすれば、一度過ちを犯してしまった女性は fallen woman というレッテルを貼られざるを得ないのである。そして、ヴィクトリア時代には、独身女性及び既婚女性と、fallen woman との間には越えがたい溝があったのである。その点をこの作品の語り手は次のように述べてこの章を閉じている。

As Tess's own people down in those retreats are never tired of saying among each other in their fatalistic way: 'It was to be.' There lay the pity of it. An immeasurable social chasm was to divide our heroine's

personality thereafter from that previous self of hers who stepped from her mother's door to try her fortune at Trantridge poultry-farm.⁽²³⁾

そしてこのヴィクトリア時代の性の道徳観がテスを不幸へと追いやるのである。例えば、テスとエンジェル・クレアとが結婚式を挙げたその夜、二人による互いの過去の過ちを告白し合う場面に象徴的に示されている。この場面におけるエンジェルの告白内容は「ロンドンに滞在中、懐疑心と困難とによって、波にもまれるコルクのように揉みくちやにされた時」丸二日間商売女と遊んだ、しかしそれ以来二度と同じ過ちを繰り返さなかった、というものであり、それは「チェイスの森」の事件についてのテスの告白内容と同種のものであった。にも拘らず、テスはエンジェルを許したのに対して、エンジェルはテスを許さず、「僕の愛していたのは君ではない」「君の姿をした別の女性だ」(p. 255)と態度を豹変させてしまう。エンジェルのこれらの台詞は、エンジェルが愛していたのは「澁刺とした清純な自然の乙女」(p. 148)としてのテスであって、テスの告白が明らかにした a fallen woman としてのテスではないことを示しており、と同時に、この種の過ちにおいては男性は不問に付されるのに対して女性は許されないというヴィクトリア朝期の double standard をエンジェルが体現する人物であることをも示している。すなわち、この場面においてエンジェルの内面を支配するヴィクトリア朝期の double standard がエンジェルをしてテスを拒絶せしめ、その結果、テスが苦難に満ちた人生行路を余儀なくされたとして、ハーディはこの double standard を糾弾しようとしているのである。

次に、*Jude the Obscure* の場合を見てみよう。

この作品において扱われる法律の問題は、この作品の1912年の“Postscript”に次のように明確に述べられている。

The marriage laws being used in great part as the tragic machinery of the tale, and its general drift on the domestic side tending to show that, in Diderot's words, the civil law should be only the enunciation of the law of nature (a statement that requires some qualification, by the way), I have been charged since 1895 with a large responsibility in this country for the present 'shop-soiled' condition of the marriage theme (as a learned writer characterized it the other day). I don't know. My opinion at that time, if I remember rightly, was what it is now, that a marriage should be dissolvable as soon as it becomes a cruelty to either of the parties—being then essentially and morally no marriage—

結婚法が、おおむね、この物語の悲劇的装置として利用されており、家庭という問題について言うなら、この作品の趣旨は、次のことを示すことである。すなわち、デイドロの言葉を借りるなら、民法は自然の法を表明したものにすべきだ、ということだ（ところで、この表現はいささか斟酌する必要があるけれども）。そして私は、1895年以降この国で、結婚の問題が「棚晒し状態」になっていることに関して、大いに責任があるとされている。それはどうなのだろうか。私のあのころの意見は、現在でもその考えに変更はないが、私の記憶に間違いがなければ、こうだ。すなわち、結婚は、当事者のいずれかの側にとって残酷なものになった時点で、解消できるものでなければならない、ということだ。なぜなら、その結婚は、その時点でもはや本質的にも道徳的にも結婚とは呼べないからである。

この作品で扱われている法律問題を更に具体的に言うなら、*The Woodlanders* の場合と同様に、「1857年の離婚法」である。主人公たち

二組の離婚訴訟を通して、この離婚法が改正される必要があることが主張されている。

ジュードとアラベラとの離婚については、それが成立した旨の言及があるのみ、また、スーとフィロットソンとの離婚もいかにして成立したかの描写は一切ない。ただ、スーの以下の台詞があるのみで、語り手（＝ハーディ）は離婚問題をさり気なく扱っている。

“That the decree nisi in the case of Phillotson versus Phillotson and Fawley, pronounced six months ago, has just been made absolute.”⁽²⁴⁾

上掲の引用中の“the case of Phillotson versus Phillotson and Fawley”という訴訟は、Rosemarie Morgan が解説しているように、Richard Phillotson 対 Mrs. Phillotson（すなわちスーのこと）とその恋人 Jude Fawley という訴訟で、スーがジュードという恋人を作って駆け落ちし、更には、夫フィロットソンが許すというのにスーが従わなかったということで、フィロットソンが妻とその恋人ジュードを相手取って起こした離婚訴訟を意味している。主人公たちに適用される離婚法は the Divorce Act of 1857 であって、この離婚法の下では、スーは adultery と夫に対する不服従という咎で、またジュードは人妻を seduction したという咎で裁判で裁かれた後でなければ彼ら二人は法律上自由の身となって結婚できる条件が整わないのである。しかし、この離婚訴訟内容はスーとジュードとの関係の実態を反映するものでは決してない。スーは adultery を犯した訳でもないし、ジュードもスーを seduction した訳でもない。the Divorce Act of 1857 の下では、全く無実の彼らが法律上罪人にならなければ、スーとフィロットソンとの離婚が成立しなかったのである。作中言及されていないが、アラベラの場合も同様であつたと推測される。

更に William A. Davis が指摘するのは、主人公たちは裁判に際して、

実際を偽って、言い換えれば“collusion”(共謀罪)という罪を実際に犯してまで、離婚を勝ち取っているというのである。

(4) 結び

以上見てきたところから明らかなように、ハーディが関心を寄せる法律の問題は各作品の主題に深く関わっている。しかし最後に、法律の問題に焦点を絞って作品を見ていくことの功罪の罪の点を指摘しておきたい。それは、テスの処刑後のことについてである。テスはアレック殺害後エンジェルと共に逃亡し、ストーンヘンジに着いて、自分の死後、妹の Liza-Lu と再婚して欲しいとエンジェルに懇願しているが、その願いが法的に見てどうか、という問題である。

これについて、Judith Weissman が次のように指摘している⁷⁾。Weissman は、1880年代に盛んに議論されていた法律上の問題、つまり、亡くなった妻の妹と再婚することは法的に有効か無効か、すなわち、法律に違反するか否か、という問題を取り上げて『テス』の最後の場面の問題に光を当てている。つまり、当時の議論では妻の妹と再婚することは近親相姦になるということで、法律違反になる、と Weissman は指摘している。ということは、テスは絞首刑にされた上に、彼女の死後の願いまで法律によって否定された、ということになるのである。果たして、この作品の読者たちはこのような結末に納得できるだろうか。あまりに救いが無さ過ぎる結末ということになるのではなかろうか。

それとも、このような結末を通してハーディは、『ジュード』の場合と同様に、法律の改正を求めている、などと言えるだろうか。

注

- (1) 石川康弘著『トマス・ハーディーその知られざる世界―』（北星堂書店、1999年）、p. 21.
- (2) Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London and Basingstoke: the Macmillan Press Ltd., Reprinted in 1973, First published in 1962), p. 61.
- (3) *Ibid.*, pp. 83–85.
- (4) *Ibid.*, p. 88.
- (5) *Ibid.*, pp. 89–90.
- (6) *Ibid.*, p. 330.
- (7) *Ibid.*, p. 58 and p. 330.
- (8) Fred Reid, *Thomas Hardy and History* (Palgrave Macmillan, 2017), p. 77.
- (9) John Stuart Mill, *The Subjection of Women*, Edited, with Introduction, by Susan M. Okin, (Indianapolis / Cambridge: Hackett Publishing Company, 1988), p. 1.
- (10) 浅見公子、「イギリスにおける妻の財産法上の地位（一）」『北大法学論集第12巻3号』、1962年、p. 155.
- (11) Mary Lyndon Shanley, *Feminism, Marriage, and the Law in Victorian England* (Princeton: Princeton University Press, 1989), p. 3.
- (12) Harold Orel, *The Unknown Thomas Hardy* (Brighton: The Harvester Press Ltd., 1987), pp. 127–147.
- (13) William A. Davis, *Thomas Hardy and the Law* (Newark: University of Delaware Press Ltd., 2013).
- (14) Trish Ferguson, *Thomas Hardy's Legal Fictions* (Edinburgh: Edinburgh University Press Ltd., 2013).
- (15) William A. Davis, *op. cit.*, p. 17.
- (16) Thomas Hardy, *Far from the Madding Crowd* (London: Macmillan London Ltd., 1975), p. 64.
- (17) 度会好一、『ヴィクトリア朝の性と結婚』（中公新書）、p. 78.
- (18) William A. Davis, *op. cit.*, pp. 130–131.
- (19) Thomas Hardy, *Life's Little Ironies and A Changed Man* (London and Basingstoke: Macmillan London Ltd., 1977), p. 106.
- (20) William A. Davis, *op. cit.*, p. 80.
- (21) Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (London: Macmillan London Ltd., 1975), p. 101.
- (22) *Loc. cit.*

- (23) *Ibid.*, pp. 101–102. この作品からの本文引用はこの版からであり、以下ページ数は引用に続けて括弧に入れて示す。
- (24) Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (London and Basingstoke: Macmillan London Ltd., 1975), p. 203.
- (25) Rosemarie Morgan, *Women & Sexuality in the Novels of Thomas Hardy* (London and New York: Routledge, 1988), pp. 134–135.
- (26) William A. Davis, *op. cit.*, p. 17.
- (27) William A. Davis, *op. cit.*, p. 45.
- Judith Weissman, *Half Savage and Hardy and Free* (Middletown: Wesleyan University Press, 1987), p. 260.

「同じ戦いを戦う」—— *Angels in America* の 再演が今示すこと

藤 田 淳 志

はじめに

トニー・クシュナー (Tony Kushner) による『エンジェルズ・イン・アメリカ』 (*Angels in America*) は二部構成で合わせて七時間半に及ぶ大作である。1993年にブロードウェイで初演され、トニー賞とピューリッツァー賞などを受賞したほか、アメリカ演劇史において少なくともここ25年間の最高傑作であるとの評価は定着している。2003年にはケーブルテレビネットワーク HBO がマイク・ニコルス (Mike Nichols) 監督でテレビ映画化し、アル・パチーノ (Al Pacino) やメルル・ストリープ (Meryl Streep) などが出演して高く評価された。2018年、本稿で扱うリバイバル上演に際した記事で、ニューヨークタイムズ紙は本作を「おそらく20世紀後半で最も重要な演劇作品」と紹介した (Brantley)。

本稿は初演から四半世紀を経てブロードウェイでの初のリバイバル上演となったこの作品について、オリジナルとリバイバル・プロダクシオンをそれぞれの社会背景とともに論じる。⁽¹⁾1980年代終わりのエイズ危機という特定の文脈で作られた作品を現在の社会背景を考慮に入れて考察することで、すでにアメリカ演劇のキャンオンとされる本作の再評価を試みたい。

リバイバル公演はイギリスのナショナルシアターによるもので、2017年のロンドン公演の後、ブロードウェイのニール・サイモンシアターでほぼキャストを変えずに上演された。この公演はトニー賞の最優秀リバイバル演劇賞を受賞したほか、主人公プライアー (Prior) を演じたアンドリュー・ガーフィールド (Andrew Garfield) とロイ・コーン (Roy Cohn) を演じたネイサン・レイン (Nathan Lane) がそれぞれ最優秀主演男優賞と最優秀助演男優賞を受賞している。

リバイバル公演時のアメリカの状況

クシュナーは作品執筆時と現在を比較して以下のように述べている。

Working on all this stuff right after Reagan had been reelected, it felt very dark. I'm glad that I didn't know back then that at sixty I'd be looking at some of the same fucking fights that I was looking at at twenty-nine. Nothing, no right, is permanent. These are dark, very dark days. But I believe in the resiliency of our democracy and I think we are going to overcome this motherfucker and all his hateful minions and we'll survive.

(下線は引用者による Butler No. 8709-8712)

“same fucking fights” とは、彼が29歳の時のレーガン政権の時と、現在のトランプ政権の時の「戦い」である。1956年生まれのクシュナーが29歳の時、つまり1985年ごろは同性愛者たちの間で猛威を振り始めたエイズについて、レーガン大統領が公の場で一切発言せず、対策が大きく遅れている状況だった。2018年に出版された *The World Only Spins Forward: The Ascent of Angels in America* には1989年、アクトアップのデモに “Killed by Bigotry” と書かれたプラカードを持って参加するクシュナーの写真が掲載されている (Butler No. 772)。『エンジェルズ』のプロ

ードウェイの初演時にはアメリカ国内のエイズによる死者は年間3万人をはるかに超え、ピークに達しつつあった。⁽³⁾ アクトアップなどのアクティヴィズム団体は政治や社会によるエイズへの偏見や対策の遅れを訴え、文字通り生きるための戦いを繰り広げた。エイズをテーマにした演劇を始めとする多くの芸術作品も作られた。エイズ・アクティヴィズムを経て社会の同性愛者たちへの寛容度は大きく上昇し、オバマ政権時の2016年には同性同士が結婚できる「結婚の平等」が実現した。⁽⁴⁾

60歳になったクシュナーの戦いはレーガンと同じ共和党のトランプ政権下での戦いである。現大統領の驚くべき言動をひとつひとつ分析することは本稿の目的ではないが、彼の政権下でのこのリバイバルが上演されたことに作品の再評価をする上で大きな意義があり、そのために重要となる点を押さえておく。ここではトランプが候補者当時、ハフポストが彼に関する記事に付していた脚注を引用する。

“Editor’s note: Donald Trump regularly incites political violence and is a serial liar, rampant xenophobe, racist, misogynist and birther who has repeatedly pledged to ban all Muslims—1.6 billion members of an entire religion—from entering the U.S.” (下線はオリジナル)

ハフポストはオンラインのリベラル系メディアであるが、ここに述べられている「連続する嘘つき」、「激しい外国人嫌悪者」、「人種差別主義者」、「女性嫌い」や「オバマを外国生まれと訴える者」という呼称には全てリンクが貼られ、それが証明されている。トランプが正式に共和党の候補者となった時点でハフポストはこの注をつけるのをやめたが、それ以降の選挙活動において、また大統領となってからもトランプはここに書かれたことをさらに立証するような言動を繰り返している。しかし大統領就任後500日目で共和党内の支持率は87パーセントと非常に高く、ありとあらゆる手段で人々の恐怖や差別心を煽りアメリカを分断することには成功していると言わざるを得ない。⁽⁵⁾

このような状況に反対する人々はどのように戦えばよいのだろうか。『エンジェルズ』が示唆していることを見る前に、アメリカ社会の反応を見ておきたい。2016年の選挙運動中、ミシェル・オバマ大統領夫人は聴衆に以下のように訴えかけ、喝采を浴びた。

“When someone is cruel or acts like a bully, you don’t stoop to their level.

No, our motto is, when they go low, we go high.” (Obama)

果たしてこの高潔なモットーは倫理観が微塵もないように振る舞う大統領と、それでも彼を支持する議員や支持者に通用するのだろうか。ニューヨークタイムズのオプエドコラムニスト、フランク・ブルーニも

One of my overarching fears about the Trump era is that he’ll drag the rest of the country, including the media, down to his level. There’s little he’d love more than to invalidate us, because then he could sell whatever alternative facts and ornate fantasies that he chose to. That’s a chilling prospect, and that’s why we can’t inadvertently abet his cause. (Bruni)

と述べた。彼が危惧するような、トランプによってメディアや国民が彼のレベルに引き摺り下ろされると、トランプが提示するどんなオルタナティブ・ファクト（もう一つの実事、つまり嘘）もまかり通るようになってしまう世界というのは現実に起きつつある。右派メディアシンクレアは2018年3月、傘下の数十の地方局に一齐に「絶対放送」と呼ばれるコメントを読み上げさせた。それはフェイクニュースは危険という最もらしいメッセージだが、トランプが自分を批判するあらゆるメディアをフェイクと呼ぶことが容易に想起される。全米各地の何十人ものアナウンサーが一齐にコメントを読み上げるソーシャルメディアなどで拡散したビデオは、政府がメディアを完全にコントロールする、ジョージ・オーウェル（George Orwell）による『1984』のようなディストピア小説に描かれた世界を思い起こさせるものだった。

トランプ大統領誕生につながったアメリカ社会の状況をわかりやすく

分析したのが、エイミー・チュア (Amy Chua) の2018年の著書 *Political Tribes* である。トランプ当選後、支持層とされたアパラチア山脈周辺に住む白人たち「ヒルビリー」について論じた『ヒルビリー・エレジー』 (*Hillbilly Elegy*) の著者、J. D. ヴァンス (J. D. Vance) の恩師でもあり、子供の教育に熱心な中国系の母親を表す「タイガーマザー」というフレーズを作ったことでも有名なエール大教授のチュアは、左派は右派の偏狭さや人種差別が、右派は左派のアイデンティティ・ポリティクスや、ポリティカル・コレクトネスが国をバラバラにしていると感じていると論じている (166)。黒人、アジア系、ヒスパニック、ユダヤ人らが、自身のアイデンティティを持つことを許され、団結やプライドを持つことを促されてきたのに、白人はこの数十年、それを許されなかった (191)。このアメリカ社会の政治的な「部族化」がそれぞれの部族の結束を強め、現在のアメリカ社会の激しい二極化につながっているという分析は鋭く、また分かりやすくもあるが、将来の展望や解決策を示しているとは言い難い。

では25年前のレーガン政権下でのエイズ禍を描いた作品が、今この問題にどのような示唆を与えうるのだろうか。

リバイバル公演の意義と再評価

『エンジェルズ』の舞台は1985年のニューヨーク。ユダヤ系の主人公プライアー (Prior) は同性の恋人ルイス (Louis) にエイズを発症したことを告げる。耐えられなくなったルイスはプライアーのもとを去り、モルモン教徒でクローゼットの(同性愛者であることを秘密にしている)ゲイであるジョー (Joe) と出会い愛人関係となる。ジョーには抗不安薬中毒の妻ハーパー (Harper) がいる。ジョーの母で敬虔なモルモン教

徒のハンナ (Hannah) はジョーのカミングアウトを受けてソルトレイクシティからニューヨークに出てくる。ハンナはプライアーとも出会い友人となる。プライアーの元に天使が訪れ、彼が預言者だと告げる。裁判所で書記官をしているジョーは歴史上実在した悪名高い弁護士ロイ・コーンと師弟関係にある。コーンはエイズを発症し、プライアーの友人ベリーズ (Belize) が看護師として働く病院に入院する。コーンの元には彼が死刑台に送ったと豪語するエセル・ローゼンバーグ (Ethel Rosenberg) の亡霊がやって来る。プライアーは「止まること」を求める預言を拒否。4年後のエピローグでは、エイズを生き延びているプライアーが“The Great Work Begins. (290)”と宣言する。

本稿の執筆者がこのリバイバル公演を見たのは第一部が2018年2月23日、第二部はその5日後で、どちらも最初のプレビューだった。アメリカ演劇史に残る大作の25年ぶりの再演、しかもロンドン公演を経て評価は折り紙つきということで、観客の間にも歴史に立ち会っているような特別な感覚があった。通常ブロードウェイではスタンディングオペレーションが常態化しているとはいえ、その夜のように3回のカーテンコールはあまり経験したことがないように思う。第二部のパフォーマンスの前には、演出のマリアヌ・エリオット (Marianne Elliot) が舞台上に立って、「これは最初のランスルーだから幕間など長くなるかもしれない」と挨拶をすると観客からは歓声が上がり大きな拍手が送られた。

このリバイバル公演にはいくつもの神がかり的と言ってもいいような、巡り合わせのようなものがあった。第一部の終わり、天使が天井を突き破ってベッドに寝ているプライアーの頭上に現れる。ここでプライアーは“Very Stephen Spielberg. (125)”と、驚きとともに目前で起きているスペクタクルを形容する。このセリフがリバイバルで発せられる時、オリジナルプロダクションで名声を得たクシュナーが『リンカーン』(2012) や2020年公開予定の『ウエストサイドストーリー』など何度も

このハリウッドの巨匠監督の作品で脚本を担当したことが思い起こされる。劇場の観客はクシュナーのその後の活躍を再認識するとともに、新作で演劇に戻ってきて欲しいと思わずにはいられない。

本作の注目を集めるキャストは、『スパイダーマン』などで知られるプライアーを演じたガーフィールドに加え、ロイ・コーンを演じたブロードウェイの大スター、レインである。幅広い役をこなしてきたレインだが、オープンリー・ゲイで、これまでブロードウェイはもちろん映画やテレビでの同性愛者の役も印象深い。レインが演じるコーンの以下のセリフはキャスティングの妙を示す。弁護士コーンはジョーを目の前に、クライアントとブロードウェイで上演中のミュージカルについて電話で話している。

Roy. Yeah, yeah right good so how many tickets dear? Seven? For what, *Cats*, *42nd Street*, what? No, you wouldn't like *La Cage*, trust me, I know. ... (to Joe) You see *La Cage*?

Joe. No, I—

Roy. Fabulous. Best on Broadway. Maybe ever. (12)

レインはブロードウェイミュージカルの『ラ・カージュ・オ・フォル』(*La Cage aux Folles*) の映画版、『バードケージ』(*The Birdcage*) で息子の婚約者の両親との会食のため、女装して母親のふりをするゲイカップルの一人を演じた。オープンリーゲイのレインが、クローゼットのゲイだったコーンを演じて、『ラ・カージュ』が「ファビュラス」(特にゲイ男性が何かよいものを褒めるときに使う表現)だと呟くのは、面白いだけでなく、ロイ・コーンという役にさらなる深みを与えている。

さて、このリバイバル公演で、時代の巡り合わせを感じさせる最も重要で本稿でも注目するのは、この作品にロイ・コーンが登場していることである。アメリカでのリバイバル公演はトランプ政権と重なったが、ロイ・コーンこそトランプを作ったとも言える人物である。まだ駆け出

して父の不動産業を手伝っていたトランプの強引な裁判を引き受けた弁護士としてだけでなく、政財界の大物との接点を提供するなど、公私ともに近い関係だった。ワシントンポストの記者によるベストセラーとなったトランプの伝記 *Trump Revealed* (『トランプ』) は、所有するアパートの入居希望者への人種差別でトランプが連邦政府に訴えられた矢先のコーンとの出会いを次のように描写している。

One day shortly after the suit was filed, Trump and his father visited a top New York law firm, where attorneys advised them to give in to the government. Donald was torn. That evening, as he pondered the decision, Donald walked into a Manhattan discotheque. There he met the man who would help shape his life course as his father began to recede from the picture. This new acquaintance was adept at working the private and public corridors of power. He knew mayors and judges and senators. He moved at a whole other level than Donald Trump. The man's name was Roy Cohn. (59)

コーンはトランプに政府を訴え返すようアドバイスした。決して弱みを見せず、攻撃されたら倍にして反撃する。トランプは今でもコーンの教えを忠実に実行し続けているように思われる。

ロイ・コーンの描写について

クシュナーはなぜこの作品でコーンを描いたのだろうか。コーンは検察官として、エセル・ローゼンバーグがスパイの嫌疑をかけられた裁判でローゼンバーグの弟の偽証を引き出し、死刑を確定させた。判決に影響を与えようと担当判事と不適切な接触を持ったことは作品中で登場人物としてのコーンも語っている (113) が、史実に基づいてもいる⁽⁶⁾。そ

の後1950年代初めのジョセフ・マッカーシー (Joseph McCarthy) 上院議員によるいわゆる赤狩りで、彼の右腕として活躍した。下院非米活動委員会ではソビエトとの繋がりや共産黨員ではないかと疑いをかけられ多くの人々が職を追われるなどしたが、その中にはコーン自身がユダヤ人でありながらユダヤ系の人々も多く含まれていた。また、性的指向を隠して生きることから脅迫に弱いとして、多くの同性愛者もスパイや共産主義者との疑いをかけられた。マッカーシーの失脚後もコーンはニューヨークで政財界の黒幕として、多くの政治家や財界人、有名人との繋がりを持ってその名を轟かせた。

コーンは生涯同性愛者であることを認めず、またエイズにかかっていることも認めなかった。エイズ関連症で1986年に亡くなったが、クシュナーが彼を描ききっかけの一つになったのはエイズによって亡くなった人を追悼するためのエイズメモリアルキルトのコーンのパネルを見たことだった。そこには Bully、Coward と並んで Victim と書かれていた (Butler: No. 823-825)。このわずか3語が雄弁に物語るように、コーンは悪名高い政財界のフィクサーで、同性愛者でありながら同性愛者たちから忌み嫌われる存在であったと同時に、エイズの犠牲者でもあった。『エンジェルズ』はその複雑な人間コーンを多面的に描こうとしている。

コーンのセクシュアリティについてはトランプも自伝の中で以下のよう

Roy (Cohn) never talked about it. He just didn't like the image. He felt that to the average person, being gay almost synonymous with being a wimp. (Kranish 111)

コーンは同性愛者が持つ弱いイメージを嫌っていた。クシュナーの創作した作中のコーンは自らのアイデンティティを次のように述べる。

Like all labels they tell you one thing and one thing only; where does an individual so identified fit in the food chain, in the pecking order? Not

ideology, or sexual taste, but something much simpler: clout. Not who fucks me, but who will pick up the phone when I call, who owes me favors. This is what a label refers to. Now to someone who does not understand this, homosexual is what I am because I have sex with men. But really this is wrong. Homosexuals are not men who sleep with other men. Homosexuals are men who in fifteen years of trying cannot get a puissant antidiscrimination bill through City Council. Homosexuals are men who know nobody and who nobody knows. Who have zero clout.

(46)

ここでコーンは社会が自分を規定しようとするセクシュアル・アイデンティティを強く否定している。彼にとっては自分が社会の食物連鎖のどの地位にいるか、誰に恩を売っているかが重要なのだ。またコーンは黒人看護師ベリーズに自分は人種差別主義者ではないと語る。

I'm not prejudiced, I'm not a prejudiced man... These racist guys, simpletons, I never had any use for them—too rigid. you want to keep your eye on where the most powerful enemy really is. I save my hate for what counts. (154)

コーンにとって重要なのは社会に半強制的に付与されるアイデンティティよりも権力である。権力を増大させ、行使するためには法が重要だが、自分は法を作ったり都合よく解釈したりできる立場である。コーンは、愛情を注ぎ、また自分の罪を隠すために利用しようとしている弟子のジョーに以下のようにアドバイスする。

You want to be Nice, or you want to be Effective? Make the law, or subject to it. Choose. (113–114)

舞台上のコーンを見ながら、彼の信条が現大統領に受け継がれていることは観客にも通じるはずだ。その信条とはどんなにあからさまな嘘でも、権力を持つものが大きな声で訴え続ければまかり通るといふものだ。こ

れにはそれをやってのける弁護士が重要だ。トランプは2016年の大統領選のロシア疑惑に際して、「自分のロイ・コーンはどこにいるんだ」と言ったという (Schmidt)。何があってもトランプを守るといいながら、のちに立場を変えた顧問弁護士マイケル・コーエン (Michael Cohen) や元ニューヨーク市長で、トランプにスキャンダルが生じるたびにテレビに駆り出され、“Truth isn’t truth.” などの常軌を逸したかのような発言でメディアを攪乱するルディ・ジュリアーニ (Rudy Giuliani) の役割も同じである。作中コーンが自分が人種差別主義者であることを否定するように、トランプも次のように発言する。

“No, no, I’m not a racist. I am the least racist person you have ever interviewed, that I can tell you.” (Smith)

2人に共通するのは、権力が絶対でその他のアイデンティティにはこだわりがないということだ。トランプは不動産業を始めたころから黒人の入居を制限したり、オバマをアメリカ生まれではないと主張したり、有色人種の女性議員に国へ帰れと言ったりするなど人種差別を繰り返している。しかし彼は何らかの強い理由で特定のマイノリティを憎んでいるわけではない。自分の権力を追求した結果が差別につながり、それを気にかけないだけである。だからといって、自分が差別主義者でないというのはコーンの自分を同性愛者ではないという主張にも通じ、社会では意味をなさない。

コーンの描写はリバイバル公演では現在のトランプが大統領であるアメリカについて考えるきっかけになる。この作品は現在の状況についてどのような視点を提供してくれるのだろうか。

“The world only spins forward” が今改めて示す意味

プライアーは初め天使が現れたことに驚き、自分が預言者と言われても戸惑うばかりだったが、次のように役割を受け入れる。

So, maybe I'm a prophet. Not me, alone, all of us, the, the ones who are dying now. Maybe that virus is the prophecy? (176)

自分だけではなく、HIV ウィルスに感染し、死にゆく者たちが皆預言者であると理解する。しかし、天国は人類の急速な進歩のためサンフランシスコ大地震の後のようになってしまっているため、天使は「止まること」を要求する。プライアーは生きることへの中毒が人間の習性であるとし、動き続けることを要求する。

I don't know if it's not braver to die. But I recognize the habit. The addiction to being alive. We live past hope. If I can find hope anywhere, that's it, that's the best I can do. It's so much not enough, so inadequate but... Bless me anyway. I want my life. (279)

第二部の最終シーンのエピローグではプライアーは観客に語りかける。

We won't die secret deaths anymore. The world only spins forward. We will be citizens. The time has come.

Bye now.

You are fabulous creatures, each and every one.

And I bless you: *More Life*

The Great Work Begins. (下線は引用者 290)

エピローグはそれまでのシーンから4年後、1990年に設定され、プライアーはなんとかエイズを生き延びている。セントラルパークのベセスダの噴水の前で、登場人物たちは政治や未来について語る。

彼のいう「世界は回転しながら前に進むしかない」とは、常に進み続けるがそれは回転しながら、つまり進歩とバックラッシュを繰り返しな

がら、それでも生きることをやめず、戦い続けることをやめず、届かない理想に向かわなければならないというメッセージだ。以下はハーパーが夫を捨て、ニューヨークから西海岸へと旅立つ飛行機の中でのセリフである。

Nothing's lost forever. In this world, there's a kind of painful progress.
Longing for what we've left behind, and dreaming ahead. At least I think that's so. (284-285)

ハーパーは自分の唯一知る世界であるモルモン教会のもとで結婚したゲイの夫との生活を断ち切り、西海岸へと旅立つ。変化して進むには痛みを伴うが、その痛みや犠牲に注意を払いながら前に進むしかない。バックラッシュを繰り返す歴史の中で、そこで犠牲となったものの歴史を見落とさず、痛みを感じながらも前に進まなければならない⁽⁷⁾。

クシュナーはレーガン政権やエイズとの戦いの中、一生に一度の戦いと思いながら作品を執筆した。この作品の多岐にわたるテーマの一つである同性愛者の権利という観点から言えば、エイズは有効な治療を受けられれば「死なない病気」になり、驚くべき速さで社会の偏見は和らぎ、「結婚の平等」は実現した。しかしアメリカの歴史を振り返れば明らかのように、やはり歴史はバックラッシュが起き、それは多くの市民によっても支持され、全ての進歩が破壊される過程にあるようにも見える。歴史は回りながら、バックラッシュを繰り返しながら、それでも進むしかない。ベリーズが言うように、アメリカ国歌で歌われる「自由」はあまりに高いところにありすぎて誰も届かない。

That white cracker who wrote the National Anthem knew what he was doing. He set the word "free" to a note so high nobody can reach. That was deliberate. Nothing on earth sounds less like freedom to me. (230)

あるいは、上で引用したエイミー・チュアが二極化を分析した著作の締めくくりに希望を持って引用しているのは、ラングストン・ヒューズの

「アメリカがアメリカたりえますように」である。

O, yes,
I say it plain,
America never was America to me,
And yet I swear this oath—
America will be! (210)

アメリカは今もまだアメリカではない。ハーパーが痛みを伴う進歩は“dreaming ahead”（未来に向かって夢を見ること）と言うように、またベリーズが自由は誰も届かないところに設定されると言うように、クシュナーの言う「戦い」も終わることがない。アメリカの目標はそもそも到達不能で、戦いをやめないことでしか、アメリカを維持できないのだ。現大統領がバックラッシュだとすれば、すでに振り子はまた逆に揺れ始めている。2017年の大統領就任式の翌日に行われた Women’s March, 女性を中心にセクシュアル・ハラスメントや性的暴行に対して声をあげた #MeToo 運動, 高校生を中心とした銃規制を訴える #NeverAgain などがある。また2018年の中間選挙の結果、アメリカ議会もこれまでにないほど多様性に富むものになった。『エンジェルズ』はレーガンやエイズの時代の一つの戦いを描きながら、リバイバル公演では、現在起きているもう一つの戦いと、またこれから続いていく戦いについても大きな示唆を与える。

注

- (1) オフ・ブロードウェイでは2010年にシグネチャーシアターでリバイバル上演された。
- (2) レーガンは1987年、25,000人が亡くなるまで公の場でエイズに言及しなかった。(Fujita 114)

- (3) CDC Fact Sheet Today's HIV/AIDS Epidemic を参照。(https://www.cdc.gov/nchhstp/newsroom/docs/factsheets/todaysepidemic-508.pdf)
- (4) エイズ危機以降の LGBT のための社会運動は直線的な進化とは言えず、同性婚実現への過程には注意を払わなければならない点が多くある。例えば、「結婚の平等」が主に白人で比較的裕福な同性愛者に益するものであり、LGBT コミュニティ全体で見れば有色人種やトランスジェンダーに対するヘイトクライムの増加などが見過ごされていたことなどがある。
- (5) 本稿執筆中の、9月25日アメリカ下院議長はついに大統領弾劾のための調査を始めることを発表した。(Fandos)
- (6) Hoffman 99-101, Zion 65-70 を参照。
- (7) ここにはヴァルター・ベンヤミンの「歴史哲学テーゼ」に登場する、パウル・クレーの絵をモチーフとした新しい天使に基づいた歴史観が反映されている。

引用文献

- Brantley, Ben and Jesse Green. "The Great Work Continues: The 25 Best American Plays Since 'Angels in America.'" *New York Times*. May 31, 2018. https://www.nytimes.com/interactive/2018/05/31/theater/best-25-plays.html (accessed Sep. 30, 2019)
- Bruni, Frank. "The News Isn't Fake. But It's Flawed." *New York Times*. May 19 2018. https://www.nytimes.com/2018/05/19/opinion/sunday/fake-news-trump.html. (accessed Sep 30, 2019)
- Chua, Amy. *Political Tribes: Group Instinct and the Fate of Nations*. New York: Penguin Press, 2018.
- Fandos, Nicholas. "Nancy Pelosi Announces Formal Impeachment Inquiry of Trump." *New York Times*. Sep. 24 2019. https://www.nytimes.com/2019/09/24/us/politics/democrats-impeachment-trump.html (accessed Sep.30, 2019)
- Fujita, Atsushi. "Queer Politics to Fabulous Politics in *Angels in America*: Pinklisting and Forgiving Roy Cohn." *Tony Kushner: New Essays on the Art and Politics of the Plays*. Ed. James Fisher. New York: McFarland & Company, 2006.
- Hoffman, Nicholas von. *Citizen Cohn: The Life and Times of Roy Cohn*. Garden City, NY: Doubleday, 1978.
- Isaac Butler. *The World Only Spins Forward: The Ascent of Angels in America*. New York: Bloomsbury Publishing, 2018. Kindle ebook file.

- Kranish, Michael and Marc Fisher. *Trump Revealed: The Definitive Biography of the 45th President*. London: Simon & Schuster, 2016.
- Kushner, Tony. *Angels in America*. London: Nick Hern Books, 2017.
- Obama, Michelle. "Michelle Obama's Speech at 2016 Democratic National Convention." *NPR*. Jul. 26, 2016. <https://www.npr.org/2016/07/26/487431756/michelle-obamas-prepared-remarks-for-democratic-national-convention> (accessed Sep. 26, 2019)
- Schmidt, Michael S. "Obstruction Inquiry Shows Trump's Struggle to Keep Grip on Russia Investigation." *New York Times*. Jan. 4, 2018. <https://www.nytimes.com/2018/01/04/us/politics/trump-sessions-russia-mcgaahn.html> (accessed Sep. 30, 2019)
- Smith, David and Kevin Rawlinson. "Trump insists 'I am the least racist person' amid outrage over remarks." *Guardian*. Jan. 15, 2018 <https://www.theguardian.com/us-news/2018/jan/15/i-am-not-a-racist-trump-says-after-backlash-over-shithole-nations-remark>. (accessed Sep. 30, 2019)
- Zion, Sidney. *The Autobiography of Roy Cohn*. Secaucus, NJ: Lyle Stuart, Inc., 1998.

Teaching the 1960s to Japanese College Students

Russell NOTESTINE

In the spring semester of 2019, a freshman college student would most likely have been born in 2000 or 2001. This would be about 40 years after the final year of the 1960s which would be the same as myself looking back to the early 1920s. With this perspective, it is certainly not unexpected that recent high school graduates would know very little about the amazingly transformative 1960s. Despite this ever-widening gap, it still personally bothered me when students not only knew very little about the iconic events, cultural transformations, music and movies of the 1960s, but often showed very little interest in even hearing about them. With this background, the idea to begin a liberal arts seminar entitled *The History and Culture of the 1960s Through Music and Movies* was formed out of my own personal crusade to share all of the amazing and interesting things that happened in this decade and not to let them fade away and be overridden by the very insular world of today's smart phone generation. This paper will discuss the rationale for, implementation of, and early observations from the first five years of this seminar class.

The initial rationale for the class was my own personal belief that the 1960s has been the single most important and influential decade in modern western society. The scope of the social changes that transpired are still very relevant today: music, movies, fashion, technology, sexual sensibilities, social charges,

expression, geo-political events, and race relations are some of the major areas of change that took place. The most important specific events would include: the Vietnam War, anti-Vietnam war protests, assassinations of John and Robert Kennedy as well as Martin Luther King, the Apollo moon landing, the Beatles coming to America, the explosion of hippie and beatnik culture, widespread drug use among others. America and the world are still trying to come to terms with many of these changes. The framing and context of many of today's social issues and divisions are often directly influenced by the huge social changes that exploded during the 60s.

This paper will focus mainly on the efforts that I have personally undertaken to create, plan and implement a class taught to Japanese university freshmen about the 1960s. Specific curriculum and syllabus issues will be addressed in addition to various anecdotal observations and student survey data about the class.

Finally, a couple of caveats about this paper: 1) Readers looking for academic scholarship about the deeper meaning of the 1960s and perhaps some fresh, new insights therein will be severely disappointed. The focus of this paper is what I have chosen to teach to 18-year-old students at Aichi Gakuin University which necessarily means that most of the content will be considered common knowledge to any reasonably educated English speaker over the age of 30. 2) I will address the content in the order that it is taught to the student. This means that certain basic topics such as music will not be addressed in one place but rather in different parts of the paper.

The Basic Syllabus

The first basic consideration was to balance academic content vs.

entertainment. It unfortunately seems more and more difficult to teach many students classic style academic content. I thus endeavored to keep the class reasonably simple and focus on what I believe to be the most important overriding iconic theme of the decade: youth rebellion leading to radical social change. Most of the changes that took place had a basic relation to a desire to change and redefine social norms, such as the civil rights movement and the hippie sub-culture's protests against the Vietnam War.

The 1950s: The lead up to the 1960s

Obviously, the end of the 1950s define the starting point of the 1960s and it is not at all surprising that many of the important themes of 1960s had already been set in motion. The early incidents of the civil rights movement were already beginning and the youth rebellion that would explode in the 1960s was starting to take form in well-known films such as *Rebel Without a Cause* (1955). In general though, the feel of the 1950s is indeed quite different. There was very little long hair as American schools still had traditional codes of appearance and what will seem by today's standards shockingly white-male centered basic sensibilities. Black athletes and musicians were just starting to become household names. The swagger and cockiness of Mohammed Ali was still very far away. Young people still dressed up nice and cute and went to the local drive-in burger restaurant for soda floats and fun. The social narrative was by and large far more controlled and sedate compared to what was coming and thus offers a very clear contrast which serves to even further enhance interest in the subject matter.

In this seminar class, the 1950s are introduced to the students through clips from the films *Back to the Future* and *American Graffiti* as well as the music

of Chuck Berry and Elvis Presley. *Back to the Future* is especially ideal as it shows a slick Hollywood-style stereotypical image of the 1950s seen from a 1985 perspective. The stereotypes are indeed humorously exaggerated which helps show themes of conformity and social/economic abundance that can help students understand how this era helped launch the 1960s.

From Blues Music to Rock and Roll

As for music, the most important anthems of the 1960s were Bob Dylan style protest music and psychedelic Beatles music which both had their elemental roots in the blues, R & B and early rock music of the 1950s. I have very recently started using *The Blues Brothers* to introduce blues music and the history of blues music to students. It works surprisingly well. It has an outstanding array of legendary performers and styles, and they are presented in perfect order: 1) James Brown sings a gospel number in church, 2) Ray Charles sings a blues number, 3) Aretha Franklin does soul, 4) The Blues Brothers band are humorously forced to sing country which offers a contrast to blues music and finally, 5) the Blues Brothers perform modern-style blues and Elvis Presley. Obviously, this content is all presented in a very popular and entertaining movie so the students end getting a good basic blues music education.

After the film, it is much easier to show how rock evolved from the blues using Chuck Berry and Elvis. Chuck Berry was very innovative in his use of guitar riffs to jazz up basic rhythm and blues styles. Elvis of course used his amazing talent to introduce this music to a white audience. Indeed, one of things that has personally shocked me is the fact that probably less than 5% of young students today have even *heard the name* Elvis Presley. It is quite personally satisfying for me to introduce him. Although at the time, his gyrating

singing style was considered to be quite vulgar by older conservative people, his songs and lyrics are by modern standards very wholesome and pure and thus serve as another good example of the style of the 1950s in contrast to the more turbulent 60s.

***Some Like it Hot & Breakfast at Tiffany's*: Movie Themes Begin to Change**

The films *Breakfast at Tiffany's* and *Some Like it Hot* are shown in their entirety to the class early in the first semester. While this obviously introduces students to two wildly popular female icons of the 1950s~60s (Marilyn Monroe and Audrey Hepburn), the main purpose is to show that in the late 1950s, these two films were revolutionary and are a good introduction to what will come later in the decade. *Some Like it Hot* features two men in drag while *Breakfast at Tiffany's* casts Audrey Hepburn as a lonely prostitute. These films look forward to the even more revolutionary art cinema to come later in decade. *Some Like it Hot* brilliantly looks at sexuality and gender identity—very risqué topics for that era. Meanwhile in *Tiffany's*, Audrey Hepburn plays the role of a lost, lonely and confused call girl who is looking for love in all the wrong places. These films truly pushed the envelope of 1950s sensibilities.

JFK: From Camelot to Tragedy

Many consider the shocking JFK assassination as the event that triggered the tumultuous events that followed later in the decade. It therefore seems to be the best starting point for beginning to study the actual events of the decade. This event has to stand out as the single most shocking event of the 60s in

the US and perhaps even in the world. JFK's youthful exuberance personified the youthful energy of the decade in general, and sadly his sudden violent death was the first of several shockingly violent events which would also unfortunately characterize the decade. For students to understand the depth of the shock at the assassination, they must first understand how deeply loved and idolized JFK and his family were. I spend a lot of energy asking students to remember his life rather than only his death. Only by understanding the magic of the "Camelot presidency" and how popular he, Jackie and his family were can students truly understand the scope of shock and tragedy that the world felt that day and brought even the stoic Walter Cronkite to tears.

Although videos are grainy and usually black and white, JFK's charm and wit as well as his and Jackie's grace beauty still work very well. Despite being a bit difficult to find given the obsession with the events of November 22, I managed to find some good YouTube clips of the JFK presidency to show in advance of the assassination. I was personally surprised at the emotional reaction from students in class. I actually once noticed a student wiping away tears while watching the footage of the funeral and two-year-old JFK Jr. giving his famous salute to the funeral procession in front of Jackie.

Beatlemania!

Probably the highlight of the class for most students was the introduction of the Beatles and Beatlemania. While almost all students have at least heard of the Beatles, many don't really know any of their songs outside of a few such as *Help*, *Let it Be*, *Hey Jude* and *Yesterday*. To truly understand the scale and meaning of the popularity of the Beatles, it is necessary, to understand how they burst onto the scene in 1963/64 and also to understand their personalities

and who they were. The Beatles insane popularity is not simply explained by their music. The freshness of the rock and roll experience, their very charming and witty personalities, and the still relative novelty of television also significantly contributed. Showing highlights from the Beatles documentary *Beatles Anthology* along with watching the excellent film *Hard Day's Night* was indeed the most popular part of the class. In addition to the Beatles, a very brief introduction to the Beach Boys and the Rolling Stones was also given. However, I focused mostly on the Beatles for two main reasons: 1) their story and evolution perfectly reflect the changes that took place in the 60s, and 2) Their story is much better documented on DVDs such as the 8-DVD, 16-hour *Beatles Anthology* series.

The Civil Rights Movement

Certainly one of the most important social upheavals of the 1960s was the Civil Rights Movement led most notably by Martin Luther King. Not a very simple topic to investigate in any sort of depth in only a two-to three-week period. For topics that seem complex, it is important, I believe, to simplify complex topics into their elemental themes and for the Civil Rights Movement, I have used the key words of the American Declaration of Independence to do this: *We hold these truths to be self-evident that all men are created equal*. These words were written by Thomas Jefferson whose eloquent ideas of freedom and democracy have helped to form the modern western world. But there will forever be an asterisk of some kind after these words due to the inconvenient truth that they were written by a slave owner. The same words were invoked by Lincoln at Gettysburg when he noted that the nation was “dedicated to the proposition that all men are created equal.” Finally, they are once again mentioned by Martin

Luther King in 1963 quite literally in the shadow of Lincoln on the steps of the Lincoln Memorial. King implores the nation to “rise up and live out the true meaning of its creed ‘*We hold these truths to be self evident that all men are created equal.*’”

This is all explained to the students and supported with video clips of King’s speech and a reading of Lincoln’s speech as well. It really is amazing how long these changes took. The basic civil rights of black Americans were very commonly abused even after I myself was born. The famous videos of police violently breaking up peaceful protest marches in Birmingham, Alabama with fire hoses have a very strong impact. Finally, the film *In the Heat of the Night* was shown to the students. It was made in the year 1967 at the height of the ongoing civil rights movements and one year before the assassination of Martin Luther King. (The brilliant eponymous theme song by Ray Charles is also another wonderfully powerful example of blues/soul music). The story also illustrates well (much better than any history book or documentary) the feel of small-town reality of racism in the South. Indeed the movie’s title shares the same metaphor that MLK used when he referred to *the heat of oppression*. The movie’s most famous line is when asked by the local white police chief what they call a “nigger boy like you” up in Philadelphia, Sydney Poitier in the role of Virgil Tibbs delivers his single most famous cinematic line, “They call me *MISTER* Tibbs!” In the end, the movie optimistically tells a story of black/white redemption and healing as the two men work together and come to respect each other by the end of the movie for a very satisfying conclusion.

Vietnam War, Peace Movement & Hippies

I personally feel that the most enduringly important aspect of the 1960s was

the anti-mainstream, hippie rebellion that developed mainly as a reaction to the war in Vietnam. In this class, not a lot of time is spent on the details of the war itself, but rather the perception of the war back home. This is when the flower children and beatniks of San Francisco developed into psychedelic hippies who glorified social rebellion through their music and anti-social worldview. Much of this was fueled by experimentation with drugs. Many of the lasting images, ideas, fashion, music and movies were based upon the idea of getting “groovy” and tuning out the establishment.

The Beatles Grow Up

One of the most important events in the evolution of the Beatles was the Beatles meeting Bob Dylan. Bob brazenly told them that their music was essentially nice and cute but intellectually vacuous. After this, as John Lennon later pointed out, “We were all potty over Dylan.” Soon after this, they visited California for a concert tour and started experimenting with drugs. These two events completely changed everything about their outlook, music and personality. They soon stopped touring and started reflecting the social changes taking place. The albums *Rubber Soul* and *Revolver* were released after this and are regarded by most to be among their very best (this writer personally favors *Rubber Soul*). Songs such as *In My Life*, *Eleanor Rigby* and *Norwegian Wood* told stories with poetic depth, imagination and sensitivity.

As they began to stop focusing on live concerts, they quickly started to employ more sophisticated studio techniques such as double track recording, orchestration, sound loops as well as the use of different instruments. This creative explosion continued through 1967 with the release of the album *Sgt. Pepper's Lonely Heart's Club Band* which is widely considered as the most

brilliant concept album ever made. It was the first major album with an overall theme and was indeed a psychedelic masterpiece. The visual and poetic imagery and emotions conveyed by the lyrics were absolutely brilliant. It is even more amazing when you consider that during the Sgt. Pepper recording sessions, the masterpieces *Penny Lane* and *Strawberry Fields Forever* were written and recorded, but were not included on the Sgt Pepper album! George Martin (the Beatles' producer) has said this not including these songs on the album is his greatest regret today.

Rebellion through Film

The films used to focus specifically on the youth rebellion aspects of the era are *The Graduate*, clips from *Easy Rider* and *Bonnie and Clyde*. *The Graduate* is widely considered to be *the* film of the 1960s because it parodies the emptiness of mainstream society and by default glorifies youth culture. It is however a very abstract and dark film that paints a negative picture of American society. It is quite difficult, and in many cases, impossible to get most students past this. For this reason, it has proven to be the most challenging part of the class for me. In the past, I have shown this film as one in a series of films telling the story of the history of Hollywood. However in this class, I focused on explaining the social setting of the era which significantly helped the students grasp the main themes dealing with generational and social gaps between young people and their parents of this era. It is still very difficult to get students to try to look past the twisted storyline and appreciate the abstract message the director is trying to convey.

The two films *Bonnie and Clyde* and *Easy Rider* are both films dealing with young people on the go and running away from society, and in this way,

they are metaphors for some of the most important social themes of the whole decade. They brilliantly capture the glorification of breaking away and enjoying the complete freedom of having nothing—a la Kris Kristofferson's *Bobby McGee* sung by Janis Joplin, "*freedom's just another word for nothing left to lose.*"

The Evolution of Rock Music

The explosion of personal freedom and expression that took hold in the later 1960s founded the beginning of what would later come to be known as hard rock and heavy metal. Jimi Hendrix exploded onto the scene in 1967 and took rock music to entirely new and more hardcore psychedelic areas. Idolized by his peers (including the Beatles and Rolling Stones), Hendrix took the rock world by storm with his high energy and high impact songs like *Purple Haze*, *Foxy Lady*, and *Fire*. Hendrix took emotional, spiritual and psychedelic expression on stage to new groundbreaking heights. For the older generation as well as some in the younger generation however, rock music had gotten completely out of hand. Hendrix at one point famously burned his guitar on stage and later Jim Morrison of the Doors actually exposed himself on stage and was arrested during the show by the Miami Police Department. Tragically yet perhaps not so surprisingly, these two artists paid the ultimate price for the decade's intense, out-of-control trajectory of drugs, social revolution and pushing the envelope in general. They both died young at the age of 27 and both deaths were related to drug usage.

1960s in retrospect

The effects of the social and political changes that took place in the 1960s have proven to be very lasting and are indeed still very real today. The elemental idea of social discontent and protest for change that exploded then still widely exists today. Recently gay and LGBTQ civil rights movements have taken place. The “Occupy Wall Street” movement of the past two years as well as the Bernie Sanders political revolution which swept over a significant part of the American electorate in 2016 are both very 1960s-like movements with very similar objectives. Even in Japan, the protests against prime minister Abe’s positions on self-defense have sometimes had the feel of 1960s style protests. Expressive fashion and music are still very influenced by the 1960s. Movies and society in general are much more tolerant of sexual content. The 1960s are certainly the object of much sentimentality now that its history is over fifty years old.

To tie all of the era together as well as to demonstrate the powerful sense of sentiment that the era still holds, the final film students are shown is *Forrest Gump*. This is a film which is essentially a sentimental look back at the era and its events by a “baby boomer” director (Robert Zemeckis). *Gump* is about a young boy named Forrest Gump who grows up in the 1950s~1980s. The film features many of the music and events that have been presented and studied in class: Elvis Presley, Bob Dylan, civil rights, Vietnam War, hippies, drugs, JFK, John Lennon, Marilyn Monroe etc. In previous classes that I have taught, *Gump* (like *The Graduate*) was shown in the context of the history of Hollywood movies. However, the fact that the students in this class had already studied so much of the culture and history of the 1960s very much helped them to follow the movie and understand much more of the content. I was personally quite gratified by this.

In conclusion, I am reasonably satisfied with the level of interest most of the students showed in the content of the class. It was not always as easy and fun as simply listening to Beatles songs. Many ESL teachers and researchers claim that it's better to focus on more modern and relevant content when using films to teach English which leads some to choose modern Disney and action films in class. I completely disagree with this. It has been shown that when stimulating new content is learned through a second language, the learner more deeply comprehends and acquires the language. The 1960s would certainly, in my mind, pass the test of being stimulating and interesting! Today's students seem to be more and more engrossed in a wasteland of social media and smart phones in an immediate-gratification centered world. It is therefore, I believe, an especially valuable experience for them to study another era and try to understand the hearts and minds of people from another generation especially when these are the hearts and minds of their parent and grandparents.

References

- Brode, Douglas, (1990), "The Films of the sixties: From La Dolce Vita to Easy Rider." Virgin Books, UK.
- Ebert, Roger, (1994), "Forrest Gump", *Chicago Sun Times*. July 6, 1994.
- Fairbanks, Brian, (1999), "Tom Hanks Makes it Work", *IMDb User Reviews for Forrest Gump*. April 18, 1999.
- Groom, Winston, (1986). "Forrest Gump." Washington Square Press.
- Hays, Charlotte, (2009). "The Best Conservative Movies of the Last 25 Years", *National Review*, Feb 13, 2009.
- Hoff, Benjamin, (1983). "The Tao of Pooh." Penguin.
- Mordden, Ethan, (1990). "Medium Cool: The Movies of the 1960s." Knopf Doubleday, New York.
- Notestine, Russell, (2005). "A Year at the Movies." Sankeisha, Nagoya.

Vocabulary Acquisition: Verbs First

R. Jeffrey BLAIR

Abstract

This paper examines and evaluates a representative self-study book for increasing English vocabulary. Some ideas are presented for integrating the intake of vocabulary and their grammar patterns and maximizing the retention of both.

Riding to work on the Nagoya subways I frequently see students studying. One can't help but notice many of these students reading through self-study books for building up their English vocabulary. They often have a red plastic sheet to cover the page that they are reading, making the targeted words and phrases, which are printed in red letters, invisible. It can double as a book marker. Vocabulary is perhaps their primary concern when focusing on exams, and they are always focused on exams (Blair 2017, 239 and 2019, 64).

Enchanted by this ubiquitous and powerful tool, I bought myself a couple of these books in order to have a closer look. The series title of the books I purchased was KIKUTAN in huge, evenly spaced katakana. Thinking that the katakana title must be a foreign loan word (外来語), I imagined that it meant “kick turn”, referring to flip turns, a technique that helps competitive swimmers (in free style and backstroke) achieve a smooth turn and a fast finish. Ah, ha ... the book's aim is to help you acquire English vocabulary as effortlessly

and quickly as possible, I thought. Closer inspection, however, revealed an explanation of the title in small letters. The title actually comes from two separate words KIKU (聞く, to listen) and TAN (単語, vocabulary). Indeed, each book does come with a two-disk set of CDs for listening practice.

The yellow book KIKUTAN (Basic) 4000 and green KIKUTAN (Advanced) 6000 introduce 1,120 vocabulary words each: 16 words/daily lesson × 70 lessons. Words are presented in a specific order within each level: first verbs, then nouns, followed by adjectives, and finally adverbs. KIKUTAN (Basic) includes some special sections: words with multiple meanings (7 lessons), vocabulary for daily conversation (6 lessons), and special topics: 1 lesson on politics, 2 lessons each on people, science, and economy, and 3 lessons on society. They follow the same verb – noun – adjective order of presentation within each of these groups of lessons.

Three Study Modes

Each lesson consists of 16 vocabulary words presented in three study modes: (1) listening to each target word and a one-word translation of each while reading basic definitions in Japanese, (2) reading the target word inside a couple of phrases with Japanese translations of those phrases, and (3) reading the words in the context of a full sentence with its translation.

I would now like to evaluate this study technique, using KIKUTAN 4000 as an example, and offer some constructive criticism. First, I will point out what I consider to be its *advantages* then its *disadvantages* and follow that up with some ways to *improve* the process of retaining target vocabulary and learning how to use it.

To a certain extent the study technique follows A. J. Hoge's first four rules

for language acquisition (see Blair 2016, 7). The chants on the set of two CDs for study mode 1 allow students to *hear* each target word pronounced three times, first by itself quickly followed by a Japanese equivalent. Then the word is repeated with a pause, which could be used for repetition practice. After a group of four words are covered in this way all four words are quickly repeated again. Background music and the pause create an easy listening atmosphere and encourage the students to chant along. The CDs are intended as an introduction, but can also be used as a quick *review*. Thus to a certain extent students are “learning with their ears” (Rule #3) and may take the time to learn the pronunciation “deeply” (Rule #4) by listening to, and perhaps repeating, the words many times.

Study modes 2 (in phrases) and 3 (in sentences) put the target words in grammatical context with Japanese translations, without explanation of grammar rules (A. J. Hoge Rules #1 and #2). The target words are usually presented as a given part of speech: verb, noun, adjective, or adverb. The forms of the phrases appearing in study mode 2 vary accordingly. Let’s take them one at a time. The *verb* in phrasal context is nearly always in its dictionary form without any subject provided (example 1). Then typically it is followed by a single object or a prepositional phrase. Once in a while a typical preposition appears *without its noun phrase* (example 2). If the verb is an intransitive one, by the way, this can mislead students into thinking that the verb is a phrasal verb.

Example 1. **save** money for retirement

Example 2. **lend** support to ...

Very occasionally verbs in their –ed form (ie. past participle) and –s form (plural subject) appear (examples 3 and 4, next page).

Example 3. be **designed** for children

Example 4. This article **suggests** that ...

Equally rare in this phrase section is a short, but full sentence (examples 5 and 6). These sentences are always kept short.

Example 5. What do you **mean** by that?

Example 6. All roads **lead** to Rome.

When the target word is a *noun* about 2/3 of the phrases do not contain a verb. The noun may be in a simple noun phrase (example 7) or an embedded noun phrase (examples 8 and 9). Sometimes the noun functions as an adjective (example 10).

Example 7. a danger **signal**

Example 8. show of **force**

Example 9. a **moment** of silence

Example 10. **brain** damage

Sometimes a verb precedes the target word and its noun phrase (examples 11 and 12).

Example 11. deliver a **paper**

Example 12. catch **sight** of ...

When the target word is an *adjective*, the phrases are even less likely (about 1/5 of them) to have a verb unless the target word is a predicate adjective (examples 13 and 14, next page).

Example 13. be **worth** the time

Example 14. look **familiar**

When the target word is an adverb, it seems to occur in one of three positions: in the verb cluster—between the subject (usually omitted) and the object, which may also be omitted—(example 15); at the end of the sentence (example 16); or in front of the adjective which it modifies (example 17).

Example 15. I don't *actually* remember ...

Example 16. Give me ... *instead*.

Example 17. *nearly* empty

As you can see, study mode 2 puts the target vocabulary into short phrases that give them a rather simple and often vague, but easy to understand grammatical context. Study mode 3 provides a fuller, more meaningful context for the target word within a complete sentence, as suggested by A. J. Hoge (Rule #1), without any grammatical explanations (Rule #2). After each block of seven daily lessons comes a short review section, a written text of three paragraphs with some (about 19) of the (112=7×16) target words embedded. This gives these particular words a richer context than the diverse and unconnected sentences in study mode 3 provide. In addition, these texts are recorded on the CD set. Students can listen to them again and again, if they wish—deep learning with their ears, not their eyes (A. J. Hoge Rules #3 and #4).

The three study modes correspond to columns in the book, printed on two facing pages. Each page has two columns. The first column on the left-hand page contains eight target words (half a daily lesson) in big bold print with pronunciation symbols in teeny tiny print. Sometimes there are brief notes

about confusing points—synonyms (eg. waste vs. waist), near synonyms (eg. wonder and wander) ... to the Japanese ear (eg. long and wrong), irregular conjugations (eg. drew – drawn, for the word draw). The second column give some translations—one in larger bold red print—and, if applicable, some variations of the target word (eg. comparison and comparable, for the word compare). The facing page on the right contains two columns: the first column has one or two (mostly two) phrases, as described above, while the second column contains a single sentence. The target words in both columns are printed in red. The weekly review takes up three pages. The first page (on the left side) has the text of the story as described above. Facing it on the right are a couple of multiple choice (abcd) questions in English. The correct answers and a Japanese translation of the entire story appear on the back side (ie. the next left page). The target words and their translations in the Japanese version of the story are printed in red. A small red plastic sheet comes with each book, thus any of the text printed in red can be covered up to make it disappear from view—a good way for readers to test their memorization of the material and to review (A. J. Hoge Rule Rule #4, deep learning).

These self-study books are certainly much more fun to read than any dictionary, and they can be used as reference books. There is an index of all the target vocabulary and some variations of those words in the back.

Shortcomings

The meanings of words—thus the choice of translations—are highly sensitive to context. A. J. Hoge understands this (Rule #1, learn phrases, not individual words) and so do the authors of KIKUTAN. That is why in KIKUTAN Basic 4000 they devote a full seven lessons (lessons 20, 41, and 45–49) to words

with multiple meanings. Not only meanings, but even a word's part of speech depends on the way that it is used (examples 18a-20b from Lesson 20).

Example 18a. **order** drinks

Example 18b. alphabetical **order**

Example 19a. **long** for peace

Example 19b. a **long** distance

Example 20a. **park** a car

Example 20b. a national **park**

These examples are, in fact, not at all unusual. Consider these six words from Lesson 9, a lesson devoted completely to nouns: reason, experience, cause, respect, thought, and effect. The first four can be used as verbs. Thought can be used as a verb in the past tense. Although *effect* undergoes a slight spelling change to *affect* to become a verb the pronunciation of the two words is identical (leading to a common spelling mistake among native speakers). The point is clear. Vocabulary can only be learned in grammatical context. The single-word translations of target words in study mode 1 (translation and repetition) are inadequate.

The authors do a fairly good job of compensating for the problem of vocabulary complexity in study mode 2 (phrases) and more so in study mode 3 (sentences). Yet mysteriously the single-word translation from mode 1 sometimes **does not** appear in the translation of the sentence in mode 3 and occasionally in any of the translations in mode 2 or mode 3 (examples 21–23, next page, Note that the spaces are not in the original text. They have been added to highlight the translations of the target words.).

Example 21. improve (a verb from Lesson 1)

Mode 1: 改善 する

Mode 2: 機械を 改良 する and 生産性を 高める

Mode 3: ... 英語を 上達 させたい。

Example 22. direction (a noun from Lesson 10)

Mode 1: 方向

Mode 2: 反対の 方向 に and 指示に 従う

Mode 3: どちらの 方角 から ...

Example 23. close (an adjective from Lesson 15)

Mode 1: 接近 した

Mode 2: 近 距離で and 親友

Mode 3: ... 学校に 近い。

The fact that everything is translated, and that those translations are quite often unnaturally literal (直訳), encourages students to approach language learning quite mechanically—like human computers—memorizing vocabulary as a word-to-word correspondence between English and Japanese (Blair, 2019, 65). The above examples show, however, that such a simple correspondence distorts the reality of languages.

Let's turn our attention to study mode 3. The purpose of these self-study books, of course, is not just to introduce English vocabulary to Japanese students, but to help them *remember* the target words and how to use them. The random nature of the list of words and the lack of any meaningful connections between the sentences assures that they will be forgotten soon after a student turns the page. On the next page is an example.

Example 24. consecutive vocabulary items from Lesson 35

Mode 1: target, vitamin, cellphone, passion

Mode 2: hit the **target**; meet the **target**; lack of **vitamin A**; **vitamin** pills
charge one's **cellphone**; the **passion** of love; have a **passion** for ...

Mode 3: My arrow missed the **target** by one inch.

This fruit is rich in **vitamins**.

My **cellphone**'s battery is running out.

He talked about his dreams with **passion**.

An archery contest, an unidentified fruit, a low battery, an unidentified male talking about his unidentified dreams—what possible connections do they have to each other? How long could a student remember these vocabulary items at a pace of 16 words in a daily lesson? Would they ever want to reread the list, the phrases, or the full sentences?

A few lessons in KIKUTAN 4000 concentrate on *special topics*: politics (56), people (60–61), science (62–63), society (66–68), and the economy (69–70). There are also *ten stories* on various topics—pizza, memory and the brain, sign language, puppy mills, the danger of asteroids, Internet education, methods for learning English, dealing with stress, boring science classes, and global climate change—one at the end of each week.

Basing a lesson on a special topic connects the sentences to a certain extent, but it's a very weak connection. The ideas expressed in the sentences do not flow as they would in a coherent text. On the next page is an example from Lesson 56 (politics).

Example 25. consecutive sentences (from mode 3, Lesson 56)

After a long revolution, the country became a **republic**.

She dedicated her life to social **welfare**.

The country got over its economic **crisis**.

The people were hoping for fair, **democratic** elections.

The reader is asked to jump from one idea to another. The people and countries involved are never identified. The only consistent thread running through them is some abstract connection to politics. There are no details that would connect these sentences in a more concrete manner, unless a student provides them in their own imagination. Did “she” participate in the “long revolution” hoping to improve people’s social welfare? Did “the country” have an economic crisis before or after the “revolution”? Did “the country” hold democratic elections after becoming a republic? Which country are we talking about? Or are these simply four disconnected sentences about politics, to be practiced in case the vocabulary appears on a future examination? Without the richer context that intersentential connections would provide, the words and sentences are doomed to fade from the reader’s memory.

The weekly review stories provide strong, concrete connections from sentence to sentence. One weakness, however, is the academic treatment of the topics, the lack of any personal connections. Various groups of people, but few individuals appear in the texts. These groups include soldiers, the scientific community, non-deaf people, experts, specialists, adults, future generations, today’s students, co-workers, and athletes. The few individuals that do appear are unidentified or stereotypes: a famous chef, a respected breeder, a (university) fellow, the mad professor, the enthusiastic genius, et cetera.

Improvements

If the purpose of these self-study vocabulary books includes teaching students *how to use* the target vocabulary, then basic grammar *patterns* must be *emphasized* in some way, visually or through audio repetition. A simple way to accomplish visual *emphasis* is to divide sentences into four parts (Blair, 2019). Let's use the sentences from example 24 to illustrate this.

4☐ English Sentences

S☐	V☐	O/C☐	+A☐
My arrow	missed	the target	by one inch.
This fruit	is	rich	in vitamins .
My cellphone's battery	is running		out.
He	talked		about his dreams with passion .

The position and structure of the various noun phrases becomes quite salient and their connections to the verb obvious. The isolation of the verb clusters puts a spotlight on their forms and functions. Audio *emphasis* through the repetition of each sentence—first with long pauses between each section and between noun phrases that occur together in the same section, then with shorter pauses until the pronunciation was completely natural and at native-speaker speed—would be ideal. The target words (in bold print here) would, of course, be printed in red letters. Japanese translations of each sentence, if desired, could be conveniently provided on the facing page.

Books often come with CDs and even DVDs in this age of multimedia. It is becoming popular to download audio and video files onto cellphones and computer tablets. Educational institutions can easily upload similar study materials onto Internet servers and thereby make them available to their

students or even the entire global community. In this brave new era we can bypass translation to convey meaning. Hyperlinks allow us to soak students in images and video clips so that they can vicariously experience the *reality* behind *meaning* and form direct associations between them and target vocabulary. Gattegno (1976, 10 & 33) explained it nicely in his book about The Silent Way. He declared rote memorization to be useless. Language, he stated, is generated from perception. It is these [sensory] associations that bring about [long-term] retention.

The *actual sounds and images* of (a) an arrow missing its target and (b) a man talking passionately about his dreams for the future would make much more powerful impressions on the reader's mind than the Japanese translations of those events. The (c) vitamins in a piece of fruit and (d) a battery running out of electricity admittedly present challenges to the search for visual associations.

Another powerful aid to retention is the *flow of a text*, especially if it comes from a story (Gottschall, 2012)—a video story (example 26a) can provide both a story line and a wealth of visual associations, ready to be hyperlinked.

Example 26a. from TV drama Trapper John, MD (1979)

S☒	V☒	O/C☒	+A☒
Laura McCaffrey	saw	two ambulances	in front of the hospital.
There	had been	an accident.	
Doctors and nurses	quickly unloaded	four patients	from those ambulances.
Laura	took	the pulse of one of the patients.	
She	told	Gonzo Gates	that ...
... the patient	was		in shock.

Conversations are based upon sentences even if those sentences occur below the surface of what is audible. The sentence fragments in spoken English come

from or can be expressed as full sentences. At the core of each sentence (and dependent clause as well) lies a verb. Noun phrases and adverbs are peripheral elements. Being buried within noun phrases (explicit or implied), adjectives are one step further removed from the center of this syntactic hierarchy. Japanese, English, and many other languages share this same structure, which has been compared to a solar system (Figure 1 reprinted⁽¹⁾ from Blair, 2019, 75).

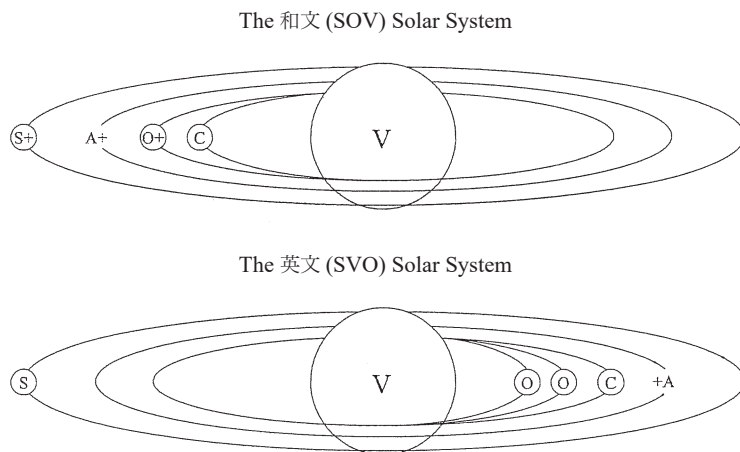


Figure 1. illustrated metaphor for the basic structures of Japanese and English declarative sentences

While a noun phrase can occupy any one of three slots in the sentence structure, the verb's position is fixed. Furthermore, verbs fulfill *the central role* of syntax. A sentence without a verb is not a sentence. Furthermore they control the macro-grammar (Blair, 2013, 136–138 and 2019, 72), the pattern of connections with noun phrases within the sentence. Given these facts, it seems sensible to give them special consideration in vocabulary acquisition, to give them precedence over nouns and adjectives. Looking at word frequency (Davies, 2008), a general measure of how useful a word is, the most common

adjective (*one*) comes in at #51 and the most common noun (*time*) at #52. There are eight verbs and three auxiliary verbs (*can, would, will*) ahead of them. (Four of the verbs—*be, have, do, get*—are also used as auxiliary verbs.)

Verbal Sudoku

Cloze testing removes a word from a sentence often within a longer text and challenges students to guess the missing word. The *red sheet* review falls into this category of self-testing. *Removing the verb* from a sentence basically leaves a disconnected series of noun phrases in place, usually one or two in each slot. These noun phrases can be studied as isolated examples of micro-grammar (Blair, 2013, 136–138 and 2019, 72). Their (a) meanings, (b) placement within a 4☒(four-slot) macro-grammatical framework (Blair, 2011), and (c) and connecting words, in the case of a prepositional phrases, provide clues as to the identity of the missing verb. Thus there are two very different criteria—semantic and grammatical—to choose a suitable verb to complete the sentence. A third condition—the flow of the story—comes into play, if the sentences tell a story (see example 26b, next page).

Used as a classroom exercise, this worksheet encourages students to consider all three conditions simultaneously, much like the popular number game sudoku⁽²⁾. They focus (a) on the noun phrases for the clues that they supply and (b) on all the verbs and auxiliary verbs that might go into each missing verb cluster to create sentences with suitable meaning. Students also have to decide what form—tense, aspect, negative or affirmative—are appropriate for that cluster.

Japanese students are quite reluctant to play any guessing games in the classroom. In order to stimulate their brains with some linguistic food for

Example 26b. from TV drama Trapper John, MD (1979)

S☐	V☐	O/C☐	+A☐
Laura McCaffrey		two ambulances	in front of the hospital.
There		an accident.	
Doctors and nurses	quickly	four patients	from those ambulances.
Laura		the pulse of one of the patients.	
She		Gonzo Gates	that ...
... the patient			in shock.
Even though she			for the hospital, ...
... she		Claudia	on a gurney to an exam room.
Trapper and Claudia	suddenly	hands.	
Gonzo		a letter of recommendation	for Laura.
He			with Miss Langley.
Trapper		Claudia's x-ray	with Gonzo.
The problem			in her pancreas.
Claudia		a fancier room.	
Elma		some things	a long way for Claudia.
Claudia		some perfume.	
Laura			about her past in her application.
She			in a prison hospital.

Penguin 2	Penguin 2	Genius 1 and 3	Genius 2
Bring Put on See	Take Tell Work	Hold Lie Type Unload	Argue Demand Examine Wheel

thought, I usually add a list of suitable verbs, in dictionary form, at the bottom of the worksheet. I tell them, however, that they are free to use any verbs that they think might fit all three conditions: (1) noun-verb connections and verb form, (2) the meaning of each individual sentence, and (3) the flow of the story.

Verb Thesaurus: From Target Words to Target Sentences

When Japanese students are at a loss for words in the English language, they often rely on a Japanese-English dictionary or on a smartphone app. These searches usually produce a very short list of single-word translations or even just a single word. With little or no context provided for word choice, the hapless student simply chooses the first word on the list. The limited choice of words and the lack of either syntactic or collocation support can lead to awkward, flawed, or even bizarre sentences.

Dictionaries present words and phrases in an ordered sequence for easy access. They group words in *alphabetical order*. My intuition as a native-English speaker is that we use dictionaries to check our spelling much more often than to find the definitions of words that we do not understand.

The use of flashcards as a tool for increasing vocabulary *randomizes* the sequence of presentation in order to test a learner's ability to recognize words completely out of context. For foreign language acquisition a target word is typically printed on one side while an equivalent word in the learner's native language is on the other. Such one-to-one correspondences can only be effective with a limited range of vocabulary items—numbers, colors and physical nouns with iconic shapes—chair, table, television, dog, cat, for example.

Words identify a class of items, not any particular item in that class. When two languages divide a class of items differently, word-to-word correspondences

lose their value. *Pictures* on flashcards and in dictionaries can reduce this ambiguity in definitions and translations. This visual perception gives their target word a *direct connection* with its meaning, duplicating the natural process of language development in children. To a certain extent, ideographic symbols, such as Arabic numerals and Chinese characters might also be utilized to provide a direct path to meaning. Video technology and multimedia are opening up even more powerful ways to harness visual experience to language learning.

Dictionaries often provide more than simply definitions or translations. They provide sample phrases and even sentences to demonstrate how the words can be used. The reason that these sample sentences are such a valuable addition, is the fact that *sentences*, not individual words, are the *primary objective* of anyone who wants to communicate in a language.

Vocabulary self-study books place a heavy emphasis on sample sentences, but may, like the KIKUTAN series try to include other aspects of the dictionary approach—definitions and an index which allows learners to *search* and *access* specific words and, sometimes, a few closely related target words. Unfortunately they do not attempt to break sentences down into their principle constituents. The simple 4☒ framework described above would increase visual perception of the noun phrase structure of sentences. It would make their positions (S, O/C, or A) and connecting prepositions (+) much more salient.

The thesaurus is a reference book used by native speakers to help them use their vast passive vocabulary actively in their writing. Synonyms and other words that have similar meanings are grouped together. It offers a choice of individual words, but lacks the syntactic support that foreign language learners need. Verbs have a unique and central role in sentence structure. This makes them the ideal candidate for grouping collections of sentences into a (verb) thesaurus. Video and hypertext technology allow links between such full

sentences and suitable video *images*. With video links this verb thesaurus could become a video thesaurus (currently under construction at <http://www3.agu.ac.jp/~jeffreyb/Vocab/index.html>).

Points of Contact

Any comments on this article will be welcomed and should be mailed to the author at Aichi Gakuin University, General Education Division, 12 Arai-ke, Iwasaki-cho, Nisshin, Japan 470-0195 or e-mailed to him. Some previous papers may be accessed at <http://www3.agu.ac.jp/~jeffreyb/research/index.html>.

Notes

- (1) A slight mistake in the original planet labels has been corrected here.
- (2) A 9 by 9 sudoku matrix is solved when the numbers 1–9 appear once and only once in each horizontal row, each vertical column, and each 3 by 3 sub-matrix.

References

- Allen, Corey (1979). The Shattered Image. *Trapper John, M.D.* Season 1, episode 5 retrieved in October 2019 from links at www3.agu.ac.jp/~jeffreyb/YouTube/hospitalOne.html.
- Blair, R. Jeffrey (2011). Evolution in an EFL Classroom. *Foreign Languages & Literature*. 36:1, 131–152.
- Blair, R. Jeffrey (2013). Rules, Rules, Rules: Why do students hate grammar? *Foreign Languages & Literature*. 38:1, 123–141.
- Blair, R. Jeffrey (2014). Pattern Acquisition: Linear Sequences in Dancing, Music, and Language *Foreign Languages & Literature*. 39:1, 99–115.
- Blair, R. Jeffrey (2016). “Rules” for Motivating Students to Communicate in English. *Foreign Languages & Literature*. 41:1, 3–15.
- Blair, R. Jeffrey (2017). A Tale of Two Mind-Sets: Test English and English Communication. *Foreign Languages & Literature*. 41:1, 237–244.
- Blair, R. Jeffrey (2019). Stimulating Active Communication in an EFL Classroom with Video Stories. *Foreign Languages & Literature*. 44:1, 63–79.

- Davies, Mark (2008). The Corpus of Contemporary American English: Word frequency data. retrieved in October 2019 from [www.wordfrequency.info/ free.asp?s=y](http://www.wordfrequency.info/free.asp?s=y).
- Gattegno, Caleb (1976). *The Common Sense of Teaching Foreign Languages*. New York: Educational Solutions.
- Gottschall, Jonathan (2012). *The Storytelling Animal: How Stories Make Us Human*. Boston: Mariner Books.
- Hoge, A. J. (videos 1a–7a and 1b–7b). *Effortless English*. retrieved in October 2019 from links at www3.agu.ac.jp/~jeffreyb/YouTube/SLA.html.
- Hoge, A. J. (videos 1c, 4c, 7c, 1e, 4e, and 7e). *Learn Real English*. retrieved in October 2019 from links at www3.agu.ac.jp/~jeffreyb/YouTube/SLA.html.
- Ichisugi, Takeshi (Ed., 2018). *Kikutan [Basic] 4000*. Tokyo: Aruku Kabushiki Gaisha.

ベケット、不在者の存在

堀 田 敏 幸

一、マーフィーという存在

小説『マーフィー』（1938年）は男女の愛を現実生活の中に捉えた作品として、ベケットの創作の中でも特異である。『マーフィー』以前の初期作品『並には勝る女たちの夢』や『蹴り損の棘もうけ』も恋愛を描いているが、主人公の恋する女性が多数に及ぶために、恋愛が生活状況の中で深く追求されているとは言い難い。『マーフィー』では主人公と恋人のセリアとで生活信条が違うことから、どんな方法を用いれば二人が結婚による共同生活を送れるか、ということが大問題として浮上する。男性のマーフィーは生活のために仕事をすれば、愛は破壊されてしまうと主張し、女性のセリアは共同生活のためには、少なくともどちらか一人が働いて生計を立てなければならないと考える。一般的には誰もがセリアと同様の生活方法を選んで、愛の巣を築こうと希望を抱くであろう。無収入で結婚生活をするにはどうすれば良いか。こんな理不尽な生活設計が成り立つのは、すでに莫大な財産を所有している人物に限られる。マーフィーはといえば、恋人と婚約する前から浮浪者であって、赤貧のその日暮らしに甘んじている。セリアも毎日の生活が精一杯であって、貯蓄などの余裕はない。一体、二人は共同生活の難局を乗り切れるのか。

それにしても、セリアはマーフィーが愛の告白をしたとき、どうして結婚を承諾したのか。彼女にはマーフィーに職がなく無収入であることは、この時点で分かっていたはずではないのか。それなのに彼女が彼のプロポーズを受け入れたのは、マーフィーが無職であるとしても、彼女が働いて生活費を工面すれば、十分に結婚生活を続けていけると判断したのであろうか。彼女は母方の祖父にあたるケリイに語っている。その内容は、マーフィーがダブリンで生まれたこと、キグレイという伯父がいて、かなりの年金を得ていること、そして「彼女の知るところでは、彼が仕事を何もしていないこと、時には入浴場に行くだけのお金は持っていること、未来が明るいものであると彼が信じていること、そして昔の出来事とやかやく言ったりしないこと⁽¹⁾」である。さらにケリイの「何で生活しているんだい？」という質問に、セリアは「わずかな慈善のお金よ⁽¹⁾」と答えた。マーフィーに対するこれらの人物評価の中で、セリアはどの点に強く惹かれたのであろうか。マーフィーが自分の未来に希望を持っていることだろうか。しかし、未来を保証するものは伯父の遺産でもなければ、わずかな慈善金でもないことは明らかだろう。また、彼が昔の出来事を非難することがないというような性格上の問題でもなかろう。たとえセリアが娼婦として働いたという過去があるとしても、それはマーフィーの知らぬことであろう。そうすると残る項目はただ一つ、「彼が仕事を何もしていない」という点である。

教師で心臓を止められるという特技を持つニアリイは、彼の教え子のウイリイにある時こんな質問を唐突に投げかけた。「女たちがマーフィーの何に好意を持つのか、私には理解できないよ⁽²⁾」。これに対してウイリイは困った末に、「外科的な特徴のため」と要領を得ない返事をするだけだった。ウイリイは明確な答えを返すことは出来なかったとはいえ、この二人の会話からは、マーフィーが何人かの女性から好意を持たれていることが読み取れる。ニアリイやウイリイから恋心を持たれているミ

ス・カウニハンという女性は、マーフィーに対して好意を抱いている。それでは、なぜ女たちがマーフィーに魅力を感じるのか。作者はニアリイが発した先の質問の前の箇所でヒントを与えている。ニアリイとウイリイは喫茶店に入り飲み物を注文した。この料金をニアリイに代わって、教え子のウイリイの方が払ったのである。なぜウイリイは、親切にも他人の分まで気前よく身銭を切ったのか。ウイリイはこの質問に対しては、明確にニアリイに答えることが出来た。「ある種の不幸に出会うと、僕は自分の気持ちを抑えられないようなんです」⁽³⁾。

「不幸に出会うと、自分の気持ちを抑えられない」、つまり、不幸な人間に同情心を抱き親切になるということだが、これはウイリイ一人に該当するだけでなく、セリアにおいても同じような心情的反応が起こっていると考えることが出来るのではないか。彼女はマーフィーが仕事もせず貧しい生活を送っていることに、憐憫の情をかき立てられている。普通の人間なら健康体であるにも係わらず、なぜ仕事をしないのかという非難の気持ちを持つところであろうのに、彼女は母性愛とは言わないまでも同情心、ひいては好意を抱いている。一般的な生活者であるなら、生きていく為には労働に従事して生活費を得なければならない。しかし、マーフィーはそれを拒否して平然と生きている。そのような無謀な人生を送るのは何ゆえなのか。人間であるなら、それを知りたいという誘惑に駆られるであろう。しかし、セリアにおいてはそのような疑問は後回しにされ、金銭欲のない彼への愛情が優先されることになる。

マーフィーは労働を拒否する。これが一人身の気まぐれからであるなら、他人はその人物を風来坊の変人と判断してこの人間社会に許容するであろう。しかし、彼が妻を得て家庭生活を営むとなると、世間の彼を見る目は厳しさを帯びる。マーフィーは婚約者に向かっても、「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう」⁽⁴⁾と予言的な言葉を発する。セリアは最初この考えを馬鹿げていると思い、その重大さを理解

することは出来なかった。マーフィーはこの一見、理不尽とも思える言葉をよく考えた末に言っているのか。初めてこのような威圧的な言葉を聞いた人物は、あまりに現実離れたこの内容を冗談から言われたものと判断するであろう。なぜなら、働いてこそ収入が得られ、それによって生活は豊かになるのだから、どう考えても労働が生活を破壊するという正反対の指示は、冗談以外の意味を持たないだろう。しかし、マーフィーの言葉は彼の思考の心底から発せられたものであった。

自由恋愛のいくつもの矛盾がこれほど確かな形を取って現れたことはなかった。それらの矛盾からマーフィーは、どんなにわずかな給金の仕事であっても、たとえ一時的とはいえ、彼の恋人に対して目に見える世界を必ずや消滅させることになるかと判断した。彼女はそれが意味していることをもう一度、学ぶことになるだろう。しかし、彼女にそれが出来るのか？⁽⁵⁾

「目に見える世界を消滅させる」、何という厳しい宣託であろうか。とても浮浪者である人物が述べるような言葉とは思えないような宣言だ。むしろキリスト教の『聖書』の中で、神が地上の悪に対して宣告を下すような言辞と聞こえる。それは善行を忘れ神をないがしろにした墮落の民を、その激しい怒りでもって警告する「ヨハネの黙示録」の中で示されるに相応しい言葉のように、胸に突き刺さってくる。

今はあなたの怒りの時です。今こそ死者をさばかれる時、あなたのしもべである預言者、聖人たち、あなたのみ名を恐れる小さな者、大きな者に報いを与えられる時、また、地を腐らせる者を滅ぼされる時です。⁽⁶⁾

これは神が述べた言辞ではなく、神の導きを感謝する人間の言葉である。それでも「地を腐らせる者を滅ぼされる時」という怒りの言葉と、マーフィーの言う「目に見える世界を消滅させる」という言い方が何と一致していることであろうか。マーフィーは勿論、婚約者のセリアが働いたとして、またマーフィー自身が労働に携わったとして、「世界を消滅させる」ような憤怒を起こすことはないであろう。一人の人間が世界全体を消滅させるようなことは、原子爆弾でも用いなければ不可能であるし、たとえ神の力を請うにしても、神は賛同しないであろう。なぜなら、日曜の安息日に教会のミサに行く人ばかりではなく、実際に労働に従事する人もいて、神はそれを許しているからである。しかし、何ゆえにマーフィーはそれ程にも労働を嫌悪するのであるのか。また労働の禁止を命じられたセリアは、それに従うことが可能であろうか。マーフィー自身も「世界を消滅させる」と考えた後に、「しかし、彼女にそれが出来るのか？」という疑義を表明している。セリアは恐らく、コーヒー代を払ってやったウイリイが手持ちの小銭がなかったニアリイの不幸に同情心を抱いたように、仕事をするでもなく一日を呆然と過ごすマーフィーに憐れみの感情を抱いたに過ぎないであろう。それが愛情にまで発展するとしても、その愛情にとって労働が結婚生活の障害となるということまでは、彼女の念頭にはなかったことであるに違いなかろう。

セリアは結婚生活において仕事の禁止をマーフィーから告げられたとき、それは常識はずれの有り得ないことだと思った。そしてマーフィーが外出している昼間、街の市場で買い物をして帰宅すると、彼女はマーフィーが座っていたロッキング・チェアに腰を下ろすのだった。

ロッキング・チェアに座っていると間もなくして、彼女は名づけられないような欲情の現れのごとく、裸になって縛られたいという欲求が、かすかに湧き起こってくるのを感じた。⁽⁷⁾

このロッキング・チェアというのは、単にマーフィーが体を休めるために使用するだけのものではなかった。彼は七本のスカーフで彼の裸になった体や手足を他人の助けを借りずに、その椅子に縛り付けるという非常に手間のかかる方法を取った。なぜまるで悪人をロープで縛り付けて、逃げられなくさせるようなことを実行したのだろうか。それは彼がこの現実世界の現場から抜け出して、精神界へ飛躍するための方法であった。彼は精神界で生きることにより多大の悦楽を覚え、その世界こそが彼の真に存続できる場所であると考えている。「何の価値もないところで、何ものも望まず、そしてそこにおいてだけ自分を愛することが出来るのだ⁽⁸⁾」と言う。現実世界から見て精神界の「何の価値もないところ」こそが、彼が憧憬してやまない理想の地である以上、彼は愚直にもその場所を確保しようとするだろう。その方法がロッキング・チェアに肉体を拘束して、精神界を抽出するというものであった。そうすると、マーフィーのこのロッキング・チェアに、彼が留守の間セリアが座ってみると、彼女も彼のように「裸になって縛られたいという欲求」を感じるようになったという状況は、彼女の気持ちがマーフィーの思考に近づいてきたということを意味する。つまり、現実生活を捨てて精神界に行ってみるだけの価値があると、彼女が気づき始めたということになる。ただし、彼女はマーフィーのように全面的に現実生活を否定してしまうところまで、飛躍をしないことは確かであろう。マーフィーが帰宅すれば、彼女はその日の夕食を作ることを放棄できないのだ。

マーフィーは精神界で生きようとする。しかし、セリアとの愛情は現実生活なしには成立しない。この世の悲運をあの世で実現しようとするれば、ロッキング・チェアで夢に浸るだけでは十分でない。マーフィーは「自分の世界は喪中なんだ⁽⁹⁾」と言うけれども、二人共が死の世界を選んでしまえば、その時点で愛は結ばれるとはいえ、死の精神界で実った愛に誰が祝福を送るのか。他人の祝福のない愛でも本人たちは幸福であ

るとはいえ、この幸福は二人の結びつき以外の何を求めるのであろうか。精神界に愛の発展はあるのだろうか。マーフィーは労働が生の実質を失わせると言うが、全面的にそれを放棄することは叶わない。なぜなら、人間は生物であって、生きるための衣、食、住の糧を必要とするからである。また反面、人間は思考力を持つ以上、精神界を作り出すことを希求する。この現世にない理想を思い描いてこそ、人間の生きる価値が増大する。結局のところマーフィーはセリアと別れて、精神病院の雑役係として働くことを決意した。一体一時的にもせよ、二人の愛は実ったのか。マーフィーという存在は人間界の矛盾として、今も人の精神に問いかけてくる。

二、生存の否認

マーフィーはセリアという恋人を得たけれども、一緒に暮らすとなると、彼の結婚観は恋人を大いに悩ますことになる。彼は労働が愛情を破壊すると相手に告げたのである。財産のない人間が仕事をしないで生きていけるかどうか。自分の子供が職に就くこともなく家の中に閉じこもっているとしたら、親の投げつける言葉は、「働かざる者、食うべからず」の一言であろう。小説『モロイ』の中で、私立探偵モランが息子と一緒に捜索に出たとき、彼に与えた言葉は「なしで済ませろ⁽¹⁰⁾」という教訓であった。ここでの意味合いは勿論、不必要な物は買わないで、手元にある物でうまくやり繰りせよ、ということだが、それが労働もなしで済ませろということになると、節約どころではなくなってしまう。なぜなら、労働拒否は収入のないことを意味する。無収入であれば不必要なものだけに留まらず、絶対的に必要な物までも買うことが出来なくなる。今日、食べる食料がない。どうやって生きていけば良いのか。泥棒に走るのか。

命を無くしてしまえば事は完了するが、それは最後の手段である。何ゆえにマーフィーは、セリアに労働禁止を言い渡すのか。

マーフィーの人生においては、「何の価値もないところで、何のものも望まず」というのが彼の主義であった。「何の価値もない」とは彼の生存する現実世界において価値がないということだが、労働が人間一般にとって第一義的な価値を持つ以上、それはマーフィーによって即刻拒否されるものであるだろう。働かない人間が「何も望まず」という精神で人生を生きてゆけるかといえば、望まなくとも必要なものは山ほど存在する。美食を望まなくても、命をつなぐ最低限の食料は必要である。空腹を覚えたとき、エストラゴンは相棒から人参をもらって食べたし、ポゾーからは捨てた鶏の骨を喜んでもらい受けた。モロイならビールを五、六本一気に飲んだあと、一週間何も飲むことはなかった。そして、小石を口にして飢えを紛らわした。小説『ワット』のノット氏なら、召使いのワットが作る、様々な食材を一つ鍋で煮込んだ雑炊のようなものを、一週間毎日食べ続けるのである。このようにベケットの主人公たちは食事に価値を認めず、粗食に甘んじている。

なぜマーフィーにしろ、モロイにしろ、ベケットの登場人物は、食事を一般の人間並みに十分に取ろうとしないのか。それは飲食がこの現実世界で生存していくためには、最大の不可欠なものだからである。人間は生命体である以上、肉体の維持のためには養分を供給しなければならぬ。もしこれを拒むとすれば命を捨てることを意味するが、それ程にも絶食しないにしても、モロイやノット氏のように最低限の食料しか摂取しないとすれば、それは人間が現実世界で生物として生きること嫌悪感を抱いていることの表れであろう。肉体的な病気や人間関係に対する精神的な不安という原因があつて、拒食症に陥る人もある。また別の人は自らの人生に対する主義として、この現世に生存することに深い憂慮を抱いている。この後者の場合が、ベケットが作品に描くところの登

場人物たちであろう。

そうした光景や物音は、彼の好まないものだった。それらのものは、それらが加わり、そして彼の方ではできれば加わりたくないと願っている世界に、彼を引き留めていた。彼は自分の輝きを解体させているものは何なのか、物売りが叫んでいるのは何なのかと、そっと自問してみた。そっと、ほんとにそっとだけ⁽¹⁾。

「光景や物音」とは、マーフィーが自分の部屋でロッキング・チェアに横たわった時に聞こえてきた鳥のカッコウの鳴き声であり、道路で叫んでいる物売りの声であり、そうした生物の存在する光景である。こうした光景や物音は自然界に属している。勿論、それを見聞きしているマーフィーも自然界の存在であって、他の生物から人間である彼自身を区別することには、異議を唱えることも可能であろう。ただマーフィーの場合、動物に対して人間を優越させるという生物分類ではなく、「物売りの叫び声」をも嫌っていることから、声の持ち主である人間をも嫌悪の対象にしている。だから、人間も自然界の一員であって、ここで現実界から離脱を図ろうとしているのはマーフィー一人だけの問題なのである。

マーフィーは現実界に「加わりたくないと願っている」。現実界で彼も生存しているのに、そこに帰属したくないとなれば、マーフィーはどこに存在したら良いのだろうか。彼はロッキング・チェアに体を身動きできないほどに縛り付けた。肉体をリラックスさせるはずの道具に、反対にそれを意志のない物体のように固定化してしまった。ただし肉体を拘束するとしても、その一番上に備わっている頭脳だけは、紐の監視から容易に逃走してしまうだろう。頭脳はその思考力によって精神界を作り出す。しかも目には見えない世界として、他人には気づかれない独自

の想像界を構築する。マーフィーは、「自分の輝きを解体させているものは何なのか」と問う。この「輝き」とは恐らく、彼の自由な生き方という意味であろう。彼が属する人間社会において、マーフィーは自分の思い通りの生活が出来ていないと感じている。人間の慣習に従い、他人と同じ日課をこなし、共同生活をするのに適応できる知識をたくわえ、命を絶やさないうだけの食物を取り、そしてそれらを実行するために、金銭を得るべく労働に身を捧げる。こうした一連の社会的行動は、決してマーフィーを「輝き」ある存在と思わせないであろう。彼は他人に束縛されない自由な生き方を求めている。マーフィーはセリアに言う、「君の言葉が僕に教えている金もうけ主義の地獄では、みんな駄目になってしまう⁽¹²⁾」。

マーフィーは現実世界を嫌い、精神界で生きたいと願っている。彼が宗教家であるなら、自分一人で教会に閉じこもって神と対話をし、人間が生存するのに相応しい永遠の世界とは何かを思案するであろう。まだ彼が神のような絶対的な真理を見出していないとすれば、その真理の追究のために俗世を捨てて行脚の旅^{あんぎや}に向かうであろう。しかし、マーフィーは宗教家になろうと念願するわけでもなければ、自ら新しい理念世界を構築しようと志すわけでもない。彼は単に現在生きているところの人間社会に不満を覚え、自分一人の自由の地を獲得したいだけのことである。もし彼の周りにいる人間が彼のことを気に掛けず、彼の望むままの行動を認めてくれるなら、この現実世界から逃避したいという願いは起こらないであろう。彼が労働したくないと言うなら、それも可能ではあるが、しかしこの無職であるということにおいて、彼はすでに社会からの脱落者であるという負の烙印を押されるのである。マーフィーが理想として提示する世界は、人間社会から隔離された小世界である。

大きな世界の泥のぬかるみの中を歩き回る人間にとって、まったく

完璧に小世界の中で実現された生の実例以上にわくわくさせる材料があるだろうか。

マットレスを張りつけた独房は、彼が内面の樂園について想像できた全てのものよりもはるかに優れて⁽¹³⁾いた。

マーフィーは現実の「大きな世界」を嫌って、「小世界」である精神病院の「独房」に生存する方を好むと言う。彼の勤めることになった精神病院で、彼は夜中に病室の患者が確かにそこに居るか見回っている。その人間社会から隔離された病室、つまり「独房」こそが理想の地だと考える精神にとって、この現実世界は汚れた「泥」に等しい憎悪の対象となる。なぜそれ程にまで、現実生活はマーフィーから嫌悪されねばならないのか。彼は過去においてトラウマと化するような重大な肉体的、精神的被害を他人から受けたのか。小説がそのことを語ろうとしないなら、マーフィーの生まれつきの性向から精神界を重んじているのか。とにかく、彼は現実の社会生活に対して、働くことが人間性を破壊するという根本的な信念を抱いている。

『マーフィー』の刊行は1938年である。この同じ年に哲学者ジャン＝ポール・サルトルの小説『嘔吐』も出版された。この作品は歴史研究家の主人公ロカンタンが存在することの意義について、人間関係だけに留まらず物体との関係においても疑問を持つという内容である。物体の属性も単なる仮象にすぎないと考える彼は、マロニエの木の根を見つめると、自分がその根になったような意識に捕らわれて「嘔吐」を覚える。彼は人間が存在することの認識について考える。「存在することへの憎悪も嫌悪も結局のところは〈私を存在させ〉、存在の中へと私を追いこむ方法である⁽¹⁴⁾」。ロカンタンは存在することに嫌悪を抱いている。しかしながら、彼は思考力に信頼を置いているために、その嫌悪することの意識によって、かえって彼自身が存在していることを認識すること

になる。この箇所のすぐ後で、このようにも考える。「私はなぜ考えるのか、私はもう考えたくない、私は存在したくないと考えるから、私は⁽¹⁵⁾在る」。ロカントンはデカルトにならって「考えるから、私は在る」と言うが、その思考内容において反対の「存在したくない」という主張を掲げる。この矛盾する命題の中で、矛盾していないのは「考える」という思考作用である。思考するという認識作用と、その思考内容とは別物である。従って、思考内容と認識作用とは矛盾することなく両立できることになるが、この思考段階に留まる限り、つまり一個人の内面に留まる限り、サルトルにおいて社会との軋轢^{あつれき}は生じないであろう。それでは、ベケットではどうか。

マーフィーもこの現世に嫌悪を抱いて、出来れば精神世界に移りたいと考える。彼は家の外から聞こえる鳥の鳴き声や人の叫び声の届かない世界に行こうとして、自分の肉体をロッキング・チェアに縛り付けた。しかし、ここで彼はサルトルにならって、自分がこの現実世界に存在したくないと考えるから、自分は存在しているというように、思考する者自身の存在をこの現実⁽¹⁶⁾に留めおくことに納得しないであろう。思考内容と無関係に自分の存在を安全地帯に確保しておくことは、マーフィーには起り得ないことである。この世に存在したくないと考えるのなら、全力を尽くして肉体を消去してしまわねばならない。そうして肉体の消滅を果たしたうえで精神界へと飛翔することこそ、彼の欲望に相応しい存在の在り方である。マーフィーは精神病院の独房を自分の最適な場所と考える。この隔絶した状態が、彼が人間社会に対して憎悪を抱き、それへの実際的な反抗として彼の在りうべき世界を示している。独房の中で誰からも邪魔されることなく、彼は理想世界を想像する。その時、彼の肉体はこの現世に存在することを否定されている。

それは思考による拷問、生存による苦痛だった。というのも、思考

は偽り、生存はごまかしであり、トンネルの外にあったからだ。しかし、影の世界、トンネルの中では、精神が墓胎となると、思考も生存も⁽¹⁶⁾真実のものとなり、生きた思考となった。

これは『並には勝る女たちの夢』と題したベケットの最初の小説作品で、1932年に執筆されたにも係わらず、没後の1992年になってようやく出版されたものである。主人公のベラックワはダンテの『神曲』、「煉獄篇」に登場する怠け者の代表者と言える人物で、ベケットはその名前を彼の作品に借用した。ベラックワは何人かの女性と恋をするが、直接面と向かって愛情を表現することは苦手で、出来れば相手から離れた状態で思慕することを好んだ。そして、現実世界よりも精神的世界を希求するのだった。「思考は偽り、生存はごまかし」という言葉からは、地上における人間の打算づくめの思考は忌避されるべきものであり、社会慣習に従って行われる日常行為や労働は人間の自発的なものではない、という信条が読み取れる。彼は人間の行動が見えなくなる「影の世界」が好ましいものと思い、そこでは人間の精神が生活の強制を受けることなく、自由に躍動することを願っている。従って、サルトルが説くような人間存在への嫌悪がかえってその人物の生存を保証するというような、思考内容と実態の乖離に彼は同意しかねるであろう。現実世界の存在を否定するのであれば、その否定する者としての存在も否定しなければ、同語反復に陥るばかりである。精神世界を標榜するベラックワは、人間の労働を拒否した怠け者として、地上の価値に敢然と背を向ける。

ベケットの主人公は自分の肉体的存在を、この地上から消去してしまいたいと考える。マーフィーは体を椅子に縛り付けて身動きできなくさせたし、独房において人間社会から自分の肉体を隔離した。ベラックワは人間の生存を虚偽と見なし、怠惰であることを賞賛した。現実世界の中で自分の存在を消去してしまうことが、精神世界で生きるための手段

として実行される。しかし、実際に肉体的存在を完全に排除してしまうことは難しい。なぜなら、彼は人間社会の中で労働を拒絶するとしても、社会から慈善の寄付をもらい受けて生活を維持している。何も食料を取らないで餓死してしまう人物は、ベケットの作中人物にはいない。肉体としての生存は残しながら、精神世界の自由を確保する必要がある。

ベケットと同時代の思想家ジョルジュ・バタイユは『内的体験』(1943年)の中で、人間存在の在り方について語っている。「もし自己がおのれを放棄し、そしておのれと共に知識が放棄されるなら、また自己がこの放棄の中で非一知に身をささげらば、法悦が始まる⁽¹⁷⁾」。彼は沈黙の中に世界の不条理を聞き取り、知識を捨てるとともに供犠に身を投じるよう論ず^{きと}。この供犠において人は不安とともに恍惚に到るわけだが、バタイユではそうした人間の究極の目標として、聖なるものの体験を得ようとする。自己の存在を失うことによって神聖なものに近づくことを、彼は強く希求する。こうした供犠や祭りにおける熱狂の中での自己放棄は、確かに聖なるものの精神世界へと人を導くであろう。しかしながら、これは祭儀における一時的な興奮であって、現実生活において常時この状態を維持することは難しい。しかも、こうした神懸かり的な熱狂は、一部の選ばれた人間に限られるであろう。自己を放棄する人間をバタイユもベケットも称揚しているが、バタイユでは聖なる世界を体験することを目的としているのに対して、ベケットでは肉体的存在を否定して、精神世界の自由な生き方を求めている。ベケットにおいて精神界で聖なる境地に到ることも有り得ようが、それよりも彼は労働拒否という誰にでも起こりうるような、人間の根本的な生存方法を問おうとしているのである。

ベケットは「何の価値もないところで、何ものも望まず」という生存方法、人間の現実生活において何の仕事もせず、怠惰に任せて生きてゆける生存方法、そしてこうした人間の生き方に対する信条が、実際の人

間社会において可能かという問いを提出している。彼は食べる物も満足に得られず、定住の家をも持たず、雨ざらしの荒野で放浪の旅をすることが、果たして意義のあることなのか、この根本的な問いを彼の作中人物に投げかけているのである。

三、不在者の存在

マーフィーは自分の部屋にあるロッキング・チェアに体を縛り付けて身動きできないように固定した。ロッキング・チェアとは体を揺することで快適さをもたらす物であるはずなのに、なぜかマーフィーは反対に肉体を拘束することによって、それを消滅させようと考えている。しかし、頭脳だけは活動することを許されていて、それは彼に想像による精神界をもたらす。この精神界において、マーフィーは彼の自由な生存の楽しみを十分に得るのである。肉体と精神、この二元論において、彼は精神のみに存在権を与えようとしている。ただし、肉体は出来うればこの現実世界から追放してしまいたいと考えるものの、頭脳という肉体なしに精神界が成立するかどうか。精神界を生み出すには、頭脳は肉体の不可欠な要素であって、二つを分離することは難しい。一体、人間の肉体、そして人間の現実における生存という条件なしで、精神界は存立できるのか。

『マーフィー』の次に執筆された作品が『ワット』という小説である。これはマーフィーと同様、浮浪者——ただし、マーフィーは自分の部屋を所有していた——であるワットがある時、ノット氏という人物のもとで召使いとして雇用されることになった。彼がノット邸にやってくると、他にもう一人の召使いがいて主人の世話をしていた。ワットは主人の食事を一週間分、まとめて作るという仕事を与えられると、それは一つ鍋

の中で様々な食材を煮込むだけのもので、彼のような調理に不慣れな者でも何とか作ることができた。しかし、その出来上がった食事を主人の部屋へ運ぶと、主人は召使いに顔を見せることもなく、また会話を交わすこともなく、一人だけで隠れるように食事を済ませた。一体、ノット氏とは何者なのか。彼は離れた所からは背が高く太っているように見えるし、別の日には背が低く痩せていた。また顔は青白く、髪は褐色に見えたかと思うと、別の日には赤ら顔で金髪だった。一体、彼の正しい外見はどのようなものなのか、一年以上も一緒に住んでいる者にも確かなところは分からない。

ノット氏の家の中の様子も整然としたものではなかった。家具は日によって位置が変わっていて、暖炉の横にタンスが置かれていたかと思うと、別の日にはベッドの脇に移動していた。しかも、家具の脚が正常に下向きにあるかと思えば、別の日には上を向いて逆さになっていた。そして、ノット氏自身はトイレなどの部屋の配置を明確に覚えていなくて、それを捜すために夜中に家中を歩き回るのだった。一体、ノット氏とは夢遊病者であるのか。

ノット氏が住んでいたのは、彼と召使いの使用のために用意されていた大きな部屋で、それは空ろな沈黙と閉ざされた闇の場所だった。そして、この雰囲気は部屋の外にまで彼について回り、家の中であろうと庭であろうと、彼の行くところどこでも彼を追いかけ、そのすべての場所を暗くし、精気をなくし、沈黙させ、すべてを麻痺させるのだった。⁽⁸⁸⁾

ノット氏は「沈黙と闇」の部屋に住んでいる。そこは召使いも主人の使用のために使用する場所であるにも係わらず、二人の召使いは主人の外見をよく知らないし、直接主人の口から用事を言い渡されることも起こ

らない。ノット氏はどうして他人に姿を見せようとししないのか。彼は他人との交渉が苦手な人間嫌いであるのか。一体、姿も見せず会話もしない人間は、何のために生存しているのか。ノット氏が自分の生きがいのために、何かすることがあるのだろうか。家の中に閉じこもって、何か仕事のようなことをするのだろうか。絵や音楽やスポーツというような、趣味らしきことでもするのだろうか。犬や猫のような動物を飼って、話し相手とするのだろうか。このどれもが、作品の中では実行されたという説明はない。彼は大きな邸宅に住み、二人の召使いを雇っている。それらを維持していくだけの資産はあるのだろうか、家計の運用もすべて召使いに任せて、金銭感覚を持ち合わせないのか。日常の雑事を彼はすべて遠ざけ、仙人のような暮らしをしているのか。

ノット氏は第一に何も必要としないことを必要とすること、第二に、彼が何も必要としていないことの証明となるものを必要とすること以外には、何も必要としないのであるから、自分自身に関しては、何事をも知らなかった。だから、彼は自分を証明できる人物を必要とする。何かを知るためではない。そうではなく、自分の存在がなくならないためなのだ。⁽¹⁹⁾

これはノット氏自身の考えではなく、召使いのワットが判断したものである。彼はノット氏が何も必要としていないと言うが、実際のところは色々な物を必要としていることは明らかだ。彼はワットが作ることになった一日に二回の食事を必要とし、さらに彼の住まう大邸宅と二人の召使いを必要としている。大邸宅と召使いといえば、一般の人間から見れば、生活用品としては必要を超えたものであるに違いない。それをワットは忘れていても、「自分の存在がなくならないために、自分を証明できる人物を必要とする」というワットの考えは、少しばかり奇妙

である。ここで言う「証明できる人物」というのは、恐らく二人の召使いのことであろう。この召使いは二年間の期限付きで雇用されているのだが、一体、姿を間近で見たこともなければ、直接話をしたこともない人物の証人になれるのだろうか。仮になれるとして、もっと根本的なことは、ノット氏自身が「自分の存在がなくなる」ということに不安を抱いているのか、という点である。彼は他人に姿を見せない。自分の存在が確実であることを望むなら、どうして人前に姿を現さないのか。彼は他人と話をしない。自分の存在が人間として認められることを欲するなら、どうして挨拶の一つも交わさないのか。

ノット氏は不在であることを望んでいる。しかし、彼が存在しているということは確かであればならない。存在しているのに不在である。何のために不在である必要があるのだろうか。それは彼が人間としての生存条件を拒否しつつ、なおも人間として生きていなければならないからである。人間の条件を捨て去って、なおも人間として存在する。このことに意味があるのだろうか。人間は社会集団を作って存在している。そこには法律があり、人間に一定の従属を課している。人は自由自在に生きる権利を奪われて、卑小化した精神に甘んじなければならない。そこには社会慣習があり、定められた家に居住し、生物を捕らえて自分の食料とする。何ゆえに人は殺生を犯してまで生きる権利があるのか。そこには人間の競争社会がある。人間は互いに助け合うと同時に、能力という名を借りて他人と競い合わなければならない。そして、富を求めて戦争にまで走り殺人を犯す。一体、人間に精神的な進歩があるのか。人間は地上の肉体的存在から離れて、また労働という苦役から離れて、精神の自由世界に生きる幸福を持つ必要があるだろう。

ベケットは小説を書き始める前に、まず語学教師として出発した。彼はダブリンのトリニティ・カレッジを卒業したあと、パリ師範学校の英語教師として赴任し、そこで同じアイルランド出身のジェイムズ・ジョ

イスの知遇を得た。この時、ベケットが執筆したのが評論『プルースト』である。プルーストとは無意識的記憶から過去の現象の本質を把握するという心情の間欠性を主題にした小説家で、大著『失われた時を求めて』は1927年に全七巻の出版が完結した。ベケットがパリへ赴任したのは1928年であった。二人の思想を比較してみると共通点があつて、若きベケットはプルーストから大いに刺激を受けたであろうことが理解できる。

語り手は、マンテーニャという画家が描いている深紅の衣をまとった大天使のように、最終章で勝利を歌いあげる七重奏曲の緋色の楽句の中に、独特で本質的な美、独特な世界、ヴァントウイユの不変の世界と美、それらのものが非物質的で観念的なものとして表明されているのを見る。ヴァントウイユの世界はソナタにおける祈りや懇願のごとく、また七重奏曲における希望のごとく遠慮がちに表現されていて、地上における肉体の生命を罰として呪い、〈死者〉なる言葉の意味を明らかにする〈目には見えない現実〉なのである。⁽²⁾

これは評論『プルースト』の中で、最後のページに述べられている文章である。ヴァントウイユという作曲家は小説『失われた時を求めて』において、主人公のマルセルがそのピアノ曲を特に好んだ作中人物である。ベケットは彼の音楽性について、「地上における肉体の生命を罰として呪う」と言う。この言葉は小説の語り手自身が抱いた思いなのか、それともベケットが語り手マルセルの心情を察知して述べているのか判然としないが、恐らく二人の思考が共鳴しているのであろう。プルーストは現在の時点における行為よりも、彼の追想の中において浮かび上がる情感を重視している作家である。彼はその時々において苦しみを受ける人間存在に対し、常に何らかの理由付けを行おうとする。それは小説

の主人公が過去を振り返る形式で記述していることから、過去の事実は常に語り手の判断を受けるためである。実ることのない恋は、相手と同時に自分の生存をも「呪う」ことになるであろう。愛すれば愛するほど相手の女性が遠ざかっていくとき、愛する者の愛情は自分自身の存在についても憎しみを抱くのである。こうした時、プルーストの主人公は恋人の女性が自分と一緒に居るよりも、彼女が外出していて不在のの方が、より穏やかに彼女を愛することができるという。不在の女性は追想の中で彼が嫉妬心を持つことなく、不品行に怒りを覚えることもなく、穏やかな心情で彼女と接することが出来るからである。不在の女性とは「目に見えない現実」であって、愛の真実を語るものであろう。

作家プルーストは、語り手マルセルは、そしてベケットは現実に存在する肉体を持った人間よりも、音楽におけるように抽象化された、目には見えない不在の世界を愛好している。小説の語り手マルセルが恋人に対する素直な気持ちを持てるのは、彼女が外出して不在の時であると同時に、もう一つ別の状況において、彼はこうした満足のいく幸福を味わう。それは恋人が眠っている時であって、モーリス・ブランショはその評論『火の部分』において述べている。

アルベルチヌがプルーストの奇妙な愛となるのは、彼女が眠っている時だ。その時、彼女の不在が存在するように思え、その眠りは彼女の中にある未知なるものを消し去ることなく実現し、捕らえることのできない不思議な女を、閉じ込めることのできない自由を引き渡してくれるのだ。⁽²⁾

眠りはプルーストの『失われた時を求めて』において、非常に重要な役割を果たす。というのも、眠りにおいて過去の色々な記憶が主人公によみがえってくるからだ。作家はこの小説の第一巻にあたる「スワン家

のほうへ」の冒頭を、主人公が宵寝^{よいね}をする場面から書き始めており、そこで、「眠っている人間は時間の糸を、歳月や万物の秩序を自分の周りに輪のように身につけている」と語る。眠っている人間は、過去の色々な出来事を記憶の中に留めている。目覚めている人間でも当然ながら過去の記憶を持っているとはいえ、眠りの状態にある人間は同時にその時点における状況に対して脳を働かせ、過去の重要でないことに対しては忘却に任せている。過去の事実としてある表面的な記憶よりも、より深いところに沈んでいる本質的な記憶、その人間の情感に係わるような記憶は、覚醒時よりも雑念に捕らわれない睡眠時の方が、その人間にとって想起しやすいであろう。だから、睡眠は過去の情操的な記憶の宝庫であって、夢の中に、また思いがけない追想の中に、人は過去の出来事に対する本質的な意味合いを改めて発見するのである。

眠っている人間は、隠された秘密をその身体に内包している。その秘密を見つけ出すことは、その人物を眺める者にとって容易であるように思える。なぜなら、その女性は睡眠の中で無抵抗であって、命令にさえ素直に従うであろう。眺める者を苦しめた過去の事実はすべて彼女の眠りの中であって、一言の合図で彼女は告白するであろうと思える。彼女は今や嫉妬を起こさせるような存在ではなく、彼の愛情を素直に受け入れてくれるように見える。眠っている女性は、男の望むものをすべて備えているようにさえ確信できる。眠っている肉体は目の前に存在しており、彼女の自分に対する愛情は眠りの奥深くに在りながらも、眺める者の自由に任されている。彼女の愛情はこの眠りの中にこそ存在する。しかしながら、その真の愛情は同時に彼女の眠りに包みこまれていて、眼前には不在の状態なのである。同時に真実の女性は不在であるけれども、眼前にはそれを隠し持った眠る女性がいる。真実の彼女は不在であるとしても、その不在は眠る彼女として現前している。プルーストは眠る女性の中に、現実の愛憎を離れた純粋な存在を見出すのである。

ノット氏に戻るとしよう。不在は何かの存在の消失である以上、その何かは実物としてはもはや存在しないとしても、かつては存在していたものである。たとえかつて実在しなかったとしても、それは人の思考の中に仮象として形成されていたものであるに違いない。不在は完全な無の状態では有り得ず、思考の中でイメージとして、そのイメージを支える言葉として存在が許されているものであろう。ノット氏は大邸宅で他人に姿を見せることもなければ、言葉を発することもなく生存している。しかし、彼の住居には二人の召使いがいて彼の世話をしているし、その召使いが作った食事を少量とはいえ食べている。ノット氏に隠されていることは、彼が他人と人間的な交際をしないということではなく、彼が何の目的を持って人生を送ろうとしているのかという点である。

人はただ食事を取って生きているだけの存在ではない。この地上に生を得ている以上、何かの生きがいを持って人生を過ごさねばならない。犬や鳥というような動物なら、その日に食べる食物を確保することが一番の目的であり、それだけで十分なのである。ところが、人間はどうか。何かの理由で、その日の食事に事欠く人間も確かにいるだろう。病気であり、貧困であり、戦争であり、災害でありというような原因による不幸である。しかし、その最低限の困窮から抜け出したとき、人は何かの生きがいを持たなくては、その生命が躍動することはない。ノット氏に何か生きがいがあるだろうか。彼は空ろな沈黙と閉ざされた闇の住居で生活している。他人と接触することを拒み、与えられたままの食事を取る。一体、ノット氏は何のために生存しているのか。この世に生まれた以上、死を選ぶことも出来なくて、生きながらえているだけなのか。小説家ベケットは、しかしながら、そのような無気力な人間を単に描いたのではないことは明らかであろう。

ノット氏は大邸宅で幽霊のような生活をしている。彼は何も仕事をしない。なぜ働かないのか。労働を嫌ったのは、セリアに恋をしたマーフ

イーであった。彼は恋人に対しても、労働が愛を破壊すると告げた。なぜ労働が愛の純粋さを傷つけることになるのか、その明確な理由を作者は与えようとしな。ただし、マーフィーは地上の「何の価値もないところ」で生きていきたいと願っている。人間にとって、労働は生存していくための一番重要な価値である。これを拒否する以上、愛の純粋さどころか生命の保証も失われてしまう。彼は恋人セリアと別れて精神病院で働くことを決意するが、自分の主義に背いた罰として作者が与えた結末は、ガスストーブの爆発による死であった。マーフィーは彼の信条として労働を拒否した。一方ノット氏は一人身で、仕事をしなくても二人の召使いに助けられて、生活していけるだけの資産を所有しているのである。だから、労働拒否を貫いたとしても、彼に不幸は起こらない。

ノット氏は何ゆえに他人に姿を見せないのか。姿を間近に見せなくても、二人の召使いにその存在は知れている。ガストン・ルルーの『オペラ座の怪人』のように、肉体に他人には見せられない傷を持っている訳ではない。彼はこの世に生存するとしても、ベケットがブルーストを論じたように、「肉体の生命を罰として呪っている」のか。そう考えることも不合理ではない。自ら労働拒否をした者が食事も満足に取らないとすれば、それは彼が自らの肉体を滅ぼそうと思っていることの証であろう。食事を拒絶する者は、ミイラになって精神世界に生きることを願っている。そこには人間社会から非難されることのない、自由な生き方があるに違いない。ノット氏とは、無職のままでも生きてゆけるマーフィーであるのだろう。彼は地上の幸福ではなく精神の王国を目指しているのだから、この現実世界において生きるための目標を必要としない。彼は現世に存在している。しかしながら、この世での人生の目標は何も持ち合わせない。彼の生きがいは天上の世界にある。彼が大きな邸宅に生活するとしても、そこには彼の不在が存在しているだけなのである。

注

- (1) サミュエル・ベケット、『マーフィー』、Samuel Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 23
- (2) 前掲書、p. 59
- (3) 前掲書、p. 59
- (4) 前掲書、p. 64
- (5) 前掲書、p. 62
- (6) 『聖書』、『新約聖書』、『ヨハネの黙示録』、フェデリコ・バルバロ訳、講談社、一九八〇年、三九四頁
- (7) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, p. 64
- (8) 前掲書、p. 153
- (9) 前掲書、p. 34
- (10) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 170
- (11) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, p. 10
- (12) 前掲書、p. 41
- (13) 前掲書、p. 154
- (14) ジャン=ポール・サルトル、『嘔吐』、Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, *Œuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1982, p. 143
- (15) 前掲書、p. 144
- (16) 『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p.45
- (17) ジョルジュ・バタイユ、『内的体験』、Georges Bataille, *L'Expérience intérieure*, Gallimard, 1943, pp. 67-68
- (18) 『ワット』、Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 207
- (19) 前掲書、p. 210
- (20) 『ブルースト』、Beckett, *Proust*, Les Éditions de Minuit, 1990, p. 106
- (21) モーリス・ブランショ、『火の部分』、Maurice Blanchot, *La Part du feu*, Gallimard, 1949, p. 233
- (22) マルセル・ブルースト、『失われた時を求めて』、『スワン家のほうへ』、Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, I, *Du côté de chez Swann*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1954, p. 5

Animal-Animal and Human-Animal Relationships in Proverbs, Fables and Stories: Interpretations and Responses

David DYKES

1. Introduction

Texts that offer people guidance in their interpretations of social predicaments or their ways of responding to them sometimes use animal metaphors as an intermediary code, allowing the writer to insert notes of criticism or, less often approval, without stepping too close to the reader's self-esteem. For this purpose, polemic terms such as 'worm' or 'vulture' are avoided, in favour of stock proverbial types such as 'fox' or 'lion' to which refinements are added for various effects.

Animal metaphors can also be indexical, in the sense of having a conventional place in some archetypal relationship. The lion is the king of beasts; the fox is a deceiver and thief, but also an avoider of traps. These profiles may further co-occur with gender or ethnic associations, as with the wolf in *Little Red Riding Hood*. But here, I mean to focus on situation-specific functions and roles, especially those associated with interactions such as experience sharing or advice giving.

I will begin by introducing a way of classifying speech roles and functions which can be used to compare text types in which animal metaphors are placed. Then I will look back on how animal proverbs and fables have been used in

the past to judge attitudes or actions while always allowing margins for special contingencies. In the course of this, it will appear that the task of applying ‘morals’ to complex situations becomes more open-ended over time, to the extent that people are increasingly expected to work out moral conclusions for themselves.

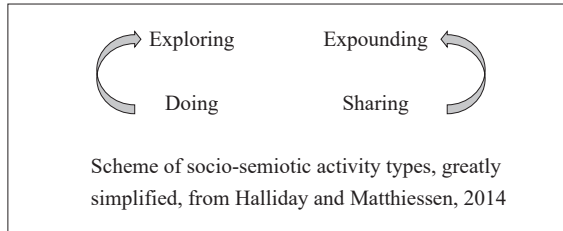
Finally, I will try to relate this principle of open-endedness to a class activity that I had a chance to view in a primary school recently: a ‘Read and Share’ session based on a story from the ‘Kitsune no Ko’ (‘Fox Child’) series of animal books by Moriyama Miyako (Moriyama, 1997).

2. A framework for interpretation and response

In my Introduction, I distinguished between ‘interpretations’ of predicaments and ‘responses’ to them. Thinking in terms of mood grammar, interpreting has to do with judging the present in the light of the past and is related in English to the indicative mood. Responding has to do more with taking the present as a guide for the future, which depends more on the imperative mood or modal uses of ‘can’, ‘should’, etc. Starting from insights like these, the functional linguists Matthiessen, Teruya and Lam (2010: 95–96) have devised a topology of socio-semiotic activity types. ‘Socio-semiotic’ means that these activities involve social signing systems such as talk or text. The topology ultimately goes back to a New South Wales model for teachable speaking and writing skill packages conceived as ‘genres’ but instantiated in individual texts (Martin and Rose, 2008: 1–9; Rose and Martin, 2012: 311–313).

The topology could be pictured in ring form, leading up from ‘doing’ on the left and ‘sharing’ on the right as simple, direct activities at the base to ‘exploring’ on the left and ‘expounding’ on the right as complex and indirect ones at the top

(Halliday and Matthiessen, 2014: 37):



But for my purpose I prefer to modify this layout by taking ‘doing’-based and ‘sharing’-based interactions separately, in matrix form, with the simpler, more direct types at the top each time:

Socio-semiotic Activity Types: I. Types based on Doing

Activity type	Subtype	Socio-semiotic function
Doing	Collaborating	Practical use of language for performing a task
	Directing	Practical use of language for getting a task done
Enabling	Regulating	Supplying rules to control people’s actions
	Instructing	Supplying instructions to assist people’s actions
Recommending	Promoting	Proposing actions to further one’s own interests
	Advising	Proposing actions to further receiver’s interests
Exploring	Reviewing	Assessing a thing in terms of its societal value
	Arguing	Assessing a choice in terms of its societal value

Socio-semiotic Activity Types: II. Types based on Sharing

Activity type	Subtype	Socio-semiotic function
Sharing	Sharing experiences	Comparing others’ experiences with one’s own
	Sharing values	Comparing others’ evaluations with one’s own
Recreating	Narrating	Imaginatively evoking an experience in words
	Dramatising	Imaginatively evoking an experience in actions
Reporting	Inventorying	Setting out the elements of some class of things
	Surveying	Setting out the parts of some area of space
	Chronicling	Setting out the stages of some series of events
Expounding	Explaining	Accounting for general classes of phenomena
	Categorizing	Arranging general classes of phenomena

(Based on Halliday and Matthiessen, 2014: 40, but shortened and vertically reordered)

This makes a robust base for writing practice. It is enough to offer a model for each subtype in the matrix and supply examples and methods for achieving it. For reading, however, it is rare to find a text or talk that can be fully described in terms of just one activity type. A real-world ‘report’, for example, includes ‘explanations’ and may end on a ‘recommendation’. The word ‘Report’ on the cover shows that it is meant primarily as a setting out of something, but it is not likely to stay true to that on every page and at every moment.

Going back to animal stories, a title like ‘Fox Child’ suggests a ‘narration’ or ‘dramatisation’, but in fact what stands out in Moriyama’s stories is the way they involve ‘sharing’ of childhood experiences and values. That may be why the series title is ‘Fox **Child**’ (‘Kitsune no **Ko**’), not ‘Baby **Fox**’ (‘**Kogitsune**’). For reading / listening purposes, then, the ‘activity types’ in the topology do not lead so automatically to text type labels. There is generally a remainder. These are interpretation frames, and real-world texts of more than minimal variability can be interpreted using more than one frame. After that comes the need to decide which reading and response choice, if any, is primary, and what more complex effect has been achieved by leading the reader or listener along more than one interaction pathway. Most animal stories have complex reading potential of this kind, because the interactions with animals, or among animals only, make up a one-step-removed code for a range of interpretation and guidance options. But to pursue this line further would be jumping the argument. Let us slow down again, and take a look at a few older animal metaphor texts through this framework just introduced.

3. How animal observations and stories have been used in the past

The origins and styles of animal proverbs and stories, and their applications

to human affairs, may be quite diverse even in a single collection. It is therefore unrealistic to attempt a sweeping overview of how all uses of animal metaphor work in moral norm setting. All that can be offered are selected instances. This will be enough, however, to make the point that texts and talks of this sort are widespread and frequently exchanged across oceans and continents. It is no surprise, for example, to find a proverb about ants, most likely taken from secular Persian or Greek sources, turning up in the ‘wisdom’ section of Jewish scripture as part of *The Proverbs of Solomon* (Hebrew: *Mishle Shlomoh*):

Go to the ant, you sluggard; consider its ways and be wise!

It has no commander, no overseer or ruler,

Yet it stores its provisions in summer and gathers its food at harvest.

How long will you lie there, you sluggard? When will you get up from your sleep?

Proverbs, 6. 6–9 (New International Version)

The term ‘proverb’ here goes back via Greek ‘par-oimion’ (‘proverb’), to Hebrew ‘*mashal*’, a broad term that covers most of the repertoire of Jewish wisdom preaching: wise sayings, oracles, taunts, parables, etc. (Gowler, 2000: 48; biblestudytools: The Nature of a Proverb). To express all of this in one English word would require a hold-all term like ‘*saying*’, and in fact there are translations with titles like ‘*The Wise Sayings of Solomon*’ (NLV).

This relatively late Ant proverb seems to be approaching what was later known in Greek as a ‘*parabole*’ (‘likeness’, ‘parable’). In Hebrew, too, ‘*mashal*’ eventually came to refer narrowly to the opening interest-catching subject matter, leaving the explication to a separate element called the ‘*nimshal*’, from a verb meaning ‘be like’. The preacher would first offer a teasing paradox (*mashal*) which he would then account for (*nimshal*). From the preaching

viewpoint, this *mashal* – *nimshal* relation thus opens a strategy path leading to an objective: “The *nimshal* intends a normative teaching and the *mashal* is created to fit it” (Thoma and Wyschogrod, 1986: 168).

Returning to the activity type matrices again, it is noticeable that the opening and last lines of the proverb (‘.... consider the ant’s ways When will you get up from your sleep?’) belong grammatically together. They are in the second person (‘you’), in imperative / interrogative moods. In the matrix framework, they can be described as ‘promoting’ a wise way of behavior. The second and third lines (‘It has no commander Yet it stores its provisions’) are in the third person (‘it’), in declarative mood. They can be classed as ‘inventorying’: setting out the ant’s wise ways for the sluggard to learn from. These middle two lines are not strictly essential for the sense of the promotional message. But the proverb would lose all of its memorability and most of its persuasive appeal if these amusing details were left out.

There are two grounds, however, for saying that this text is not a parable as it stands. For one thing, the rebuke ‘you sluggard’ continues unchanged from line 1 to line 4. Secondly, the argument fits into a larger context. The purpose of *The Proverbs of Solomon* as a whole, as explained in its opening verses, is to lead people to wisdom by ‘giving prudence to those who are simple, knowledge and discretion to the young’ (1, 4) while ‘the wise listen and add to their learning’ (1.5). In the first seven chapters, these objectives are expanded on, and chapter 6, with the Ant, is part of the general expansion on ‘prudence’ and ‘discretion’.

All the same, there is something parable-like in the clash between the exemplum of the Ant and the sluggard’s idleness. And it is more than just a Jewish clash. Boyarin (2003) argues that the *mashal* – *nimshal* argument structure can serve more generally as a means of exemplification leading up to a ‘moral lesson’. He demonstrates this for Christian parables in *The Gospel according to Matthew*, but there is no reason why it should not work in other

religions too, or in secular ethics. As we shall now see, there is evidence to suggest that the contents and applications of Aesop's Fables, for example, may have evolved over time towards open-endedness.

4. How Fables have been used in the past, and how they have changed

Aesop is said to have served King Croesus of Lydia and have died around 564 BCE. After his death, by one process or another, he seems to have acquired a reputation as a teller of fables that were less simple than they seemed. Otherwise, views on him diverged. According to Aristophanes (2005: 566 f), writing in 422 BCE, Aesop fables such as 'The Wolf and the Lamb' were misused at trials to excite judges' compassion. In contrast with this, however, Socrates, facing unjust execution in 399 BCE, is said to have spent part of his last day reacting to the pleasures and pains of human life by putting some of Aesop's fables into verse (Plato, 2004: 10).

The earliest known large collection of Aesop's Fables was made in prose by Demetrius of Phaleron after 300 BCE (Britannica, 2019: 'Demetrius of Phaleron'). But this has not survived. Modern versions go back to prose and verse compilations from around the end of the first century CE, especially a collection in Greek verse by Babrius (Davies, 1860). A lean narrative form ending on a short concluding 'moral' ('epimyth') has remained the staple fable form ever since. Its antiquity was confirmed in 1844 through the recovery of a manuscript going back more directly to Babrius than any versions that were previously known (Davies, 1860: Introduction).

I will now return to my more detailed argument by selecting one fable from Babrius to compare with the 'Go to the ant' proverb we saw earlier. An obvious choice is 'The Ant and the Grasshopper', which Babrius, in his Mediterranean

climate, calls 'The Ant and the Cicada'.

In winter time, an ant dragged forth, to dry,
 Some corn by him last summer heap'd on high.
 A starved grasshopper begg'd that he would give
 Some share to it, lest it should cease to live.
 "What did you?," asked he, "All the summer long?"
 "I lagg'd not, but was constant in my song."
 Laughing, the ant said, as he barr'd his wheat,
 "Dance in the cold, since you sang in the heat!"

Of needful things 'tis better thought to take,
 Than joy and revels our mind's study make.

(Babrius, translated Davies, 1860: 119)

In terms of interaction, this text can be broken down into three parts. The two lines at the top present a situation in which an ant is well stocked to survive the winter. But this is upset by the arrival of a 'starved' grasshopper in the third line. With this, the focus of interest shifts to an implied ethical contrast rather similar to the one in *Proverbs* between the ant and the sluggard. But as everything in the fable so far is presented in an unlocated past tense with no clear link to the speaker's present, a search through the matrices of activity types suggests that it is on the way to becoming a 'narration' recreating a typical early winter predicament in an agrarian society.

This perception is modified in the passage from line 3 to line 8, however, as the interaction moves over to a direct speech dialogue, featuring 'you' and 'I' as the action subjects while 'he' (the ant) and 'it' (the grasshopper) remain as the speaking subjects. As far as actions are concerned, by line 8 the text

has virtually turned into ‘drama’. Notice, however, that the ‘you’ and the ‘I’ pronouns all refer to the grasshopper, whose predicament this is all about. As in the ‘Go to the ant’ proverb, the ant is only of interest as a role model or a moral accuser.

Finally, the fable closes with a general impersonal moral: ‘.... ’tis better thought to take’ In principle, this could be applied to anybody, but in practice it fits the ant positively and the grasshopper negatively. Any other match is ruled out by basic biology: real ants are predisposed to gather food, while grasshoppers – let alone cicadas – are programmed only to sing and die. There can therefore be no grounds for saying that the grasshopper could have fared any better by investing in food storage. That lesson is only of comfort to a human listener or reader.

In that sense, the ‘epimyth’ (the concluding ‘moral’) is sharply distinct from the narrative and dialogue. That may be why it is set apart with an empty line between. The separate epimyth is known to have existed in fables from ancient times and has been discovered in very old papyrus remains. But it is not a feature of every fable, and about half of those in the known Babrius collection end without one. Instead, in many cases there is an integrated closing speech of reflection spoken by a character, or a taunt delivered by a winning character against a losing one. If the separate moral couplet in Babrius’ Ant and Grasshopper story were to be left off, an integrated taunt of this kind would be exactly the ending that remained:

‘Dance in the cold, since you sang in the heat!’

It is not impossible that the fable once did end in this way, and that the couplet was added at a later stage by a copyist or commentator (Davies, 1860: Introduction, note 14).

If I tried to give even a minimal overview of developments in fable composition in centuries following Babrius, I would not be able to stay within the space limits I have set myself. Instead, let me just point to two greatly contrasting examples of how the concluding moral comment can be reduced to nothing or expanded to outweigh the fable story itself.

Jean de La Fontaine, who takes ‘The Cicada and the Ant’ (‘La Cigale et la Fourmi’) for the opening item in his collection of Fables (La Fontaine: 6–7), publication of which started in 1668, not only ends on the singing and dancing taunt, with no other moral to follow:

– Vous chantiez? J’en suis fort aise. – You were singing? Delighted to
hear it.

Eh bien! Dansez maintenant. Well then! Now you can dance.

(La Fontaine, n. d. [1668]: 4. My translation.)

but also removes the opening lines that tell of the Ant’s wisdom and frugality in laying up stores. What remains is wholly focused on the Cicada. Moreover, as ‘cigale’ and ‘fourmi’ are both feminine nouns in French, the tale turns by grammatical logic into a comedy of manners between two mismatched housewives: the underinvesting Cicada and the slow-to-lend Ant. The dialogue is the same in its basic development as in the dialogue section of the Babrius fable (lines 3 to 8), with the Cicada begging for grain in indirect speech and the Ant countering in direct speech, first with a question and then with a refusal and a taunt. But the six lines in Babrius are expanded to 22 in La Fontaine, and come loaded with vocabulary from activity areas like domestic economy and loans on interest that would be unthinkable if this were to be read as a metaphor only:

《Elle alla crier famine	“She went crying famine
Chez la Fourmi sa voisine,	To the Ant her neighbor,
La priant de lui prêter	Begging for a loan
Quelque grain pour subsister	Of some grain to tide over
Jusqu’à la saison nouvelle.	Just until next season.
Je vous paierai, lui dit-elle,	I’ll pay you back, she said.
Avant l’Oût, foi d’animal,	Animal’s word, by August,
Intérêt et principal.》	Interest and principal.”

(La Fontaine, n. d. [1668]: 4. My translation.)

At the other pole to this, one could cite the heavy prose in Thomas Bewick’s 1818 edition of *The Fables of Aesop and Others* (Bewick, 1818). Bewick’s Aesop editions were outstanding for their high-quality woodcuts, but the texts were not their selling point. When a text is read alone, it becomes obvious that nothing survives of the original lean narrative

A commonwealth of Ants, having, after a busy summer, provided every thing for their wants in the winter, were about shutting themselves up for that dreary season, when a Grasshopper in great distress, and in dread of perishing with cold and hunger, approached their avenues, and with great humility begged they would relieve his wants, and permit him to take shelter in any corner of their comfortable mansion. (...)

(Bewick, 1818: 307)

This is only the first half of the fable, and although the Ants respond again in dismissive direct speech as in the other versions we have seen, the effect seems to be aimed more at the reader than at the Grasshopper. The taunt for him to try dancing goes flat amidst a kind of temperance sermon against drink, song and

dance generally:

(...) If that be the case, replied the Ant, all I have to say is this: that they who drink, sing and dance in the summer, run a great risk of starving in the winter.

The ‘Application’ (moral) that follows is about 25% longer than the fable itself and takes the form of ‘advice’ to work hard in youth so as to be able to save later for the wants of old age. It is worth remembering that this was the age of demobilisation after the Napoleonic Wars, when the roads were peopled with vagrants one of whose problems was how to go begging unobtrusively enough at back doors to escape being caught and sent to a workhouse. But, formally, the Application text is not about responding to unemployment and vagrancy as existing problems so much as about ‘advising’ the next generation how best not to follow their seniors into such poverty traps.

La Fontaine and Bewick represent almost opposite poles of the undertaking of retelling Aesop under varying sets of interaction conditions, and even if the grim predicament of the Grasshopper / Cicada never drops out of view in these stories, the ‘serve you right!’ attitude of the Ant / Ants is disconcerting for many readers today, either in its comedy-of-manners variant (La Fontaine) or in its Northumbrian work ethic one (Bewick).

5. Read for yourself, then talk together

As a closure for this paper, my initial idea was to discuss one or two attempts of divergence from mainstream fable traditions that offer the chance of an overhaul for the benefit of future ages. This could mean, for example, bringing

in more minority indigenous or immigrant views of community history and culture. One example of this would be the adaptation of an indigenous Australian story, 'The Echidna and the Shade Tree' (Green, 1984), as a composition model for primary school storytelling training, as discussed by Martin and Rose (2008: 244–247).

Another positive model to follow might be a recent project to identify core characteristics in the local fable legacy that could then be preserved while updating some less essential features. For example, in a German project of 'Writing Fables' as a school class activity (Levrai, 2011), the core legacy adopted was the line of descent from Martin Luther (Luther, 1995). The initial finding, as hinted in section 4 above, was that a fable in this lineage depends on a careful balance between simple and subtle. On the simple side, the animal protagonists stand for particular types or classes of people arranged around a theme of human foolishness. The stories have to be short and sparing on detail, with a small cast of characters – in many cases, just two. On the subtler side, the fact that the place and time of the action are unspecified generates a sense of universality. As no claim can be made that such a placeless, timeless action has really occurred, the fable appears on first sight as a fiction; yet with well-judged touches or phrases, the fault lines of contemporary society can be laid bare by this technique, so that it is not hard in practice to draw connections with real current events and people. In other words, the closing 'moral', where there is one, while in principle staying general in scope, in effect allows fairly sharp comments on the way things are happening in the world – albeit obliquely and deniably.

An ending of this very general sort was my original intention. However, in early September of this year, I had a lucky chance to watch some classes in the lower primary grades at the Japanese School in Istanbul and noticed that one of them was based, in a 'Read and Share' way, on a modern story that could be

regarded as an open-ended successor of an animal fable legacy. The author, who died in 2018, was Moriyama Miyako and the story used was ‘Yūyake’ (‘Sunset Glow’), one of a cycle of month-by-month childhood experiences shared by three class friends, Kitsune no Ko (Fox Child), Usagi no Ko (Rabbit Child) and Kuma no Ko (Bear Child). From the pronouns used (‘boku’, ‘watashi’), it can be inferred that Rabbit Child is a girl while Fox Child and Bear Child are boys. The title of the cycle is *12 no tsuki no chiisana ohanashi* (‘12 Months of Little Stories’) (Moriyama, 1997).

Moriyama was a prolific writer of animal stories for young children. A feature of most of her work is that the animal characters have no personal names, but only generic ones such as ‘Korisu’ (‘Little Squirrel’) or ‘Kousagi’ (‘Little Rabbit’). Once launched, the same character often appears in several more stories based on a human child’s growing experiences. Thus, there are ‘Kousagi’ (‘Little Rabbit’) stories from 1977, 1983 and 1986, ‘Kobuta’ (‘Little Pig’) stories from 1983, 1986 and 1989, and so on. If names are given, they are still based on the animal name (three stories about ‘Kobunta’, a pig, in 1990; three about ‘Kabao’, from ‘Kaba’ – ‘Hippo’, in 1985, 1986 and 1988) and so on. The name choices do not seem to be tied to publishing contracts, because in each case the series is spread across two or more publishers. I have not discovered any discussions of this naming practice among readers or critics, but it seems to me that the appeal of Moriyama’s books depends on the child being able to slip easily into a bonding relationship with Little Rabbit, for example, as she makes strawberry jam (1977) or learns her “a – i – u – e – o” syllables. Thinking of Niimi Nankichi’s more canonical fox stories, part of the special reading appeal of ‘Tebukuro o kai ni’ (‘Going to Buy Gloves’) is that the fox child and its anxious mother have no names, so that this story is more accessible to young readers than ‘Gon Gitsune’ (‘Gon the Fox’) in which both Gon and the local farmers are named.

Whether my view of this is right, I cannot say. But after Fox Child, Rabbit Child and Bear Child first came out as a threesome in 1997, the ‘Fox Child’ cycle of experience stories achieved particular popularity, apparently because of the immense bonding attraction with the Fox Child character. The Rabbit Child and the Bear Child are supporting ‘classmates’ characters, one a little more gentle, the other a little boisterous, who provide the Fox Child with the experience of a peer group circle as they all three grow up together. As a result, the series is adept for taking in children’s social anxieties and experiences, not so much personal or family ones. At any rate, at least two of these stories have been adopted as reading texts in authorised Japanese Language textbooks for first grade classes: ‘Yūyake’ (‘Sunset Glow’), in ‘Kokugo 1 nen’ (Mitsumura Tosho, 2015) and ‘Kaigara’ (‘Seashell’), in ‘Kokugo 1 nen’ (Tōkyō Shoseki, 2015).

My emphasis here on peer group childhood experience is reinforced, and in some aspects no doubt awakened, by my reading of a detailed analysis of the ‘Yūyake’ story as a learning text included in a research blog compiled by Miwa Tamiko, a previous elementary school teacher and president of the Saitama branch of the Child Language Research Society. Miwa fills in the background that Moriyama’s ‘12 months’ cycle of stories goes back still earlier to 1990–1991, when the stories appeared periodically as ‘Haru, natsu, aki, fuyu no ohanashi’ (‘Spring, Summer, Autumn, Winter Stories’) in a house magazine of the Benesse Corporation (Miwa, 2015). But more importantly, she stresses the empathetic way in which the three animal friends are always portrayed ‘within their group, their natural surroundings and the various concerns that affect them’ (‘nakama, shizen, sorera to no kakawari’).

While the adventures of the three playmates are not wholly comparable with the naturally and socially conditioned interactions of the Ant and Grasshopper, Fox and Wolf, and so on in Aesop, the overlapping interest in the personal

and communal outlooks, and the recurring encounters of the same limited cast of characters in varying life situations offers points of resemblance. And as Moriyama's interest is especially in the shared growing experiences, there is an ethical connection, as well, to the conflicts and compromises, tied up with multiple practical and moral issues, that need to be faced in the lifelong quest for wisdom in *Proverbs* and in the more open-ended raising and elucidating of teasing Parables that later grew out of this wisdom literature.

With Moriyama's stories, the learning activities are essentially a matter of reading into the Fox Child's feelings. In the 'Yūyake' story, it turns out that attention and encouragement are not as easy to win from peer-group friends as from parents, but have to be arrived at through byways, by joining in with the group first, and later sharing satisfactions and discoveries. Reading first what the characters say and feel about things ('hitoriyomi' – reading on your own) and then sharing impressions and ideas within the class about it ('hanashiai' – sharing what you have read) is the basic strategy for this kind of classwork. And clearly the teacher in the class I visited shared some of the same methodological ideas for this process that I later found set out in the research blog by Miwa.

6. Conclusion

This has been an exploratory study for me, and has included some areas I am far from familiar with. So let me simply recapitulate the ground I have covered.

I began by making the well-known point that animal proverbs and fables are not works of biology, but part of an ethical heritage in which animals and their purported relationships stand for human roles and relations. It is thus necessary to take a step back while reading them, and one way of doing this is to follow an 'interaction topology' so as to show which actions are similar and which

are different. Using this, I tried to trace some developments in the past use of proverbs in Middle Eastern wisdom literature and of fables, mainly in Europe. In both cases, there are multiple ways of telling the tale and of applying it, but there is a long-term tendency, I believe, for the process to become open-ended with passing time.

Finally, after sketching out two possibilities for further future enrichment of proverb and fable legacies, through diversification of sources and through greater discernment of what is essential to a fable and what can be changed, I returned to everyday life and reported a personal experience I had just a month before submitting this article: a visit to a first-grade ‘Read and Share’ classroom activity in an elementary school. It struck me that there was something in common between this discovery reading approach and the open-ended ‘wisdom quest’ that marks the future for proverbs and fables. In section 5, therefore, I examined my reactions to this insight, rather than attempting just yet to supply a well-reasoned account of what is going on here. That account, if it comes, will be for a future publication.

References

- Aristophanes, 2005 [422 BCE]. *The Wasps*. In Aristophanes: The Eleven Comedies. Volume 2. Translated The Athenian Society. Project Gutenberg.
- Babrius, Valerius (?), 1860. *The Fables of Babrius in Two Parts*. Translated Davies, John. London: Lockwood and Co.
- Bayarin, David, 2003. *Sparks of the Logos: Essays in Rabbinic Hermeneutics*. Leiden: Brill Academic Publishers.
- Britannica (*Encyclopaedia Britannica*): Biography: ‘Demetrius of Phaleron’.
- biblestudytools, n.d. *The Book of Proverbs*. ‘The nature of a proverb’
- Gowler, David, 2000. *What Are They Saying about the Parables?* New York: Paulist Press.
- Green, Mona, 1984. *The Echidna and the Shade Tree: An Aboriginal Story*.

- Compiled by P. Lofts. Sydney: Scholastic.
- Halliday, Michael A. K. and Matthiessen, Christian M. I. M., 2014. *Halliday's Introduction to Functional Grammar*. Fourth Edition. London and New York: Routledge.
- La Fontaine, Jean de, n. d. [1668]. *Les Fables de Jean de La Fontaine*. Livres I–IV. La Bibliothèque électronique du Québec Collection À tous les vents. Volume 503: version 2.0.
<https://beq.ebooksgratuits.com/vents/Lafontaine-fables-1.pdf>
- Levrai, 2011. Deutsch Übungen: Fabeln schreiben.
https://online-lernen.levrai.de/deutsch-uebungen/fabeln/fabeln-schreiben/01_a_merkmale_der_fabeln.htm
- Luther, Martin, 1995. Martin Luthers Fabeln und Sprichwörter mit zahlreichen Abbildungen und Holzschnitten von Lukas Cranach. Edited by Reinhard Dithmar. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Matthiessen, Christian M. I. M., Teruya, Kazuhiro, and Lam, Marvin, 2010. *Key Terms in Systemic Functional Linguistics*.
- Martin, J. R., and Rose, David, 2008. *Genre Relations: Mapping Culture*. London and Oakville, CT: Equinox.
- Mitsumura Toshio, 2015. *Kokugo I nen*. (Authorised Japanese Language textbook).
- Miwa, Tamiko, 2015. 'Miwa-sen no "Hitoriyomi" to "Hanashiai" no jugyō'.
 三輪民子, 2015年。「三輪先の『一人読み』と『話し合い』の授業」。
<http://blog.livedoor.jp/itidokusougouhou/archives/2015-09.html>
- Moriyama, Miyako, 1997. *12 no tsuki no chiisana ohanashi*. Tokyo: Doshinsha.
 森山 京, 1997年。「12のつきのちいさなおはなし」。東京: 童心社。
- NIV (*New International Version*). 2019. Nashville TN: HarperCollins Christian Publishing: *The Book of Proverbs*.
https://www.bible.com/ja/search/bible?q=book%20of%20proverbs&category=bible&version_id=111
- NIV (*New International Version*) Study Bible, 2002. The Book of Proverbs: 'The nature of a proverb'. Zandervan.
<https://www.bible.com/versions/111-niv-new-international-version>
- NLV (*New Life Version*): *The Wise Sayings of Solomon*.
<https://www.biblegateway.com/passage/?search=Proverbs+10&version=NLV>
- Plato, 2004. 'Phaedo, or The Immortality of the Soul'. In *Plato's Apology, Crito and Phaedo of Socrates*. Translated Henry Cary. Project Gutenberg.

- Rose, David, and Martin, J. R., 2012. *Learning to Write, Reading to Learn: Genre, Knowledge and Pedagogy in the Sydney School*. Sheffield and Bristol, CT: Equinox.
- Thoma, Clemens, and Wyschogrod, Michael, Theologische Fakultät, Luzern, Institut für Jüdisch-Christliche Forschung, American Jewish Congress, 1986. *Parable and Story in Judaism and Christianity*. Luzern: Theologische Fakultät, Luzern, American Jewish Congress, Institute for Jewish-Christian Relations. New York: Paulist Press.
- Tōkyō Shoseki, 2015. *Kokugo 1 nen* (Authorised Japanese Language textbook).

Federation of American Immigration Reform (FAIR) and Racist Discourse

Yuko OKADO-GOUGH

Abstract

On 3 August 2019 a mass shooting took place in Texas, USA. The suspect posted his ‘manifesto’ online, clearly stating that his actions were racially motivated. His views echoed the restrictionist views of the Federation of American Immigration Reform (FAIR), which is currently classified as a hate group by the Southern Poverty Law Center. This essay analysed whether or not it disseminates racist discourses through its website. It looked at the role of the internet in modern day communication and presented a brief overview of Multimodal Critical Discourse Analysis (MCDA). The FAIR homepage was examined to evaluate claims of racist discourse using the methods of MCDA, and the study concludes that the website contains racist discourse.

Keywords: Federation of American Immigration Reform (FAIR), racism, discourse, analysis, multimodality, CDA, MCDA

Introduction

The deadly shooting on 3 August 2019 in El Paso, Texas, claimed 22 lives and injured 24. Shortly afterwards the media was quick to report the anti-immigration ‘manifesto’ the perpetrator posted online just minutes before the shooting. The statement was posted on *8chan*, an image board website

consisting of user-created message boards. Its founder, Frederick Brenan, was “committed to near absolute free speech” (Wong, 2019), and the site was known to be widely used by alt-right groups and individuals, such as the Christchurch mosque shooter (Roy, 2019) and Poway synagogue shooter (McGowan, 2019). The site had been accused of being a “notorious bastion of hate speech” and is no longer available to the public as it was dropped by its network infrastructure provider. His manifesto, along with his actions, were celebrated on *8chan* (Wong, 2019). It stated clear motives in targeting this predominantly Hispanic city near the US-Mexico border, echoing the strong restrictionist sentiments, which the Federation of American Immigration Reform (FAIR) is renowned for (Crusius, 2019).

The perpetrator followed the example of the Christchurch mosque shooter and the Poway synagogue shooter and posted his manifesto on *8chan*, titled *The Inconvenient Truth*, which starts as follows:

In general, I support the Christchurch shooter and his manifesto. This attack is a response to the Hispanic invasion of Texas. They are the instigators, not me. I am simply defending my country from cultural and ethnic replacement brought on by an invasion.

The notion of ‘Hispanic invasion’ and ‘cultural and ethnic replacement’ are ideas widely supported by alt-right groups and individuals, often referred to as “white replacement theory” (Schwartburg, 2019). Hours after the shooting, Dan Stein, president of the FAIR, issued a tweet in the organisation’s name denouncing the shooting and, in an interview, “repeatedly brushed aside connections between FAIR’s ideology and the suspect’s” (Nakamura, 2019).

FAIR is a non-profit anti-immigration organisation in the United States. It was founded in 1979 with the aim of influencing US immigration policies. Its founder, John Tanton, was “the guiding force of the contemporary anti-immigration movement” (Goodman, 2019). The retired ophthalmologist and

pro-eugenicist made his case “against immigration in racial terms” (DeParle, 2011). He expressed his concern about the decline of “folks who look like you and me” when writing to a donor.

The president of FAIR quickly distanced the organisation from the gunman in the aftermath of the shooting, despite the fact that many of the organisation’s anti-immigrant arguments were cited in the statement by the perpetrator. The organisation is currently categorised by the Southern Poverty Law Center (SPLC) as a hate group (Beirich, 2008) for reasons, among other things, such as the receipt of \$1.2 million from the Pioneer Fund, an organisation founded by Nazi sympathisers “to pursue race battlement” (Beirich, 2010), prevalence of anti-Latino and anti-immigrant attitudes (Beirich, 2008), and the promotion of racist conspiracy theories (Potok, 2007).

The aim of this essay is to ascertain whether or not the claim by the SPLC is legitimate, with the focus on whether the organisation’s website disseminates racist discourse to its readers. It seeks to establish whether the narratives provided by FAIR are ‘unjust’, that is, whether it is “*illegitimate* according to some international human and social rights” (Van Dijk, 2009).

Methodology

FAIR’s homepage will be examined to ascertain if they single out certain groups of people; whether they depict those singled out in a prejudicial manner; and whether they display displeasure, dislike or even hate towards the members of those groups. Both the content and its presentation are analysed to see if they display *manipulative discursive practices* using the framework presented as tool kits by Machin (2007) based on the multimodal, social semiotic approach. The subjects include iconography, modality, colour, typography, inventory of

meaning potentials, and visual composition. All these aspects play a significant part in recreating a certain reality through metaphorical association. In doing so, it reconstructs social practices including its power relations and inequalities.

The focus here will be on iconography, colour, and visual composition of images on the website. Particular attention will be paid to the semiotics of colour. Visual composition of images with people will also be examined, and so will be the content and typography of headlines. Hence, two headlines and one article have been selected on the basis of accompanying images in order to assess the representation of people on this website (figures 3, 5 and 6). Another headline has been chosen in order to evaluate its colour and visual composition (figure 4).

The Internet and the Extremist Views

8chan is neither the first nor the last website to attract widespread criticism for inciting more extreme elements in society such as white supremacists and other alt-right groups. With the election of Donald Trump as the 45th US president, his then chief executive officer and Chief Strategist in his administration for some six months, Steven Bannon, came to prominence as an outspoken advocate for national populist conservatism. He was a co-founder and the former executive chairman of *Breitbart News*, a far-right website, well known for its alt-right readership, and has been criticised for escalating misogynistic, xenophobic and racist attitudes among its already conservative readers. Another website, *InfoWars* is also well known for its far-right briefs and conspiracy theories.

While the freedom of the internet and its democratic potential were being marvelled at in the early 2000s, Sunstein (2001) warned that the Internet's

filtering technology would “increase people’s ability to wall themselves off from topics and opinions that they prefer to avoid” (p. 202). He argued that it would allow individuals to tailor “the daily me”, in which they choose only to see “exactly what they want to see, no more, no less” (ibid. p. 3), leading to greater polarisation of a country’s politics. Although it is understood that people are not so contained within their comfort zones, Pew Research Centre (2014) found that “it is virtually impossible to live in an ideological bubble” in the US, and the majority of people consume an array of news resources with varying audience profiles. However, it was also noted that “liberals and conservatives inhabit different worlds” when it comes to politics. It is also true that those on the extreme ends of the political spectrum, while relatively small in number and have “little overlap in the news sources” with each other, tend to have greater impact on political processes, through voting, donating or participating directly in politics. They also found that consistent conservatives are more likely to distrust other media outlets than the ones they closely follow, and they are more likely to voice their political opinions while on *Facebook*.

In recent years, we have witnessed the dramatic rise in prominence of far-right movements in the US. While the election of Donald Trump to the White House has been cited as “a factor in the re-energisation of activists and groups that reject both left-wing ideology and mainstream conservatism”, social media is said to be playing a large part in promoting these ideologies (BBC, 2017). Their movement is predominantly online, enjoying the anonymity and freedom that the internet affords them, and consequently there has been an urgent call for a government ban on far-right hate groups from making media appearances (Dearden, 2019). Several social media outlets have already implemented some measures not to provide platforms for those with extreme viewpoints. For example, a dozen far-right individuals and organisations have been banned from *Facebook* (BBC, 2019), and such sites as *8chan* have disappeared from

the world wide web altogether. The turning point was when the Christchurch mosque gunman live-streamed his attack on *Facebook*, which was “replicated seemingly endlessly and shared widely in the wake of the attack” (Wakefield 2019). The company came under enormous pressure to take action against hate-groups, and other outlets such as *YouTube* and *Reddit* followed suit in removing video clips of similar content (BBC, 2019).

Television broadcasters are expected to adhere to certain ethical standards, and each network has a standards and practices department which is responsible for the moral, ethical and legal implications of the programs that they air. This, in turn, gives the broadcasters a sense of trustworthiness albeit the degree of which may depend on the predisposition of viewers. On the other hand, the internet media enjoys far greater freedom that comes with the anonymity of unidentifiable, though not completely untraceable, pseudonyms. Yet, certain sites carry the air of being more credible than others, and those with a sense of credibility can influence public opinion by effectively disseminating their views and beliefs, although it may not go as far as tailoring ‘the daily me’.

Multimodal Critical Discourse Analysis

MCDA emerged as a school of Critical Discourse Analysis (CDA) in the 1990s, inspired by Halliday’s Systemic Functional Linguistics (Van Leeuwen, 2009, p. 148) which explains the prerequisite existence of ‘context’ or social environment in the production and the use of any given language and focuses on the social function of such language. Moving towards a sociologically orientated approach, from the more linguistically orientated *text-linguistics*, CDA combines linguistics with sociology by taking into account the social and cultural context in which language is used. Its concern lies with unveiling

patterned mechanisms of the reproduction of power asymmetries, that is, to address the power behind discourse: how ‘powerful’ people, i.e., those with access to the production of discourse, “shape the ‘order of discourse’ as well as the social order in general” (Fairclough, 2010, p. 10).

While the term ‘discourse’ is often used to mean ‘text’, or “an extended stretch of connected speech or writing”, Van Leeuwen (2009) defines discourse as “socially constructed ways of knowing some aspects of reality” based on the Foucauldian use of the term (p. 144). Kress (2011) explains discourse as “a result of processes of ‘weaving’ together differing ‘threads’ —usually assumed to be either *speech* or *writing*—into a coherent whole” (p. 36). According to Kress, ‘weaving’ implies the presence of a ‘weaver’ who has a sense of coherence, and in MCDA, who the ‘weaver’ is, and what forms of ‘coherence’ are shaped by the ‘weaver’ is of great significance. Furthermore, he argues that coherence is a defining characteristic of text, and the coherence of a text derives from the coherence of the social environment in which it is produced, or which it projects. What is important here is that discourse is not just a string of words which exists independently from its social environment, but it is born out of its social environment and functions as a part of social practices.

This process of ‘weaving’ can involve different semiotic resources, which have the potential to make meanings through metaphorical association. In other words, our communication practices can be multimodal. In fact, our communication practices are rarely through a single mode: they usually involve combinations of textual, aural, linguistic, spatial and visual resources. This is markedly the case on the internet where texts can easily be mixed with or accompanied by other modes. Multimodality describes the grammar of visual communication and the analysis of rules and principles adopted by speakers that helps us understand the *meaning potential* of discourses beyond impressionistic approaches of symbology. This field of study is increasingly relevant in modern

society, for our communication is becoming more and more multimodal as technologies advance.

Halliday's (1985) social semiotic theory provides a framework for MCDA by presenting a multimodal approach to semiotic systems. In the lexical approach, signs are assigned with meanings and are dealt with individually. Therefore, there can be an infinite number of signs in our communicative systems. On the other hand, in the multimodal approach, meanings are created through combinations of signs via what Halliday called lexicogrammar. In Systemic Functional Linguistics (SFL), any act of communication involves 'choices' and lexicogrammar explains the interdependency between vocabulary and grammatical structures, that is, the choice of lexis (vocabulary) in language production is limited by its grammatical structure, making the choice 'predictable'. A multimodal approach based on this model, therefore, "involves creating inventories of the choices available and the patterns that govern these choices" rather than just looking at their denotive, connotative or symbolising meanings of individual signs (Machin, 2007, p. 5). Lexicogrammar in short helps combine an infinite number of lexical choices with predictable combinations, hence there would be a finite number of meaning potentials. Drawing on Halliday's work, Kress and Van Leeuwen offer a systematic methodology for describing and analysing visual communication in the same way linguists offer a precise, systematic methodology for language description and analysis, which equips us with greater powers to describe what we see rather than referring to the effects of visual elements.

The essence of metaphor is transference, which allows meanings to be transferred from one domain to another (Van Leeuwen, 2005, p. 30). For example, the thickness and weight of bold typeface, or even a simple line, can be associated with the thickness and weight of real-life objects, giving texts and lines a sense of strength and magnitude. The intensity and the heat of the sun

may be transferred to the warm, saturated colour of an object in a picture.

Thus, discourse is socially constructed knowledge about reality (Van Leeuwen, 2009), and by projecting the social and cultural environment in which it is produced, or omitting certain aspects, discourse can be said to legitimise (or negate) some social practices (Van Leeuwen and Wodak, 1999). In other words, discourses are socially accountable.

Analysis

On accessing FAIR's homepage (appendix 1), what you see is a changing display of six images with headlines. The design of the site is quite simple with a small organisation logo on the top left corner. Each of the changing images fills up the entire screen. It rotates every five seconds, giving more than enough time to read the headline. The word "40 years" is incorporated in the blue logo FAIR with the image of a gold comet-like star, which is somewhat reminiscent of the stars and stripes patterns on the national flag (figure 1). The colouring is blue and gold, and the image is slightly saturated. Associations of colours greatly depend on their culture: it could be associated with water and purity, or it could be associated with legality and loyalty as in royal blue. It has been associated with science and knowledge, but it has also been associated with negative feelings (the blues). At an individual lexis level, this list goes on. However, when combined with the declaration of its 40-year-history in a bright golden logo, its associations are potentially narrowed down to loyalty, truth or knowledge, which can render credibility to an organisation's image. The standard logo is similar in the choice of font face and colouring, without the words "40 years" as shown in figure 2. The brightness of the gold, combined with the curved lines of the comet-like star, adds a sense of softness, warmth

and gentility. Given that this is the only instance where such a curved, sweeping line is used, it can be juxtaposed with the representations of immigrants and immigration on the website. Out of the six images with headlines, the first, second and fourth will be closely examined.



Figure 1: Current FAIR logo



Figure 2: Standard FAIR logo

The first headline reads “Recent Surges in Illegal Immigration Drive the Alien Population to a Record 14.3 Million, Finds Analysis by FAIR” with an image of a silhouetted group of people, who appear to be a family, standing in front of a fence with their backs to the camera (figure 3). Showing a group of faceless people in an image has the effect of dehumanising them, as opposed to showing an individual; face can have familiarising, or humanising, effect (Machin, 2007, p. 118). Distances in pictures, as in real life, signifies social relations (p. 117). In this image, the group of people are not close to the camera, indicating a lack of intimacy or familiarity. This image is computer generated and is not of an actual family. The figures have alien-like proportions, and do not have normal human characteristics in terms of their physical demeanour giving them a dehumanised and almost zombie-like characteristics, increasing ominousness and a sense of threat and danger. The headline is presented in bold, regular and straight typeface. The weight of the bold typeface can mean substantiality, stability and daring, while regularity indicates formality and order (p. 104). The use of large numbers reveals the strategy of aggregation, which adds a sense of overwhelmingness (Baker and McEnergy, 2005) to the lexical terms, “illegal”, “immigration”, “surges”, “alien population” and “record”

numbers. Combined with those lexical terms, the formal look of the headline can increase the uneasiness or even animosity towards immigrants, especially for those who are already intolerant towards them as the wording of the headline promotes a sense of urgency by letting you imagine a sudden and large influx of illegal immigrants. The lexical term ‘alien’ is a legal term for a person who is not a citizen or a national of a given country and is synonymous with the term, foreign national. However, the term has an unfriendly connotation. What stands out in the image is the high metal fence in front of the family holding hands. Its towering presence is ominous, and the greyness of the silhouette and the sky exacerbates the ominousness, whereas brightness would introduce optimism (p. 79).

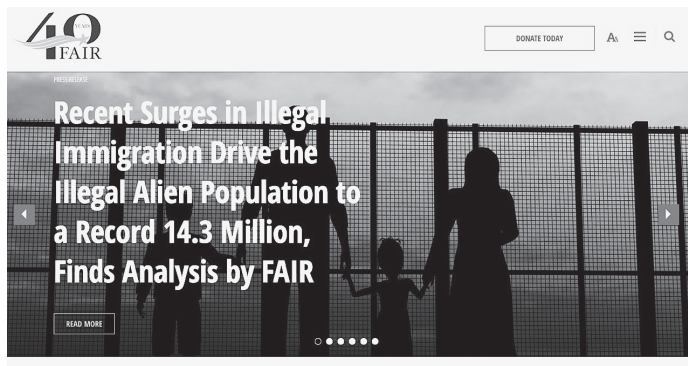


Figure 3: Headline 1

The second headline reads “Montgomery County’s Illegal Alien Crime Wave” with an image of yellow police cordon tape (figure 4). Although the headline does not really explain the content of the linked article beyond the subject of the article, being crimes committed by illegal immigrants in Montgomery County, the murkiness of the image denotes a sense of gravity, and the blurred background creates a sense of the unknown. The meaning potential of saturation expresses emotional ‘temperature’ (p. 70). This rather desaturated

image may appear unemotional. Yet the lexical term “police line” written in black, bold uppercase on the tape shout out urgency and danger. The choice of words that are grammatically expected to follow the subject “crime wave” is a verb. Combined with the salience of the police cordon tape right across the picture that add severity and authority to the headline, the choice of words the viewers imagine may become narrowed down to such words as “surges”, “soars” or “sweeps”.

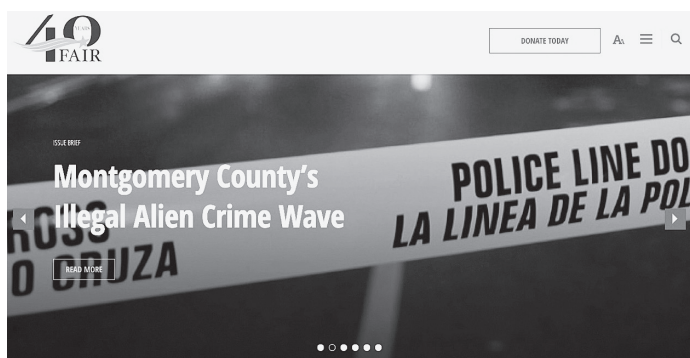


Figure 4: Headline 2

The fourth headline reads “Mainstream Media Raises Concerns about Impact of Growing Number of Asylum Cases (on Mexico)” with an image of seven people of different ages and gender walking in one direction, shot from behind (figure 5). The social actors in this image are a group of people, four adults and three children, who appear to be members of one family. Again, like the first image, a group of people, rather than an individual, has a dehumanising effect, as does their facelessness, and their distance from the camera adds a sense of ‘otherness’. There are seven people, and five of them, the three children and two of the adults, are hooded. A hooded individual is not a depiction of someone agreeable: the person is regarded to have something to hide and is almost dehumanised. Two unhooded adults are showing their dark hair and

swarthy skin. You would assume it was a migrant family from Mexico, partly from the appearance of the people in the image and partly from the words “on Mexico” in the headline, despite that their faces are not shown. Although FAIR have avoided overtly linking their positions to race or ethnicity (Nakamura, 2019), there seems to be an intention to let the viewers assume their ethnicity. None of them are well-dressed, wearing tracksuit bottoms, jeans and anoraks, and the plastic bags they are carrying suggest that they are neither wealthy nor well-prepared for the journey. The picture as a whole is slightly desaturated of colour, creating an unemotional, cold, or even forlorn feeling. They are walking in a barren environment and you can see a square yellow sign in a distance. Although the writing on the sign is not legible, its colouring and regular typeface signal the presence of officialdom. The group is heading towards the direction of the sign, which implies that it may be the US-Mexico border. The dishevelled look of the people magnify the connotation of the word “asylum” in the headline that they will require welfare assistance once they reach their destination, the USA.

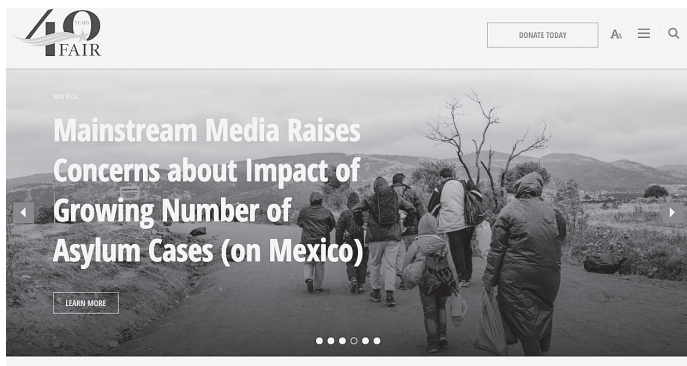


Figure 5: Headline 4

One of the links on the homepage leads to an article titled “The Fiscal Burden of Illegal Immigration on United States Taxpayers” with a closeup

image of a 100 dollar bill (figure 6). The image of Benjamin Franklin is the only human face so far, though not a living one, that makes an eye contact with viewers. The gaze is a symbolic ‘contact’ or ‘interaction’ (p. 110) and combined with the proximity delivered by the close shot, he alone is ‘humanised’ and shows familiarity to the viewers. The article starts with a bullet point of six key highlights, and it consists of the sections: ‘Introduction; The Number of Illegal Immigrants in US’; and ‘The Cost of Illegal Immigration to the United States’, followed by three sets of diagrams titled ‘Total Governmental Expenditures on Illegal Aliens’ (figure 7), ‘Total Tax Contributions by Illegal Aliens’ (figure 8) and ‘Total Economic Impact of Illegal Immigrants’ (figure 9) respectively. The weight and impact of the lexical terms “burden”, “illegal immigration”, “expenditures”, “impact” and “illegal aliens” in the headline and the captions for the diagrams are emphasised by the use of aggregation in the accompanying diagrams (figures 7, 8 and 9) as in the case of the first headline. Showing the large numbers without abbreviation further increases a sense of severity and graveness. The diagrams show that the expenditure of \$134,863,455,364 greatly exceeds the contributions of \$18,968,857,700 by \$116 billion, and the



Figure 6: Article title

Total Governmental Expenditures on Illegal Aliens

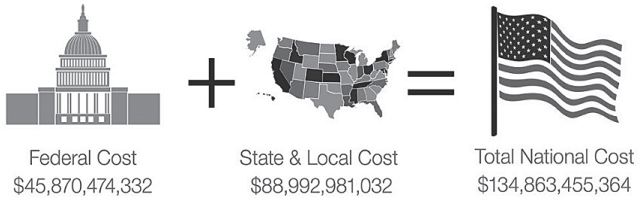


Figure 7: Diagram 1

Total Tax Contributions by Illegal Aliens



Figure 8: Diagram 2

Total Economic Impact of Illegal Immigration



Figure 9: Diagram 3

final figure of “\$116 billion” is larger than other writings and in bold, bright red typeface. The associations of bright red are, almost universally, alarm, danger, and warning. The bold and regular typeface is consistent with all other headlines in this site. The site is filled with authority through and through, with the use of regular, bold typeface, and none of the social actors in all images are depicted in a humanised, friendly manner (with the only exception of Benjamin Franklin on a \$100 bill). Each page seems to provide alarming information about immigrants and their impact on US society with government-like formality.

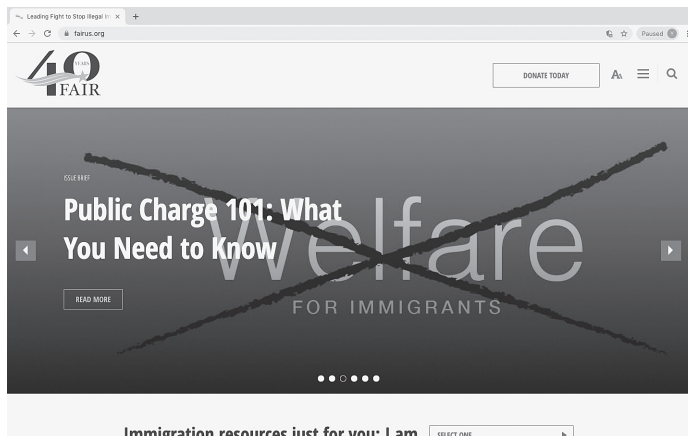
Conclusion

This essay set out to ascertain whether or not the organisation FAIR disseminates unjust discourse towards immigrants into the United States on its website. Using the methodology of Multimodal Critical Discourse Analysis it analysed three headlines, an article and the associated images. Tool kits based on the multimodal, social semiotic approach were used to analyse the content and its presentation in order to identify whether or not they display *manipulative discursive practices*. Particular attention was paid to the areas of iconography, colour, and visual composition in imagery, and content and typography of headlines. Brightness and saturation of colour were examined in evaluating the effect by which colour can add to images and writings as well as associations of colours themselves. For example, the desaturation of an image of a group of faceless people created a barren and desolate atmosphere, whereas bright and saturated colour in the organisation’s logo portrayed them as warm and friendly. Associations and inventory of meaning potentials were looked at in analysing lexical items in both headlines and captions. The representation of people in the

website was marked by several techniques designed to dehumanise immigrants and portray them as threatening, dangerous and burdensome. For example, the distance and facelessness of the people in pictures create a sense of physical and emotional distance by the reader towards the people.

From the design point of view, the FAIR homepage is well-designed to fulfil its purpose; to convey a message about issues surrounding immigration in a very effective manner. They succeed in dehumanising ‘immigrants’ and creating alarming textual and visual materials which allege serious ‘problems’ they bring to US society, potentially fuelling animosity towards them. The claim, therefore, by the SPLC that the FAIR is a hate group appears legitimate, and their website does indeed disseminate racist discourse.

This study was limited in its scope, but was still able to identify unjust discourses in the small number of materials reviewed. In order to understand the full extent of unjust discourses contained in the overall online output of FAIR, future research could utilise the methods of corpus-based critical discourse analysis (CCDA) to supplement multimodal analysis. In CCDA large



Appendix 1: FAIR homepage screenshot

amounts of textual data can be analysed using various software applications to ascertain both the extent of the dissemination of unjust discourses, as well as the linguistic techniques used.

References

- Baker, P. and McEnery, A. (2005), “A corpus-based approach to discourses of refugees and asylum seekers in UN and newspaper texts”, *Journal of Language and Politics* 4 (2), pp. 197–226.
- BBC (13 Aug 2017), “White supremacy: Are US right-wing groups on the rise?”, BBC online, <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-40915356>.
- BBC (28 Mar 2019), “Facebook to ban white nationalism and separatism”, BBC online, <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-47728471>.
- BBC (18 Apr 2019), “Facebook bans UK far right groups and leaders”, <https://www.bbc.com/news/technology-47974579>.
- Beirich, H. (01 Mar 2008), “Bad month for large anti-immigration group”, The Southern Poverty Law Center, <https://www.splcenter.org/fighting-hate/intelligence-report/2008/bad-month-large-anti-immigration-group>.
- Beirich, H. (12 May 2010), “The FAIR files: working with the Pioneer Fund”, The Southern Poverty Law Centre, <https://www.splcenter.org/hatewatch/2010/05/12/fair-files-working-pioneer-fund>.
- Crusius, P. (3 Aug 2019), “Minutes Before El Paso Killings, Hate-Filled Manifesto Appears Online”, The New York Times, <https://www.nytimes.com/2019/08/03/us/patrick-crusius-el-paso-shooter-manifesto.html>.
- Dearden, L. (12 Feb 2019), “Clicking on terrorist propaganda even once could mean 15 years in prison”, The Independent, <https://www.independent.co.uk/news/uk/crime/terrorist-propaganda-website-online-prison-sentence-uk-isis-a8776226.html>.
- Dearden, L. (27 Oct 2019), “Government ‘must ban far-right hate groups from making media appearances’, report says”, The Independent.
- DeParle, J. (17 Apr 2011), “The Anti-Immigration Crusader”, New York Times, <https://www.nytimes.com/2011/04/17/us/17immig.html>.
- Goodman, C. (19 July 2019), “John Tanton has died. He made America less open to immigrants—and more open to Trumo”, The Washington Post. <https://www>.

- washingtonpost.com/outlook/2019/07/18/john-tanton-has-died-how-he-made-america-less-open-immigrants-more-open-trump/.
- Halliday (1985), *An Introduction to Functional Grammar*, London: Edward Arnold.
- Kress, G. (2011), “Multimodal discourse analysis”, in Gee, JP. and Handford, M. *Routledge Handbook of Discourse Analysis*, Routledge, pp. 35–50.
- Machin, D. (2007), *Introduction to Multimodal Analysis*, London: Bloomsbury.
- McGowan, M. (28 Apr 2019), “San Diego shooting suspect posted ‘open letter’ online”, *The Guardian*, <https://www.theguardian.com/us-news/2019/apr/28/john-earnest-san-diego-shooting-suspect-posted-open-letter-online>.
- Nakamura, D. (10 Aug 2019), “‘It had nothing to do with us’: Restrictionist groups distance themselves from accused El Paso shooter, who shared similar views on immigrants”, *The Washington Post*.
- Pew Research Centre (21 Oct 2014), “Political Polarization & Media Habits” (<https://www.journalism.org/2014/10/21/political-polarization-media-habits/#social-media-conservatives-more-likely-to-have-like-minded-friends>).
- Potok, M. (11 Dec 2007), “FAIR: Crossing the rubicon of hate”, *The Southern Poverty Law Center*, <https://www.splcenter.org/hatewatch/2007/12/11/fair-crossing-rubicon-hate>.
- Roy, E. A. (15 Mar 2019), “New Zealand shooting: suspect Brenton Tarrant charged with murder”, *The Guardian*, <https://www.theguardian.com/world/2019/mar/16/new-zealand-shooting-suspect-brenton-tarrant-court-charged-murder>.
- Schwartzburg, R. (5 Aug 2019), “The ‘white replacement theory’ motivates alt-right killers the world over”, *The Guardian*, <https://www.thegatewaypundit.com/2019/08/reports-el-paso-killer-patrick-crusius-left-anti-immigrant-manifesto-before-mass-killing-copy-of-manifesto/>.
- Sunstein, C. (2001), *Republic.com*, Princeton University Press.
- Twitter. (18 Aug 2016), Twitter official blog, https://blog.twitter.com/official/en_us/a/2016/an-update-on-our-efforts-to-combat-violent-extremism.html.
- Van Dijk, T. (2009), “Critical Discourse Studies: A Sociocognitive Approach” in Wodak, R. and Meyer, M. ed., (2009) *Methods of Critical Discourse Analysis*, Sage, London, pp. 62–86.
- Van Leeuwen, T. (2005), *Introduction to Social Semiotics*, London: Routledge.
- Van Leeuwen, T. (2009), “Discourse as the Recontextualization of Social Practice: A Guide” in Wodak, R. and Meyer, M. ed., (2009) *Methods of Critical Discourse Analysis*, Sage, London, pp. 144–161.

- Van Leeuwen, T. and Wodak, R. (1999), "Legitimizing Immigration Control: A Discourse-Historical Analysis", Sage online.
- Wakefield, J. (16 Mar 2019), "Christchurch shootings: Social media races to stop attack footage", BBC online, <https://www.bbc.com/news/technology-47583393>.
- Wong, JC. (5 Aug 2019), "8chan: the far-right website linked to the rise in hate crimes", The Guardian, <https://www.theguardian.com/technology/2019/aug/04/mass-shootings-el-paso-texas-dayton-ohio-8chan-far-right-website>.

19世紀の人々と本のつながりに関する一考察

—ボルドーの貸本屋と教会の関係に着目して—

水 町 いおり

19世紀のフランスの人々はどのような暮らしをしていたのだろうか。何を学び、何を考え、どのような本を読み、どんな悩みを抱えながら生きていたのか。もちろん、現在に生きる私たちが、今はいない人々の生活の全てを知ることは不可能である。しかし、残された資料を読み解き分析することで、人々の暮らしの一端を推察することはできるだろう。

そこで、本論文では、19世紀の人々の暮らしの中でも、とくに「人々と本のつながり」について考察する。分析資料として、ボルドーの「貸本屋」を取り上げる。ボルドーはフランス南西部にある港湾都市であり、フランス国内外から多くの人々が入り出し、特徴ある都市空間を形成していた⁽¹⁾。また、貸本屋は、階級や文化を超えて多くの人々に出会いの「場」を提供していた。つまり、ボルドーの貸本屋を調べることで、フランスの地方都市に暮らす「人々と本のつながり」の一面が明らかになるだろう。

さて、ここで本論に入る前に、書物の歴史と貸本屋について概観し、先行研究についてもふれておきたい。かつて本は極めて高価で、一部の特権階級の人々のものであった。貴族たちは邸宅に読書室をしつらえ、本に豪華な飾りをつけた。美しく装丁された本は、富の象徴として貴族やブルジョア達のリビングの飾りとなり、一般市民たちにはとうてい入

手困難な贅沢品であった。⁽²⁾しかし、産業革命以降、余暇の出現、識字率の上昇、印刷技術の発展などにより、読書は一般市民たちの文化的娯楽となった。1冊買うことは出来ないが、借りてなら読める、本を読みたいという民衆の要求をかなえる形で、貸本屋は18世紀後半に登場し、19世紀の初頭から中ごろにかけてフランスのみならずヨーロッパ全土で大いに流行した。それまで本を読むことのなかった多くの人々が、娯楽や情報伝達的手段として貸本屋に集い、こぞって本や新聞を読んだのである。このような、多くの人々が読書をするという新たな社会現象は、ある種の「本を読むデモクラシー」であった。⁽³⁾

次に、本稿で分析する貸本屋について言及する。貸本屋には2つの種類があり、フランス語ではキャビネ・ド・レクチュール (=cabinet de lecture) と、キャビネ・ド・ルエ (=cabinet de louer) に区別されている。キャビネ・ド・レクチュールでは、本を貸し出すだけでなく、併設された読書室で、サロンのようにゆっくりカフェを飲みながら本を読み、時には本を媒介として顧客どうし議論をすることも出来た。一方、キャビネ・ド・ルエでは、本は貸し出されるだけで、読書クラブに見られる読書室や、喫茶店の併設などのシステムはない。例えば、有名なロンドンのミューディーズ (= Mudie's) や、本稿で取り上げたボルドーの貸本屋も、貸し出しのみの営業形態を取っている。⁽⁴⁾

ここで、貸本屋の主要な先行研究を見てみると、これまで貸本屋の研究は、印刷、出版業などの経済流通システム上に、あるいは文化史上に位置づけられており、人々の生活と貸本屋の関連性が問題にされることが少なかった。たとえば、経済流通システム上の研究に関しては、エリザベス・アイゼンステインが『印刷革命』(みすず書房、1987年)の中で、貸本屋のことを「経済システム上の、書籍販売の変形した一つの形態」と紹介している。貸本屋では、顧客が規定に沿ってあらかじめ賃料を支払い、本を借りる。たしかにアイゼンステインが言うように、借主と貸

主の間には本の貸し借りによって料金が発生する経済上のシステムが成り立っている。

一方、貸本屋の文化的な側面については、すでに、パリの貸本屋が、市民たちに読書という娯楽を提供する場の1つであり、18世紀のカフェと同じように、市民たちが各自の興味・関心に応じて、仲間たちと議論を交わし、時には政治についても意見を交換し合うような公共圏の幅を広げる場所であることが分かっている⁽⁵⁾。さらに、書物の歴史上に位置づけられた貸本屋の役割に関しては、リュシアン・フェーブルとアンリ＝ジャン・マルタンが『書物の出現』（筑摩書房、1985年）で次のように述べている。「12世紀以降、書物は教会の独占的な文化であったが、大学が創設されたことで、世俗社会の教育体系が拡充し、社会と学問の変化につれて、書物の環境も変化した。それにより、修道院の外部に新しい学者や教師、学生などの知的読者層が誕生し、貸本屋は知的な読者たちの欲求を支えている⁽⁶⁾」。つまり、貸本屋は情報・文化の発信の「場」として、人々の暮らしの文化的側面を補完する役割を担っていたのである。

しかしながら、以上のような議論は、商品交換により成り立つ経済システム上の領域と、文化の領域に切り離され、関連性を持って研究されては⁽⁷⁾ない。文化的、社会的機能を持った都市空間において、その両方と密接に関わる貸本屋研究は、読書を通じて文化を受容する人々の暮らしを明らかにする上で重要な研究であり、貸本屋研究は、文化的側面と社会的側面の両方からのアプローチが必要である。

そのような観点から、筆者は、2011年に、貸本屋の立地、営業目的、書籍目録などから、ボルドーという都市空間における貸本屋の位置づけについて考察し、貸本屋を「ボルドーにおける知の需要と伝播の拠点」と結論付けた。そこで、本稿では、2011年以降に新たに収集した資料を分析の対象に加えるとともに、新たな視点として「本と人々のつなが

り」に着目し、特に、教会との関係を取り上げながら、貸本屋の分析を深めていきたい。

第1章 カタログにみられるボルドーの貸本屋

第1章では、貸本屋のパンフレットとカタログを用いて貸本屋の実態を明らかにし、その実態をもとに、ボルドーの都市空間において貸本屋が果たした役割を分析する。

1. 貸本屋の所在地からの分析

まず、カタログに記載された住所から明らかになる事実を分析し、ボルドーの貸本屋の特徴について検討する。

表1 貸本屋の住所

貸本屋名	住所
① Chez J. B. Magen	Rue du Cahernan, No.33, vis-à-vis la rue de Gourgue
② Bibliothèque amusante Morale et Instructive	Rue Piliers de Tutelles, 22
③ B. Castez	Allées de Tourny, 38
④ Nouveau cabinet de lecture	Rue du Cahernan, No. 36
⑤ Panbiblion Bordelais	Cours de l'Intendance, 17
⑥ D'Honoré Garay	Rue du Pas-Saint-George, No.27
⑦ Madame Laisné	Fosse de l'Intendance, No.49, Bordeaux
⑧ Madame Veuve Mietton	Rue Piliers de Tutelle, No.7, près la rue Saint-Remy
⑨ Remy Frère et Sœur	Fosses de l'Intendance, No.55
⑩ Chez R.A.Thénaibre	Cours du Jardin Public, No.53
⑪ British Seamen's Reading Room	Rue Borie, No.34

表1から表4までは、Q28 SR85 (Catalogue de Cabinet de Lecture)、SR/85/4 (ville de Bordeaux) をもとに筆者が作成。

Bordeaux Published under the superintendence of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge 1832



地図1：BNFのgallicaで公表された古地図をもとに平松孝晋氏作成。

カエルナン通りには、コレージュ・ド・ロワ、コレージュ・ド・ギューイエンヌなどの中等教育機関があり、また、カエルナン通りから、一本西に入った通りには、ボルドー大学がある。カエルナン通りから西をサンテロワ地区と呼ぶが、この地区は、パリの学生街であるカルチエ・ラタンに相当している。また、サン・ジャム通りには、書店と出版を兼ねたシモン・ミランジェというボルドーの老舗の本屋がある。これら①②④⑥⑨の5つの貸本屋は、学校や大学など、知的な書物の消費形態が確立された場所と、印刷・出版、書店など、書物の生産と販売に関わる場所の間に設置されている。次に、貸本屋⑤、⑧、⑩は、ボルドーにおける商業の中心地アンタングス通りにあり、賑やかな商店街に店舗を構えている。また、貸本屋③は、トゥルニー通り沿いにあり、近くには、ボルドーで一番大きなトランペット公園がある。貸本屋⑦も同様に人々が集う公園の近くに位置している。

以上のように、ボルドーの貸本屋の住所は、知的消費に関連のある場所、賑やかな商業地区、公園の近くの3つの場所に大別できる。住所から得られた貸本屋の外的環境については、貸本屋が図書館のような無料読書サービスを提供する「場」ではないため、商業利益を優先した立地条件のもとに設置されているという考察が可能である。

また、ボルドーでは、表通りに裕福な人たちが住み、裏通りの小さな通りに一般市民が暮らしていたのだが、地図に示された貸本屋が全て大通りに面していることから、貸本屋は、裕福な人々が住む場所に店を構えていることも分かる。人口を調べてみると、ボルドーの1837年の人口は9万6000人で、そのうち、4パーセントが外国からの移入民である。人口分布を確認してみると、旧市街の中に住む人々は、貴族、大ブルジョア、大小の商業従事者、政治関係者、公務員、医師、弁護士、聖職者などが中心である。したがって、立地条件からは学生、研究者などの知的消費者、書籍内容からは、教会関係者やボルドーの知識人階層、さら

に初等教育を受ける子どもたちやその親たちが貸本屋の顧客として推測できる。

2. 貸本屋の営業形態からの分析

(1) 営業時間

貸本屋の営業時間は、図書館の開館日や開館時間と比較して書かれている。図書館の利用者は一定の保証金を預けた後、館内で本を読むのだが、館内読書のみで貸出はできない。また、19世紀のボルドー市立図書館の記録を見てみると、開館時間が10時から12時まで、休憩を挟んで13時から14時までであり、かつ1週間に3回しか開かれていない。昼間の限られた時間に本を読みに来るのは、地元貴族や大ブルジョアなど、自分たちで働かなくても、土地や港の使用料などの税金収入で暮らすことのできる有閑階級の人々ばかりであろう⁽¹⁰⁾。以上のことにより、ボ

表2 ボルドーの貸本屋の営業時間

貸本屋名	営業時間
① Chez J. B. Magen	休息日（日曜日）以外は毎日営業
② Bibliothèque amusante Morale et Instructive	朝8時から夕方5時まで（祝祭日は別）
③ B. Castez	随時
④ Nouveau cabinet de lecture	記載なし
⑤ Panbiblion Bordelais	図書館より長時間営業
⑥ D'Honoré Garay	日曜、祝日以外毎日営業
⑦ Madame Laisné	朝8時から夜8時までいつでも
⑧ Madame Veuve Mietton	日曜、祝日以外朝8時から夜9時まで毎日営業
⑨ Remy Frère et Sœur	随時（予約してから）
⑩ Chez R.A.Thénaibre ère et Sœur	記載なし
⑪ British Seamen's Reading Room	記載なし

ルドーの貸本屋は、有閑階級の人々が中心に利用していた市立図書館よりも、幅広い階層からなるボルドー市民のニーズにあった営業時間と、営業日を設定することで、人々の文化的生活を支えていたと考えられる。

(2) 貸出料金・貸出形態

次に、貸本屋のカタログに示された貸出料金であるが、表3のように全て予約購読を対象としており、店内での読書という記載が認められない。貸出形態を見てみると、ほとんどが定期的な使用を前提とした予約契約⁽¹¹⁾で、1か月、3か月、半年、1年の契約で、それぞれ貸出料金が決まっている。パリの貸本屋が1冊の本を3巻に分冊して貸し出すなどして経済利益をあげようとしているのに対し、ボルドーの貸本屋ではそのような経済利潤を追求したような営業方法と料金設定はなされていない。当時の労働者、たとえば馬車の御者の日当は1日3フラン、日雇い労働者の日当が1フランであったとされているので、貸本屋の月会費は、労働者の平均的な日当に相当すると言えるだろう。

(3) 貸本屋の営業目的と蔵書

営業目的の記載がないカタログ⑩と⑪を除いて、表4に示されたカタログ①から⑨の貸本屋の営業目的や書籍の分類を見てみると、ボルドーの貸本屋が娯楽施設でも、新聞を読んで議論を行う社交サロンのような場所でもないことが分かる。たとえば、カタログ①の「教育施設に分類できる」や、カタログ②の「指導書を多数そろえ、研究者のための本もある」などの記載は、貸本屋が教育的施設であることを示している。書籍の内容も古典作品から文学書、物理、技術、ペスタロッチ式の教育理論まで幅広いが、娯楽的要素は見つからない。同様のことがカタログ③にも見られ、「役に立つ本」と「楽しい本」に分けて貸し出しを行っているが、「役に立つ本」では、歴史、哲学、論文、文学などを扱っており、

表3 貸出料金と貸出形態

貸本屋名	貸出料金	貸出形態
① Chez J. B. Magen	年間契約24F、半年12F、1ヶ月6F、1ヶ月2F。町の外には持ち出さないこと。持ち出す場合、年間30F、半年15F、3ヶ月8F、1ヶ月3F。前払い6F。で4巻本を借りられる。もう12F。を担保に支払っておくと、他の本も楽しめる。	予約契約（定期的な使用を前提）
② Bibliothèque amusante morale et instructive	1ヶ月につき2F、本を借りる前に、前払いで清算する。1回につき1冊しか借りられないが、6ヶ月の予約契約をすると、1回に2冊借りることも可能。1年の契約の場合は3冊まで貸し出し可。利用者が旅行の際は、本は店で預かる。分冊本を借りた場合は、1冊借りたとしても、全部の分の料金、またはそれに相当する額を支払う。	予約契約（定期的な使用を前提）
③ B. Castez	1ヶ月3F。2F。の場合は、小説のみ貸し出し。1冊は、8折版が20C、12折、18折版は10C。で貸し出し。歴史、哲学、詩に関しては、1ヶ月の貸し出しを最大とする。	カタログから選んだ本を宅配することも可。
④ Nouveau cabinet de lecture	予約契約（定期的な使用を前提）	記載なし
⑤ Panbiblion Bordelais	1年10F、3ヶ月5F、1ヶ月2F。月の最初に前払い。12日間貸し出し可能。延滞した場合、1日につき、5C。ずつ支払う。	予約契約（定期的な使用を前提）
⑥ D'Honoré Garay	1年20F、1ヶ月3F、1冊につき10C。あらかじめ、保証金として5F。を支払うこと。	予約契約
⑦ Madame Laisné	保証金6F。を支払い、1年、半年、1ヶ月ごとの契約。金額は店頭にて表示。	随時
⑧ Madame Veuve Mietton	年間契約24F、1ヶ月2F.50C。あらかじめ予約金7F。を支払うこと。	予約契約
⑨ Remy Frère et Sœur	どの本も、大きさにかかわらず1冊10C。先に保証金を支払うこと。	予約契約

娯楽のための読書とは明らかに区別されている。「楽しい本」は、子ども向けの絵本や寓話などのお話である。カタログ⑤は図書館並みの品ぞろえで営業し、政治、経済、判例集、歴史など15,000冊もの本を並べている。さらにカタログ⑥、⑧には「王立図書館の検閲済み」という記載がある。また、①から⑨までのすべてのカタログに検閲済みの印が押してあるが、パリの貸本屋でこの印が押してあるのは全体の40パーセン

表4 営業目的と蔵書

貸本屋名	営業目的・店舗紹介	書籍の分類
① Chez J. B.Magen	<p>私たちの本屋は、信仰心のある本屋であり、小教区のすべての信者のためのものである。よって教育施設に分類出来るだろう。男女問わず利用可である。</p> <p>雑貨も置いてある。特に子供向け。ノート、メモ帳、手帳、線の入ったノート、羽ペン、定規、ナポリ製の楽器、ポケットナイフなど(すべて適正価格)。</p>	<p>基本的に文学書を扱う店である。特に、古典作品が専門。プラトン、コルネイユ、ラブレール、モリエール、モンテスキューらの名前を確認。</p>
② Bibliothèque amusante morale et instructive	<p>子どもに適した本を選んであげられる親は少ない。私たちはその手助けが出来る。子どもの教育をするための親の指導書もある。当本屋は、家庭における「母親」の役割をするだろう。</p>	<p>第1部：子どものための楽しい本 教訓物語、子どものお祭り、人間の身体について、芸術、自然のすばらしさ、動物の歴史、冒険記などに分類されている。</p> <p>第2部：男女問わず、若者の教育的書物 天文学・植物学・狩り・化学・デッサン・寓話・地質学・体操・歴史・自然界の歴史・神学・文学・数学・道徳・音楽・神話・水泳・漁業・楽しい体育・物理学・宗教学・弁論術・技術・人生・旅行など、76の項目に分類してアルファベット順に並べている。</p> <p>第3部：父、母、教育者、教授向けの本 教育科学・指導理論・教育方法(ゴルチエ式、ペスタロッチ式)・ジャコット式理論(相互教育・講義・カリグラフィー・デッサン)・言語学</p>
③ B. Castez	<p>第1部は勉強になる本を、2部には楽しい本を揃えている。新刊は、パリで発行された後、ボルドーの書店でも並べられるため、パリの人たちと同じ本が読める。</p>	<p>著書名によるアルファベット順。</p> <p>第1部：歴史、哲学、論文、文学、旅行など</p> <p>第2部：小説、詩、論文、短編小説、劇、雑文など</p> <p>小説の中にユゴー、バルザック、ウォルター・スコットらの名前が見られる。</p>
④ Nouveau cabinet de lecture	<p>7月王政の規範に合わせて本を選択、分類している。</p>	<p>作家名で分類。分類されなかった本については、アルファベット順に並べている。ボルドー出身者の論文や著作コーナーあり。(商業会議所、アカデミー会員の著作を確認)</p>

⑤ Panbiblion Bordelais	常時15000冊を揃えている。図書館並の品揃えであるが、早く閉まってしまう図書館より、人々の役に立てるはずである。古典作品だけでなく、19世紀の作品も多く取り扱っている。また、外国の作品の品揃えも豊富である。	各分野に分類。記載された著作者数：218名 〈神学分野〉禁欲に関する本：10名、聖人伝：6名、聖職者の歴史：9名、神話・宗教の歴史：19名、判例集：14名 〈科学・芸術分野〉哲学・道徳に関する本：53名、教育学：12名、政治・法律49名、国内経済：3名、軍事技法：22名、経済政策と統計：21名
⑥ D'Honoré Garay	全て王立図書館の検閲を通過しています。安心してお読みください。	カテゴリー別の分類。論文、歴史、哲学、演劇、文学、詩、小説（短編・長編・旅行）
⑦ Madame Laisné	記載なし	著書名によるアルファベット順。歴史、宗教、商業、経済、教育、文学、小説など著書名は多岐に渡る。
⑧ Madame Veuve Mietton	気軽な図書館としてご利用ください。全て検閲済み。	作家名で分類。ヴォルテール、ディドロ、ユゴー、ラマルチーヌ、ルソー、アレクサンドル・デュマら。
⑨ Remy Frère et Sœur	お客様の希望に合わせて、本を選ぶお手伝いをします。	著書名によるアルファベット順。小説を中心に有るとの記載。

トほどであることを考えると、ボルドーで提供される本はいわゆる「健全な」ものなのであろう。以上のことから、ボルドーにおける読書は、実務的かつ文化的、健全な娯楽のための読書であることが最大の特徴であると考えられる。

(4) カタログの考察

パリの貸本屋の多くは読書室を併設し、新聞や政治雑誌を並べ、人々が議論を行い、公論が形成される「場」であった。そこでは反体制的世論が形成され、政治的、文化的公共性を内包していた。また地下出版された発禁本や煽情小説を秘密裏に貸し出し、女性読者が隠れて小説を借りに来るような実態もあった。一方、ボルドーの人々にとって、貸本屋は教育施設であり、公立図書館の代わりである。ボルドーの貸本屋では、

ことさらに文化的で、健全な側面が強調される。では、なぜ、ボルドーの貸本屋は教育的機能を要求されたのだろうか。

前述のように、ボルドーは港湾都市として、イギリス・オランダ・ドイツなどから多くの移入民が暮らしていた。例えば、カタログ⑪の British Seamen's Reading Room はイギリスからの渡航者のために英語の本が並べられている。また、商人のアソシアシオンや、コレージュ・ド・ギューエンヌ、アカデミー・ド・ボルドーなどの知識人、政治家、商工業者、聖職者たちのアソシアシオンも発達していた。湾岸貿易の商業拠点都市として、ボルドーには多文化、多言語が共生し、読み、書き、そろばんといった、商人としての最低限の実務教育が根付いていたのである。そのような都市において、貸本屋は市民の教育の補完者として都市社会の中に位置づけられていた。そして教育的書物を媒介として、市民の集う「場」を提供し、都市全体を啓蒙する役割を果たし、文化的側面を補完する役割を担っていたのである。つまり、貸本屋は、ボルドー社会における知の受容と伝播の拠点と言えるのである。

さて、ここまで、ボルドー貸本屋のカタログを分析してきた。ボルドーの貸本屋は、フランス有数の港湾都市として、商人が多く出入りする繁華街に店を構え、市民の実務的知識を補完するため、教育的役割を求められていた。これは、パリの貸本屋とは大きく異なるものであり、ボルドーの独自性を示すものである。そして、教育に関しては、19世紀のフランスにおいて、市民の教育、とくに初等教育を担っていたのは教会であった。そこで、第2章では、教会と貸本屋の関係に着目して分析を進めていくことにしよう。

第2章 ボルドーの貸本屋と教会

1789年のフランス革命の後、伝統的に行われてきたアンシャン・レジーム（旧体制）が崩壊し、フランス共和国が誕生した。共和国の成立とともに、フランスでは国民国家の形成に向けたさまざまな動きが起こっていた。フランスの自由と平等を象徴する「マリアヌ像」や、「フランス語」による言語の統一はその好例である。

言葉習得を行うための初等教育は、長い間、教会が独占的に担ってきた。幼いころから教会に通うことで、従順なキリスト教徒を育てる目的である。ところが、革命後、「思想の自由」「宗教の自由」「教育の自由」というスローガンのもと、教育4大法案⁽³⁾によって、初等教育は教会の手を離れ、段階的に政府の支配下におかれることになった。

このような「宗教と教育は分離すべき」という価値観は、現在の政教分離の原則である「ライシテ」の基礎となるものである。しかし19世紀の時点では、ライシテの原則が国内の隅々まで行き渡っていたとは考えにくい。そこで、本章では、地方の教会における初等教育活動の重要性に言及したうえで、とくに1830年から1848年の七月王政期において、ボルドーの教会と初等教育をめぐる動向に貸本屋がどのように関わったのかについて見ていきたい。

1. 初等教育におけるボルドーの教会の重要性

交通網の形成や工業化の波及は、ボルドーのような地方中核都市を中心とした広域経済圏を発展させ、それらを結びつける全国市場も形成された。しかし、フランスの文化的な標準化というと非常に困難で、とりわけ、言語の多元性は、均質的文化空間の実現には程遠い状況であった。フランス革命以前のフランス語（オイル語）の範囲は、パリを中心とした限られた地域にすぎず、南仏（オック語）、ブルターニュ地方（ケル

ト語)、アルザス(ゲルマン語)、バスク地方(バスク語)といった地方はもちろんのこと、北フランスの各地方でさえも、方言間の差異は大きかった。

「単一にして不可分なる」フランス国民国家形成のためにも、多くの地方言語を母語とする多文化分立状態の言語状況を改善し、文化統合を行うことが急がれた。とくに、大衆文化を形成する上で重要な役割を果たす初等教育の国家統制は急務であった。しかしながら、19世紀の半ばを過ぎても、いぜんとして体系的な民衆教育は確立しておらず、国語としてのフランス語さえも成立していなかった。完全に義務教育が成立したのは1880年代の第三共和制が安定してからであり、19世紀なかばの初等教育の多くは教区司祭や修道聖職者たちの独占的な支配下にあった。

そもそも、長年にわたり、人々と教会は緊密な関係を築き上げてきた。生まれてすぐに地域の教会で洗礼を受け、時を告げる教会の鐘の音とともに寝起きし、食事をとる。週末ごとに教会のミサに通い、結婚の宣誓と登録は教会の小教区で行い、悩みごとがあれば教会相談をし、少々の病気ならば教会で簡単な手当てを受けた。死ぬときも教会の世話になる。人々の暮らしと教会は切っても切れないものである。

また、教会は地域文化の担い手でもあった。子どもたちは地方の教会の特性に沿って言語、文化、歴史、宗教などを含む初等教育を受けた⁽¹⁴⁾。ボルドーは南フランスの地方拠点都市であり、フランス語以外の言語を用いて生活する地域に位置し、地域言語が残存している都市である⁽¹⁵⁾。人々は日常使用言語として彼らの地域言語を話し、共通語である「フランス語」は教会で習った。少なくとも、第二帝政期まで、ボルドーに国家的な義務教育支配が及んでいないことを勘案すると、初等教育に関して、教会がそれぞれの地域でいかに重要な役割を担っていたかが理解されるだろう。

実のところ、第二帝政期までは、地方の力はまだまだ強く、南仏のラングドックのようにあたかも独立国のように振る舞う地方もあったという。⁽⁶⁾ 言語の違いは物の見方の違いであり、これをフランス語に統一することは、地方の人々の物の考え方をフランス風に統一しようとするに等しい。地方の人々は中央集権的で画一的な教育に反対し、ボルドーも例外ではなかった。結局、第二帝政期まで、地方の初等教育はその地域の教会に任せられ、中央政府がフランス国民国家形成に向けてさまざまな策を施行する間も、教会を中心に地方独自の文化が形成され、保持されてきたのである。

さて、ここまで、地方の教会と初等教育における関係の重要性について言及してきた。次は、教会と貸本屋の関係について見ていこう。

2. 初等教育をめぐる教会と貸本屋の関係性

表4の貸本屋で販売されている品物について見てみると、ノート、メモ帳、羽ペン、鉛筆、定規、たて笛など、とくに初等教育で使用されていた学用品が見受けられる。また、カタログ①の貸本屋の営業目的には、「私たちは信仰心のある本屋である。教育施設に分類される。小教区の全ての信者にご利用いただきたい」などの記載を認める。これは、貸本屋と教会や初等教育との関係性を明確に示したものであろう。また、カタログ②の貸本屋では、子ども向けの本を紹介する際、「子どもの時は男女の区別をせず、楽しいもの、教訓物語を提供することになっている」と記載してある。この本屋では子ども向けの本コーナーが常設されており、教訓物語が並んでいる。教訓物語は、当時、教会の初等教育で多用されたものであり、これらの教訓物語を店頭に並べるのは、教会の初等教育を引き継ぐものであろう。さらに、店主のマダムクローゼは、貸本屋を営む以前は小学校の教師であった。彼女の本屋には子ども向けの教訓物語や教育書が並べられており、店主の初等教育への熱意や興味が感

じられる。

営業目的や書籍目録に見られるように、貸本屋が子どもたちやその親を顧客対象にしていることから、ボルドーの貸本屋は、「初等教育」という制度を通じて人々と教会を結びつけていると考えられる。これは、教会と住民との間に宗教以外の文化的な関わりを形成したもので、貸本屋の利用を通じて、住民と教会の関係性をより強固なものにしている。つまり、ボルドーの貸本屋は、教会の小教区の教育施設の1つとして教育の一端を担い、ボルドーの特徴ある文化の基盤を形成しているのである。そのため、パリの貸本屋とは異なり、教育的機能を要求されたのである。

さらに、ボルドーの貸本屋は、「貸本屋は、子どもを導き、育てるといふ、家庭における母親と同じような役割をするだろう」というカタログ②の記載にもある通り、ボルドー社会の文化を率引する「母親」の役割をしている。つまり、ボルドーの貸本屋は、ボルドーの文化や世論の発展において、欠くことのできない文化施設の一つなのである。

しかし、一方で、視点を変えてみると、家庭における母親の役割とは、19世紀の社会規範の特徴とも言える家父長制の中で、夫を支える補助的なものである。経済を支配し、家庭を支配するのは男性であり、女性は補完的な役割を果たすにとどまっている。これをボルドー社会の文化的側面に置き換えて考えてみると、ボルドーの成熟した文化を作り出すのは、先に挙げたコレージュ・ド・ギユイエンヌ、アカデミー・ド・ボルドーなどの知識人のためのアソシアシオンに属したエリートたちである。また、文化施設としては、大学や高等教育機関、市立図書館などがあり、それらの施設が、ボルドー社会における文化的空間を形成していた。貸本屋は、家庭における母親と同じで、そうした文化や世論の創生のための補助的な役割をしているのである。

3. ボルドーの教会と貸本屋の政治的つながり

最後に、教会と貸本屋の政治的つながりについて見ていくことにする。フランス革命以前のボルドーでは、教会と政治は分離することが好まれていた。政治家たちは教会が政治に介入することを嫌い、教会の動きには常に注意を払っていた。ところが19世紀に入ると、ジロンド派に代表されるような政治的自由主義思想者たちは、強権的なナポレオンの帝政に優位を奪われた。商業的にも1804年のナポレオンの大陸封鎖令によって、ボルドーの特徴であった自由主義貿易は規制されてしまい、ボルドーは政治的にも経済的にも衰退の一途をたどっていた。⁽¹⁷⁾

そのような折、パリのブルジョアを中心とする自由主義者の内部で、公教育論者と教育の自由論者の対立が見られるようになった。というのも、フランス革命以降、政府は国民国家形成に向けて初等教育改革に着手し、なかば強引に教育改革を推し進めていった。そのため「教育の自由」の問題は、フランス革命以降の〈教会支配からの自由〉による公教育論から、〈国家からの自由〉を内容とするものへと重心を移動させていったのである。⁽¹⁸⁾そしてこれを好機とし、教会はそれまでの攻撃される側から、強権的な統一国家を批判する自由論者へとその立場を変えていった。⁽¹⁹⁾

なかでも、ボルドーのカトリック教会は、初等教育の権力保持を願っており、1826年から1836年まで大司教を務めたシュヴァリユール（Jean-Louis Ame Madelain Lefebvre de Cheverur, 1768-1836）は、七月革命から出た権力に早くから加担し、教会による初等教育の影響力の持続、増大を呼びかけた。⁽²⁰⁾七月革命の先駆者である政治家ギゾーは、自らが率いた政府を「中産階級の政府」とみなし、「教会と国家は教育に関して唯一の有力な勢力である。頼るべきは、この二大勢力の統合した圧倒的活動である」とのコメントを発表するほどであった。反目しあってきた初等教育に関し、政府と教会の融合が試みられたのである。⁽²¹⁾

そもそも、歴史上、教会は純然たる宗教施設ではなく、政治や権力と密接な関係を持ってきた。もちろん、ボルドー教会も例外ではない。ボルドーのカトリック教会は、七月王政を歓迎し、政治と協力して初等教育推進にあたっている。貸本屋のカタログを見てみると、カタログ④の *Nouveau cabinet de lecture* では、「七月王政の規範に沿って本を選んでいる」との記載が認められるし、貸本屋が営業を行う際に提出された営業申請書の推薦人には、ベルサモン侯爵、モンテスキュー男爵、ペレグリオ・ロッシ、アドルフ・ブランキなど、七月王政の政治体制を強く推したアカデミーのメンバーが名を連ねている。ボルドーの貸本屋は教会の小教区の教育施設として初等教育を補完するだけでなく、政治的な意図も保持しながら営業しているのではないだろうか。

終わりに

本稿は、貸本屋のカタログを分析することで、「人々と本のつながり」の一端を明らかにすることを目的としていた。第1章では貸本屋が図書館の代替施設として市民の知的欲求を満たす文化的役割を持ち、ボルドーという都市で、人々の集う「場」を提供していることを明らかにした。第2章では、教会と貸本屋の関係性について分析し、ボルドーの貸本屋が教会の小教区の教育施設の1つとして初等教育を補完し、その一端を担うだけでなく、政治的な意図も保持しながら営業している可能性についても述べた。

方言言語が根強く残り、独自の文化を保有していたフランスの地方都市ボルドーで、子どもたちが教会で「フランス語」を学び、母親とともに貸本屋に向いて文房具を買い、本を手にする。大人たちは、開館時間に制限がある市立図書館の代わりに、賑やかな大通りにある貸本屋に

集い、小説や実用書、歴史書などを借りて読む。これは19世紀のボルドーに、確かに息づいていた人々の暮らしの一端である。本稿により、このような「本と人とのつながり」のある生活の一部が明らかになったのではないだろうか。

しかし、そのような市井の人々の日常生活の裏側には、貸本屋が教会の補完的な教育機関であり、子どもたちは書物を通して教会の教えを間接的に学んでいる事実がある。また貸本屋のセレクト本は、教会や、政治家たち、ボルドー経済を牽引するブルジョア達にとって利害関係のある七月王政期の規範に沿ったものであり、貸本屋に集う大人たちは、無意識のうちに七月王政期の価値観を受容している。つまり、貸本屋の役割は一義的ではないのである。

本稿では主に、貸本屋と教会の関係性に着目したが、例えばカタログ②の店主マダムクローゼは、「アカデミーは、彼女の教育者としての実績を重んじ、彼女の教育のための商売に勲章を贈った」と紹介され、クローゼはアカデミー主催の論文コンクールで6回も入賞を果たしている。カタログ⑤の貸本屋の店主はボルドー商業会議所の親戚であり、カタログ⑧の貸本屋はアカデミーの元会員が店主を務めている。これにより、貸本屋とアカデミー会員の間には人的つながりがあると考えられる。本稿では紹介程度に留めたが、ボルドーにはコレージュ・ド・ギユイエンヌ、アカデミー・ド・ボルドーなどのアカデミーや商業会議所などの政治と強く結びついたアソシアシオンも存在する。これらのアソシアシオンと貸本屋の関係性については、筆者の今後の課題とし稿をあらためることにしたい。

〈Documents d'Archives〉

a) Archives Nationales:

F18.2162: Demandes d'autorisation par l'ouverture de cabinet de lecture

F.18.566:Affaire Diverses II .1815-1854. F.18.567 Affaire Diverses III . 1811-1854.

b) Bibliothèque National France:

Q28 SR85 (Catalogue de Cabinet de Lecture)

SR/85/4 (ville de Bordeaux) SR/85/D SR/85/H SR/85/P SR/85/23
MFILM4-Q-11771,

La Collection Complète de la Bibliothèque National Reproduites sur la Microfilm
sable sur Sarthe Catherine Cassan

c) Archives municipals de Bordeaux:

- ・ Fond BARINCOU 175S (ventes un encherées) 175S-851/175S-1237/175S-1352

- ・ Fond113(Fonds de l'Académie royale des science, letters et arts de Bordeaux)

113S-722 Catalogue Systématique de la Bibliothèque de l'Académie

113S-4~13 Œuvres Présentées Aux Concours de l'Académie

113S-706~710 Régistre d'Entre de Périodiques avec la Désignation du
Rapporteur

113S-254~500 Dossiers Biographique des Académiciens

注

- (1) ボルドーは12世紀から15世紀にかけてイングランドの支配下にあった。百年戦争でイングランド軍はフランス軍との戦いに敗れ、ボルドーはフランスに奪回されたが、ボルドーはイングランドの支配下である程度の自治を享受していたため、1548年から1675年にフランスの支配に対して何度か反逆を試みている。経済的には、イギリス、オランダ、ドイツなど、多くの移入民が暮らす国際都市で、商人のアソシアシオンが発展していた。18世紀に西インド諸島との貿易で黄金時代を迎え、ワイン、砂糖やコーヒー、奴隷なども扱い、中継貿易によって大いに潤っていた。文化的には、モンテーニュやモンテスキューを生んだ、ヨーロッパにおける主要文化都

市の1つであり、「読み・書き・そろばん」など商人文化を支える実利的なかつ基礎的な教育機能が発達していた。政治的には、フランス革命の際に活躍した穏健共和派であるジロンド派の本拠地であり、自由主義思想をいち早くフランスに広めたという特性がある。

- (2) 当時の書籍の一冊の価格は、人々の収入に対し、非常に高価で、一般市民の日当の3倍から5倍、現在の価格にすると、平均して1冊約3万円程度であるとされている（宮下志朗著『読書の首都パリ』、みすず書房、1996年、p. 196）。
- (3) 宮下志朗著『本を読むデモクラシー』、刀水書房、2008年を参照されたい。
- (4) ミューディー貸本屋は1842年に設立され、イギリス一の蔵書数と顧客を抱え、民衆の文化発展に大きく寄与した。清水一嘉著『イギリスの貸本文化』（図書出版社、1994年）に詳しい記載がある。
- (5) 18世紀から19世紀におけるフランスの公共圏については、安藤隆穂著『フランス自由主義の成立—公共圏の思想史—』（名古屋大学出版局、2007年）に詳しい記載がある。
- (6) Lucien Febvre, Henri Jean Martin, *L'apparition du livre, L'Evolution de l'Humanité*, 1958.（関根素子他訳、『書物の出現』、筑摩書房、1985年、p. 92。）
- (7) フランソワーズ・パラン＝ラルドゥル（＝Françoise Parent-Lardeur）がパリの貸本屋を調べたが、ボルドーの貸本屋に関しては先行研究がほとんどなく、ボルドーの貸本屋がどのように機能し、都市においてどのような役割を果たしたかについてはほとんど知られていない。
- (8) Higounet, Charles *Histoire de Bordeaux*, Toulouse, 1980, p. 302.
- (9) ボルドー商人たちは読み、書き、そろばんといった最低限の実務教育を受けていたが、それに加えて、文化的素養を持つことが必要とされていた。
- (10) Raymond Céléste *Histoire de la bibliothèque de la ville de Bordeaux et documents de la Bibliothèque*, 1892.
- (11) 予約契約とは、フランス語の *abonnement* の訳である。利用者が、あらかじめ契約期間に沿って定額を納め、貸出をするシステムのことを指している。
- (12) *Ibid.*, p. 242.
- (13) Higounet, *op.cit.*, p.303にカルノー法、ギゾー法、ファルー法、フェリー法の初等教育4大法案についての詳細な記載がある。
- (14) 教会と初等教育の関係、小さな学校に関しては、天野知恵子著『子どもと学校の世紀』（岩波書店、2007年）に詳しい記載がある。

- (15) 福井憲彦編『フランス史』（山川出版社、2001年、p. 342）によると、ボルドーは、第二帝制期にもフランス語以外の地方言語を話す都市として紹介されている。
- (16) 清水徹、根本長兵衛編、世界の歴史と文化『フランス』、新潮社、1993年、p. 268。
- (17) *Ibid.*, p. 304.
- (18) 荻路貫司「フランス王政復古期における初等教育をめぐる「教育の自由」について」、福島大学教育学部『紀要』42、1984年、p. 18。
- (19) 柴田三千雄ほか編『フランス史』、山川出版社、1995年、p. 284。
- (20) *Ibid.*, p. 302
- (21) 小山勉「フランス近代国家形成における学校の制度化と国民統一七月王政・第二帝制期を中心に」、九州大学『紀要』、1996年、p. 300。

韓国語教育における翻訳の活用の試み

—大江健三郎『万延元年のフットボール』の韓国語翻訳を事例に—

李 承 俊

1

本稿は、大江健三郎『万延元年のフットボール』（『群像』1967年1月号～7月号）を取り上げ、日本語の原典と韓国語の翻訳版を合わせて検討し、日本語を母語とする韓国語学習者に対する韓国語教育において、日本文学の韓国語翻訳をいかに活用することができるかについての提言を行うものである。本稿における、日本語を母語とする韓国語学習者は、日本語および韓国語の文学テキストの読解が可能な中・上級者に限定する。

本稿において使用するテキストの情報について簡単に述べる。大江健三郎の日本語テキストは、現在もっとも入手しやすいと思われる『万延元年のフットボール』の文庫版（講談社、1988年）から考察する。韓国語テキストは、朴裕河訳『만연 원년의 풋볼』（웅진지식 하우스、2017）を用いる。この韓国語訳版は、『만연 원년의 풋볼』というタイトルで2000年に고려원という出版社から刊行されたものが、出版社の倒産によって絶版となり、それが2007年に웅진씽크빅という出版社によって再出版されたのが再び絶版になり、웅진지식 하우스という出版社から再出版された、という経緯を持つものである。再出版に際して、「万

延」という年号を韓国語の漢字の音読みそのまま表記した「만연」を、日本語読みを韓国語で表記した「만엔」に改めた。

『万延元年のフットボール』を取り上げる第一の理由は、1994年にノーベル文学賞を受賞した大江健三郎の代表作に数えられ、その文学的な普遍性が認められているからである。周知の通り、日本国籍の作家としては、1968年に川端康成が受賞し、1994年に大江健三郎が受賞した。だが、両者がノーベル賞を受賞できた理由は、正反対とっていいだろう。大江健三郎がノーベル文学賞を受賞した直後の新聞記事を見れば、川端康成は「極めて日本的な文学として評価され」受賞したが、大江健三郎は「世界中の人々に共通する人間的なものとして理解され」受賞した、と報じられている。そこで、源氏物語から戦後文学に至るまで、日本文学がいかに翻訳されているのかが簡略に紹介されている。⁽¹⁾

『万延元年のフットボール』を取り上げる第二の理由は、翻訳を通じて全世界の読者に読まれることで世界文学としての普遍性が認められるようになった大江健三郎の小説テキストの中でも、特に作中における独特かつ難解な日本語が注目されたからである。かといって、これは日本語としてよくない、何を意味する日本語なのかわからない、といったような評価がなされたわけではない。むしろ、既存の日本語の語彙や文法や表現などに対する徹底的な解体と再構築に向けての苦悩の結果として、それが高く評価されたわけである。

『万延元年のフットボール』の文体や日本語に注目した先行研究は、その豊かな日本語表現が、既存の日本語に対していかなる可能性を有するものかを分析した。先行研究において『万延元年のフットボール』に注目する理由は、先述したような、本稿で『万延元年のフットボール』を取り上げる理由とほぼ重なるといえる。まず日本語学のアプローチとして、角田敏郎は、小説において詩的なイメージを呼び起こす表現を「比喩」と「心象」の概念を導入して分析した。⁽²⁾ 藤本拓自は、小説における

共感覚表現を抽出して分析した⁽³⁾。両者とも、小説における日本語の特徴を詩的な言語とし、その様相と特徴を明らかにしたものである。また、日本文学のアプローチとして、小森陽一は、第1章の冒頭に対する精密な読解を行い、小説における日本語の特徴を明らかにした⁽⁴⁾。

このように、日本語学からも日本文学からも、『万延元年のフットボール』における日本語表現の意味や意義が分析されてきた。というのは、日本語を母語とする韓国語学習者が、『万延元年のフットボール』という小説と触れ合う経験は、自らの母語としての日本語について考えてみる経験につながる。

日本語を母語とする韓国語学習者が、韓国語をアウトプットする場合、そこには必然的に翻訳のプロセスが介入することになる。比較文学研究者の大澤吉博は、文学テキストにおける翻訳の様相を「原文尊重主義」と「訳文尊重主義」の二つに分け、「そのどちらが良いとも言えない。重要なのは、そうした異なる翻訳概念の中で、一体いかなる翻訳が作られ、どのような影響を読者に与えたかを知ることであろう⁽⁵⁾」と述べている。日韓の翻訳のことを念頭においての大澤の言葉を受けて、日本語を韓国語に「翻訳」することで成り立つ韓国語のアウトプットにおける、より日本語に寄り添ったアウトプットを「原文尊重主義」とし、これに対してより韓国語に寄り添ったアウトプットを「訳文尊重主義」としよう。そして、以下のように言い直してみたらどうか。〈そのどちらが良いとも言えない。重要なのは、そうした異なるアウトプットのための「翻訳」概念の中で、一体いかなるアウトプットが作られ、どのような影響を読者＝聴者すなわちアウトプットされる者に与えたかを知ることであろう〉。

外国語を上達させるためには、その外国語を学習して理解する上で、言語的な媒介とされる母語に対する理解も同様に深められなければならない。日本語と韓国語に限って言い直せば、日本語をもって韓国語を学

習する以上、韓国語学習において日本語と韓国語は同時に思考されるといっていいだろう。日本語を母語とする韓国語学習者に日本語の「原文尊重主義」と韓国語の「訳文尊重主義」のあいだを柔軟に橋渡りできるような思考を培養するために、翻訳された文学テキストはきわめて有効な教材になると思われる。

日本語原典を韓国語に翻訳したテキストを取り上げるのは、母語と外国語の相互作用を通じてより効果的な外国語教育が実施できると考えられるからである。学習者の言語的な思考のベースをなしている日本語的なものをすべて切り取り、もっぱら韓国語らしさを重視する「翻訳尊重主義」に傾倒した外国語学習は、論理的な作文や発言などに要求される、高度の外国語能力に達するように導くことができないだろう。これを言い換えれば、日本語原典のテキストの韓国語翻訳を活用することで、「翻訳尊重主義」つまり韓国語らしい表現を重視したアウトプットだけではなく、「原典尊重主義」つまり原典の日本語の意味に忠実なるアウトプットも合わせて可能となる韓国語教育が実現され得ると考えられるのだ。

このような問題意識から本稿では、大江健三郎『万延元年のフットボール』の日本語原典と韓国語翻訳を合わせて検討し、日本語を母語とする韓国語学習者に対し、文学テキストをいかに活用することができるかに関する提言を行う。その際、主に原典となる日本語がいかに翻訳されているのかを考察し、そのような翻訳が学習者に読まれていることを前提とした上で、そこからいかなる韓国語教育を考えることができるかに関しての説明を行う。具体的には、第一に、章立ての翻訳の様相を検討し、韓国語教育への活用について述べる。第二に、先行研究においても問題視されている小説の冒頭の翻訳の様相を検討し、韓国語教育への活用について述べる。第三に、作中の場面をいくつか取り上げて翻訳の様相を検討し、韓国語教育への活用について述べる。このような検討を通

じて、翻訳を用いて韓国語教育を行うことで、わかりやすく伝わりやすい韓国語を指導することができる、ということを明らかにする。

先述した通り、本稿における韓国語学習者を中・上級者に限定するために、語彙や文法などの表現が間違っていないかを問いただすものではない。⁽⁶⁾日韓の表現を同時に取り上げて照らし合わせることによって浮上する言語的な地平を拓く試みでもある。

2

『万延元年のフットボール』は、総13章で構成されているが、各章に章題が付けられている。その日本語原典と韓国語翻訳を比較することからはじめる。

- 1 死者にみちびかれて
- 2 一族再会
- 3 森の力
- 4 見たり見えたりする一切有は夢の夢に過ぎませぬか
- 5 スーパー・マーケットの天皇
- 6 百年後のフットボール
- 7 念仏踊りの復興
- 8 本当のことを云おうか
- 9 追放された者の自由
- 10 想像力の暴動
- 11 蠅の力。蠅は我々の魂の活動を妨げ、我々の体を食ひ、かくして戦ひに打ち勝つ。
- 12 絶望のうちにあって死ぬ。諸君はいまでも、この言葉の意味を

理解することができるであろうか。それは決してたんに死ぬことではない。それは生まれでたことを後悔しつつ恥辱と憎悪と恐怖のうちに死ぬことである、というべきではなからうか。

13 再審

제 1 장 망자 (亡者) 에게 이끌리다

제 2 장 가족의 재회

제 3 장 숲의 힘

제 4 장 보거나 보이거나 했던 모든 것은 꿈속의 꿈에 지나지 않았던 걸까?

제 5 장 슈퍼마켓 천황

제 6 장 백 년 후의 풋볼

제 7 장 되살아난 염불춤

제 8 장 진실을 말할까?

제 9 장 추방당한 자의 자유

제 10 장 상상력의 폭동

제 11 장 파리의 힘. 파리는 우리 영혼의 활동을 방해하며 우리의 육체를 먹고, 그리하여 싸움에서 이긴다.

제 12 장 절망 속에서 죽는다.

제군들은 지금도 이 말의 의미를 이해할 수 있을까.

결코 그냥 죽는 것이 아니다.

그것은 태어난 것을 후회하면서, 치욕과 증오와 공포 속에서 죽는 일이라고 말해야 하지 않을까.

제 13 장 재심 (再審)

「1 死者にみちびかれて」の韓国語訳「제 1 장 망자에게 이끌리다」の場合、「死者」を「망자 (亡者)」にした翻訳から、ほとんど同一の意

味を有する日韓間の語彙をいかに使い分けるかに関する教育のために活用することができる。韓国語にも「死者」を意味する、同一の漢字の「사자」という語はあるが、ここでは日本語にすれば「亡者」にあたる「망자」に翻訳されている。「亡者」とは、成仏できていない死者の魂を意味する仏教用語から来た語である。本小説における、暴動を指揮する「鷹」が、「S兄さん」や「曾祖父の弟」という死者の魂に自分のアイデンティティーを重ね合わせることや、念仏踊り(염불춤)という仏教的かつ民俗的な伝統行事から暴動に発展されていくというストーリーからして、仏教用語に由来する「망자」にした翻訳は、原典における「死者」という語の持つ意味合いをよりわかりやすく示すと同時に、「망자」という語そのものの持っている意味合いも、それに重なって自然に浮かび上がるように働きかけられると思われる。日本語を母語とする韓国語学習者にとって日本語と韓国語の間の類似性だけを重視し、漢字語が共通するという類似性から日本語の漢字語をそのまま韓国語の漢字語に当てはめることが、必ずしも絶対的に有効ではない。「死者」を「亡者」の「망자」にした翻訳からわかるように、伝えようとする意味合いやイメージを把握し、より適切と思われる語彙や表現にすることで、より豊かな韓国語を運用することができる。

「7 念仏踊りの復興」の韓国語訳「제 7 장 되살아난 염불춤」の場合、日本語の意味を保持しつつ、韓国語として成り立つ他の形の表現が用いられている例として活用することができる。「염불춤의 부흥」と直訳しても問題はないだろうが、名詞と名詞の間に位置する助詞「の」の韓国語「의」をもって翻訳する代わりに、よみがえる・生き返るを意味する「되살아나다」の連体形が活用されている。これも、日本語と韓国語の類似性に頼って直訳することが絶対的ではない、ということに関する事例といえる。同様の意味合いをあらわすことができる別の表現を用いることで、より豊かな韓国語を運用することができる一例になろう。

同様に、「2 一族再会」を「제 2 장 가족의 재회」にしたのも、直訳にこだわる必要がないことを考える上でいい事例となる。直訳すれば「일족재회」になるだろうが、第2章ではアメリカから帰ってくる「鷹」と「蜜」夫婦の再会の場面が主に描かれている。本小説におけるストーリーの主軸が、「鷹」と「蜜」に代表される「根所」家族の歴史である点からして、「일족」ではなく「가족」に翻訳されて差し支えはないと判断される。むしろ、韓国語として少々古風な感じもなくはない「일족」より、よりわかりやすい「가족」にされているところは、「一族」という日本語も現代日本語としてそれほど日常的によく使われているわけではない、という点と呼応しているともいえよう。日本語をベースに韓国語表現を想定するときに、必ずしも日本語原文にこだわってそれを直訳する必要はない。このような、日本語原典の有する意味合いやイメージを活かす範囲で、韓国語らしい韓国語に翻訳するという、日韓の言語間を相渡る柔軟な思考によって、わかりやすく伝わりやすい韓国語が浮かび上がると思われる。

「8 本当のことを云おうか」の韓国語訳「제 8 장 진실을 말할까?」の場合は、日本語の形式名詞「こと」を韓国語にいかに処理すればいいかに関する教育に活用することができる。「本当のこと」を韓国語に直訳すると、「진짜의 것」くらいになるだろうが、どうも不自然である。本小説における「本当のこと」とは、「鷹」が知的障害のあった「妹」と性関係を持つようになり、それによって結局は「妹」の自殺をもたらした、という過去のできごとである。「鷹」における、スーパーマーケット襲撃の指揮などにあらわれるような極度の暴力追求は、このような過去のできごと起因する自己処罰の欲動と結びつくものである。この「本当のこと」を兄の「蜜」は知らず、小説の後半で「鷹」によって「本当のこと」の白状が「蜜」に対して行われることになる。つまり、「鷹」が隠していた自分の内面における真実のようなものが白状されるのであ

る。もし、韓国語学習者が「本当のこと」という日本語を想定した上で、それを韓国語をもって伝えようとしていると仮定するならば、「本当のこと」の中の形式名詞にこだわらずに、「真実」にあたる「진실」という語彙を用いて、韓国語らしい表現を重視してアウトプットしたほうがよりスムーズなコミュニケーションにつながると思われる。同様の意味で、「事実通りに云おうか」の意味になる「사실대로 말할까?」⁽⁷⁾の翻訳もいい例になろう。この例は、より物語内部の状況に寄り添った翻訳になるとと思われる。

「11 蠅の力。蠅は我々の魂の活動を妨げ、我々の体を食ひ、かくして戦ひに打ち勝つ」の韓国語訳「제11장 파리의 힘. 파리는 우리 영혼의 활동을 방해하며 우리의 육체를 먹고, 그리하여 싸움에서 이긴다」の場合は、韓国語の書き言葉において日本語より読点が少ないことを示す。一般的に韓国語の文章の場合、読点が連続して使われている文章はいい文章として見なされない。これに対して日本語の場合は、韓国語に比べて読点の制限など特になく、より自由に読点を運用することができる。むしろ、適切に読点が打たれていないとよくない文章にみなされるといいだろう。日本語原文において「妨げ、我々の」のところが「방해하고, 우리의」といったように、読点を用いる表現にせず、「방해하며 우리의」のような読点を必要としない文章にしたところから、日本語と韓国語における読点の打ち方の違いについて指導することができよう。

このことと関連して付け加えると、日本語を母語とする韓国語学習者が韓国語で文章を書く際に、どうしても母語の習慣で、読点を多用するケースをしばしば目にする。そのような学習者に対して、読点を必要としない表現を適切に導入し、読点を減らすことでより韓国語らしい文章になる、ということを指導することが要求される。読点に関しては、また後述する。

以上、『万延元年のフットボール』における章立てを中心に日本語原

典と韓国語翻訳を比較し、日本語を母語とする韓国語学習者に対して、翻訳を用いていかなる韓国語教育の地平が拓かれるのかに関して述べた。次節では、小説の本文を用いて論じる。

3

先述した通り、『万延元年のフットボール』の冒頭は、日本語表現の側面からよく取り上げられてきた。ここでは、その冒頭の部分に焦点を当て、それがいかに韓国語に翻訳されているのかを比較することで、該当テキストを活用していかなる韓国語教育を行うことができるかに関しての提言を行いたい。

まず、小説のはじまりの文章の日本語原典および韓国語翻訳を引用する。

夜明けまえの暗闇に目ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする。⁽⁸⁾

채 밝지 않은 새벽의 어둠 속에서 눈뜨며 고통스러운 꿈의 여운이 남아 있는 의식을 더듬어 뜨거운 ‘기대’의 감각을 찾아 헤맨다.⁽⁹⁾

難解な日本語原典の文章を、句の順番を入れ替えた韓国語翻訳と比較してみると、日本語原典より韓国語翻訳のほうが読みやすくなっており、わかりやすくなっているのがわかる。小森陽一は、この文章における難解さをめぐって、術語を統合する主語の欠落から論じているが、韓国語翻訳に主語が付け加えられているわけではない。この翻訳におけるもっ

とも特徴的なのは、句の順番を入れ替えたところである。仮に、「夜明けまえの暗闇に目ざめながら」＝「채 밝지 않은 새벽의 어둠 속에서 눈뜨며」を①に、「熱い「期待」の感覚をもとめて」＝「뜨거운 ‘기대’ 의 감각을 찾아 헤맨다」を②に、「辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする」＝「고통스러운 꿈의 여운이 남아 있는 의식을 더듬어」を③にしてまとめると、日本語原典は①②③、韓国語翻訳は①③②の順になる。②と③の順番を入れ替えたのが、韓国語翻訳の特徴といえる。

翻訳論の観点からすれば、このように順番を入れ替えた翻訳は、小説全体の構成的な面からして、小説に対する理解を高める一助となる。引用の文章が含まれている段落に後続する段落のはじまりの文章は、「眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる」(7頁)である。藤本拓自の指摘によれば、「熱い「期待」の感覚」という表現に、『万延元年のフットボール』の主題が凝縮されている⁽¹⁾。韓国語の引用に見られるように、「熱い「期待」の感覚をもとめて」を文章の最後にしつつ、「뜨거운 ‘기대’ 의 감각을 찾아 헤맨다(熱い「期待」の感覚をもとめる)と文章を終える形にすると、後続する段落のはじまりの「眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる」という文章とも照応するようになる。これによって、本小説の主題が凝縮された表現が繰り返され、そこで小説の主題が強調される効果を生むようになる。また、本小説における日本語の難解さが指摘されていることと合わせて考えると、このような効果は、小説そのものに対する理解の深化だけではなく、小説に書かれた日本語に対する理解の深化をも促すものであろう。

このように、韓国語翻訳を参照することで、日本語原典の理解が深まる、ということは、翻訳というものを適切に活用することで、外国語だけではなく母語に対する理解も深まる、ということができる。先述したように、外国語を学習して理解するには、そのために媒介される母語に

対する理解も同様に深められなければならない。日本語原典の文学テキストの韓国語翻訳を韓国語教育に用いることで、韓国語だけではなく、日本語に対する理解もともに深まり、それと連動して韓国語に対する理解も深まると思われる。

語彙レベルから引用文を考えてみると、「手さぐりする」を「더듬다」に、「もとめる」を「찾아 헤매다」に翻訳した部分を活用して、原典の意味を保ちつつ韓国語としても適切な語彙を選択した例を提示することができる。「手さぐり」の意味は、手先の感じに頼って探し求める、探し求めることになるだろうが、「더듬다」の意味にも同様に手で触る、という意味合いが含まれている。「더듬다」という訳語は、「手さぐり」における「手」を韓国語の「손」をもって翻訳しなくても、そのような身体的な接触の意味まで含有している。「もとめる」を、「探し求める」の韓国語翻訳として想定される「찾아 헤매다」と翻訳することで、「手さぐり」に含まれている意味合いや、「手さぐり」が連想させるイメージが、「찾아 헤매다」という訳語と連携される形で再びあらわれることになり、文章全体が志向する意味合いやイメージがよりわかりやすく伝わる。また、後続する段落のはじまりの文章が「眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる」であることを考えれば、その韓国語翻訳の「눈뜰 때마다 잃어버린 뜨거운 ‘기대’ 의 감각을 찾아 헤맨다」における「さがしもとめる」=「찾아 헤매다」が、引用の文章の「もとめる」を「찾아 헤매다」に翻訳したところと呼応しているのがわかる。

以上、小説の冒頭の文章を中心に、その日本語原典と韓国語翻訳を比較することで、日本語を母語とする韓国語学習者にいかなる教育が可能かについて考えてみた。次節では、作中における表現をいくつか取り上げながら考えたい。

4

ここでは、『万延元年のフットボール』の中から、日本語を母語とする韓国語学習者に対して、効果的な韓国語教育の実施のために役にたつと思われるところを取り上げて分析する。

鷹四が教育本能を発揮する。僕はかつてそのようなタイプの間人としての弟を見たことがなかった。弟が権威をこめて若者に、もう飲むな、人生はしらふでやってゆかなければだめだという。それだけで若い日傭い労働者が、かれの自己破壊的な生活を改造する。そして若者はその思い出を余裕たっぷりに微笑しながら話している！
(53頁、強調省略)

다카시가 교육 본능을 발휘하다니! 나는 일찍이 동생을 그런 식으로 본 적이 없었다. 동생이 권위적으로 소년에게 더 이상 마시지 마라, 인생은 맨정신으로 살아나가야 한다고 말한다. 그것만으로 일용직 노동자가 자신이 자기 파괴적인 생활을 개조한다. 그리고 소년은 그런 기억을 여유 만만한 미소를 띠고 이야기하다니!
(62頁)

この日本語原典と韓国翻訳の比較から、日本語を母語とする韓国語学習者に対して、先述した「原文尊重主義」と「訳文尊重主義」のいずれにも偏っていない韓国語表現を提示することができると思われる。言い換えれば、原典の意味合いやイメージを保持しつつ翻訳としての柔軟性を発揮することで、原典における意味合いやイメージをよりわかりやすく伝えることができた事例といえよう。冒頭の、日本語原典における平叙文が韓国語翻訳においては感動文に翻訳されており、それによって兄の

「蜜三郎」における弟の「鷹四」に対する認識が覆される場面としてのインパクトがより強くなっている。一見すればやや過剰な「訳文尊重主義」に見えがちだが、最後の文章での、「その思い出を余裕たっぷりに微笑しながら話している」「若者」が思い出すこととは、それまで考えられなかった「鷹四」の、「教育本能を發揮する」様子になる。引用のはじまりの文章とおわりの文章がともに喚起するイメージとは、「見たことがなかった」「鷹四」の新たな面である。このようにしてみれば、はじまりの平叙文の「鷹四が教育本能を發揮する」を、感動文の「다카시가 교육 본능을 발휘하다니！」（鷹四が教育本能を發揮するとは！）に翻訳したことによって、段落全体がいかなる意味合いやイメージを伝えようとしているのかが、よりわかりやすくなると思われる。「原文尊重主義」を頑なに守るかのように原典に忠実しているわけではないものの、決して原典の意味を壊さず、原典の志向する意味合いがわかりやすく伝わり得るように翻訳されていると思われる。

次に、韓国語翻訳において日本語原典の読点がどう処理されているのかについて考えたい。

素裸の鷹四が駆けるのを止めてしばらく歩き、それから雪に膝について、両手で雪を撫でまわした。僕は鷹四の痩せて角ばった尻と無数に関節をそなえた虫の背みたいに柔軟に折り曲っている長い背を見た。(241頁)

벌거벗은 다카시가 달리던 것을 멈추고 얼마 동안 걸다가 눈 위에 무릎을 꿇고 양손으로 눈을 어루만졌다. 나는 다카시의 야위어 앙상한 엉덩이와 무수한 관절을 갖춘 벌레처럼 유연하게 구부러져 있는 긴 등을 보았다.(297頁)

できる限り日本語原典における読点を省略した韓国語翻訳のほうが、日本語原典における意味合いやイメージを伝えることができるだけではなく、韓国語としてもわかりやすい。言い換えれば、日本語原典における意味合いやイメージが伝わりやすくなっているのは、韓国語としてわかりやすく翻訳されているからである。「歩き、」、「ついて、」、「撫でまわした」のように、読点によって区切られながら進められている文章の読点をすべて削除し、「걷다가」、「꿨고」、「어루만졌다」でつなげている。原典通りに翻訳してみると「얼마 동안 걷고, 그러고는 눈 위에 무릎을 꿨고, 양손으로 눈을 어루만졌다」のようになるだろうが、「歩き、それから」に含まれている意味を読点抜きの「걷다가」に翻訳し、続く読点も削除することで、スムーズに「鷹四」の一連の行動が韓国語を通じて描写されている。

韓国語翻訳で読点抜きによって実現され得るわかりやすさと伝わりやすさを強調する理由は、それが話し言葉や会話においてもっとも重要なところだからである。いうまでもなく、会話で読点が可視化されることはない。書き言葉においては明確かつ正確に打たなければならない読点だが、話し言葉においてはそうではない、といってもいい。要するに、韓国語の書き言葉においても話し言葉においても、読点にあたる部分は少ないほうがより自然な韓国語になるがゆえに、このように読点を適切に省略した、日本語原典の韓国語翻訳を韓国語学習に活用することで、書き言葉と話し言葉の両方におけるわかりやすさと伝わりやすさを提示することができるのだ。

僕と妻と若者とは、なかば凍っている泥濘にぎくぎくと踵の減りこむ不安定な前庭を歩き滞みながら、黙りこんでいた。暗い無音の陥没たる谷間は、覗きこむと底しれぬ堅穴のように感じられ、そこから湿って冷たい風が吹きあげてきた。(366頁)

반쯤 얼어붙어 있는 진흙땅에 뒤꿈치가 쑥쑥 빠지는 불안정한 안뜰을 어렵사리 걸으면서 나와 아내와 소년은 침묵을 지키고 있다. 어두운 정적의 함몰부같이 골짜기 마을은 들여다보면 바닥 모를 구멍처럼 느껴졌고, 축축하고 차가운 바람이 불어 올라왔다. (456頁)

日本語原典では四つ打たれている読点が、韓国語翻訳では一つしか打たれていない。もし原典通りの読点を挿入すると、以下のような文章になる。

반쯤 얼어붙어 있는 진흙땅에 뒤꿈치가 쑥쑥 빠지는 불안정한 안뜰을 어렵사리 걸으면서, 나와 아내와 소년은, 침묵을 지키고 있다. 어두운 정적의 함몰부같이 골짜기 마을은, 들여다보면 바닥 모를 구멍처럼 느껴졌고, 축축하고 차가운 바람이 불어 올라왔다.

そもそも文章の冒頭にある「僕と妻と若者」という主語を、文章全体を締めくくる述語の直前に移動させたこととあいまって、読点が少ないほうがより読みやすく、したがって文章の意味合いやイメージがよりわかりやすく伝わってくるのが確認できるだろう。両者を、声を出して読み上げてみると、それは一目瞭然である。

以上、『万延元年のフットボール』の日本語原典と韓国語翻訳の比較を行った。その際には、主に二つの側面から比較を行った。第一は、韓国語らしく翻訳することで、韓国語として自然であるとともに、日本語原典における意味合いやイメージがより活かされる。第二は、第一の側面と関連するものだが、日本語原典の読点を減らす工夫を施すことで、よりわかりやすく伝わりやすい韓国語翻訳にすることが可能で、これは話し言葉の学習においても活用できるものである。

5

ここまで、大江健三郎『万延元年のフットボール』の日本語原典と韓国語翻訳の比較を通じてあらわれる問題や示唆を、日本語を母語とする韓国語学習者に対する教育において、いかに活用することができるかについての提言を行った。

現代世界において異なる言語間のコミュニケーションを可能にする行為は、翻訳である。外国語を学習する者が、母語を媒介せずに外国語を学習し、その外国語をものにするのは、不可能である。母語という回路を通じて、外国語の語彙や文法などの運用を身につける。そのような学習した外国語をアウトプットする場合も、母語を媒介せずに外国語が成り立つことは考えられない。まずは、言語的な思考のベースとなる母語を通じて伝えたいことを想定し、それに関する言語的な枠づけを母語をもって行い、外国語に切り替えることができるような段階までその意味合いやイメージが明確化されたら、外国語を通じてアウトプットされるようになるのではないだろうか。要するに、外国語学習の最終的な目標が、書き言葉としてであれ、話し言葉としてであれ、外国語の適切かつ的確なアウトプットであるのであれば、そのような目標を効果的に達成するためには、翻訳というものに対する認識を深める必要があるのである。本稿は、このような問題意識から構想されたものである。

本稿の問題意識を文学研究に絡めながら記すればこうなる。比較文学的な観点に基づく、世界文学をめぐる議論において、翻訳という行為やプロセスがもたらす効果と可能性は長い間議論されてきた。世界文学をめぐる議論が有効な理由は、現代という時代においてグローバル化が加速化されつつあるからにほかならない。大学などの高等教育機関において外国語教育が活性化される理由は、このような現代のグローバル化に適應できる、グローバル社会の中で活躍できる人材を育成するためであ

ろう。翻訳というものは、グローバル化する国際社会の中で活躍する人材を育成する上で、特に外国語教育において、非常に重要な教育課題であると考えられる。

本稿で試みた提言は、まだ抽象的なところも多い。だが、長い期間にわたって一定の数の需要者を確保しており、なおかつ今後においてさらなる需要者の増加が予想される韓国語の教育において、様々なニーズに合わせて多様な教材やコンテンツを活用し、高いレベルの韓国語が運用できる人材を育成することは、現在の硬直した日韓関係の進展においても、非常に重要であると考えられる、ということをつけ加えておく。

注

- (1) 「大江健三郎氏 魂のレベルで「生」問う 普遍の主題、世界に刻む」『朝日新聞』1994年10月14日。
- (2) 角田敏郎「比喩と心象—小説『万延元年のフットボール』を例として」『語学文学』第6号、北海道教育大学語学文学会、1968年、10～18頁。
- (3) 藤本拓自「文学作品における共感覚表現について—大江健三郎『万延元年のフットボール』を中心に」『言語文化学会論集』第17号、言語文化学会、2001年、129～143頁。
- (4) 小森陽一「「乗越え点」の修辞学—『万延元年のフットボール』の冒頭分析」『季刊文学』第6巻第2号、岩波書店、1995年。
- (5) 大澤吉博「比較文学研究と翻訳」『言語のあいだを読む一日・英・韓の比較文学』思文閣出版、2010、28～44頁。
- (6) 유은경は、夏目漱石や川端康成など、韓国で愛読されている日本文学を韓国語翻訳の問題点や誤訳を摘出する一連の研究に取り組んだ。유은경「『마음』번역의 문제점 ‘선생님과 유서’를 중심으로」『日本語文学』第71輯、日本語文学会、2015、381～400頁、など。一方で、大澤吉博は、「誤訳」や「原文の歪曲」の指摘することが絶対的な価値を有するわけではないと

- いう立場に立ち、翻訳というプロセスによって推し進められる文化的な側面を強調する。本稿における翻訳を通じての比較は、大澤の立場に寄り添うものであることを記しておく。吉澤吉博「言語の間の漱石「夢十夜」第八夜」、前掲『言語のあいだを読む一日・英・韓の比較文学』、221～251頁。
- (7) NAVER 지식백과 「동양의 고전의 읽는다 만엔 원년의 풋볼 백년을 뛰어 넘는 역사와의 교감」、<https://terms.naver.com/entry.nhn?cid=60611&docId=892525&categoryId=60611>（閲覧日：2019年9月30日）。
- (8) 大江健三郎『万延元年のフットボール』講談社、1988、7頁。以下、引用の際は引用文末に頁だけ記入。
- (9) 오에 겐자부로 / 박유하 역 『만엔 원년의 풋볼』웅진지식하우스、2017、8頁。以下、引用の際は引用文末に頁だけ記入。
- (10) 小森陽一は、「夜明けまえの暗闇に目ざめながら、僕は、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする」（下線は引用者による）とすればよりわかりやすくなるように、主語の欠落による難解さを指摘する。小森陽一「「乗越え点」の修辞学—『万延元年のフットボール』の冒頭分析」、前掲、55～59頁。
- (11) 藤本拓自「文学作品における共感覚表現について—大江健三郎『万延元年のフットボール』を中心に」、前掲、138頁。藤本によれば、カッコ付きの「期待」という語は、小説全編にわたって10例ある。また、柄谷行人は「熱い「期待」の感覚」が「この作品の基底に存在する気分であり、「存在感」そのものである」と述べる。柄谷行人「大江健三郎のアレゴリー」『底本 柄谷行人集 5 歴史と反復』岩波書店、2004、124頁。

中華人民共和國民法總則

李 智 基・加 藤 幸 英

(2017年3月15日第12回全国人民代表大会第5次會議通過)

中華人民共和國主席令第66号

《中華人民共和國民法總則》は、中華人民共和國人民代表大会第5次會議において2017年3月15日に通過したため公布を行い、2017年10月1日から施行する。

中華人民共和國主席 習近平

2017年3月15日

http://www.npc.gov.cn/2grdw/npc/xinwen/2017-03/15/content_2018907.htm

目次

第一章 基本原則

第二章 自然人

第一節 民事上の権利能力及び民事上の行為能力

第二節 監護

第三節 失踪宣告及び死亡宣告

第四節 個人工商業者（個人事業主に相当する）、農村請負經營者（永小作人に相当する）

第三章 法人

第一節 一般規定

- 第二節 営利法人
- 第三節 非営利法人
- 第四節 特別法人
- 第四章 非法人組織
- 第五章 民事上の権利
- 第六章 民事法律行為
 - 第一節 一般規定
 - 第二節 意思表示
 - 第三節 民事法律行為の効力
 - 第四節 条件付き民事法律行為及び期限付き民事法律行為
- 第七章 代理
 - 第一節 一般規定
 - 第二節 委託代理
 - 第三節 代理の終了
- 第八章 民事責任
- 第九章 訴訟時効
- 第十章 期間の計算
- 第十一章 附則

第一章 基本原則

第1条 民事主体の合法的な権利と利益を守り、民事上の関係を調整し、社会と経済の秩序を維持し、中国独自の社会主義の発展の要請に適合し、社会主義の基本的価値観を発揚するため、憲法に基づいて、本法を制定する。

第2条 民法は平等な民事主体としての自然人、法人及び非法人組織の

間の身分関係と財産関係を調整する。

第3条 民事主体の人格権、財産権及びその他の合法的な権利・利益は法による保護を受け、如何なる組織または個人によっても侵されない。

第4条 民事主体の民事活動における法律上の関係は一律的に平等である。

第5条 民事主体が民事活動に従事するときは、意思自治の原則に基づき、自らの意思に従って、民事上の法律関係の設定、変更及び終了を行わなければならない。

第6条 民事主体は民事活動に従事する際、信義の原則に従い、各当事者の権利及び義務を合理的に確定しなければならない。

第7条 民事主体が民事的活動を行う際には、誠実の原則に従い、誠実に、合意を遵守しなければならない。

第8条 民事主体は民事活動に従事する場合には、法律に違反してはならず、公序良俗に反してはならない。

第9条 民事主体が民事活動に従事する際には、資源を節約し、環境保護に努めなければならない。

第10条 民事上の紛争を処理する際には、法律の規定に基づかなければならない。法に定めるところがない場合には、慣習を適用することができる。ただし、公序良俗に反してはならない。

第11条 民事上の関係につき、その他の法律に特段の定めるところがある場合には、その規定に従う。

第12条 中華人民共和国の領域内における民事活動には、中華人民共和国の法律を適用する。法律に特段の定めるところがある場合には、その規定に従う。

第二章 自然人

第一節 民事上の権利能力及び民事上の行為能力

第13条 自然人は出生のときから死亡のときまでの間、法律に基づいて民事上の権利を有し、民事上の義務を負う。

第14条 自然人の民事上の権利能力は一律に平等である。

第15条 自然人の出生日時及び死亡の日時は、出生証明、死亡証明に記載される日時を基準とする。出生証明、死亡証明が存しない場合、戸籍登記またはその他の有効な身分登記に記載された日時を基準とする。その他の証拠をもって上記の記載日時を覆すことに足りる場合には、当該証拠が証明する日時を基準とする。

第16条 遺産相続、贈与を受けるなど胎児の利益保護に関わる際には、胎児であっても民事上の権利能力を有するものとみなす。ただし、胎児は出生した時に死体であった場合には、その民事上の権利能力は初めから存在しなかったものとする。

第17条 満十八歳の自然人は成年者とする。十八歳未満の自然人は未成年者とする。

第18条 成年者は完全な民事上の行為能力者とし、民事上の行為能力を独立して行使することができる。

十六歳以上の未成年者は、自己の労働収入をもって主な収入源とする場合には、完全な民事上の行為能力者とみなす。

第19条 八歳以上の未成年者は、制限的民事上の行為能力者とし、民事上の法律行為を行使する際には、その法定代理人が代理し、またはその他の法定代理人の同意若しくは追認を経なければならない。ただし、単に利益を得る民事上の法律行為またはその年齢、知力と相応する民事上の法律行為についてはこれを独立して行使することができる。

第20条 八歳未満の未成年者は、民事上の行為無能力者とし、その法

定代理人が民事上の法律行為を代理して行う。

第21条 自己の行為を判断することができない成年者は、民事上の行為無能力者とし、その法定代理人が民事上の法律行為を代理して行う。

八歳以上の未成年者が自己の行為を判断することができない場合には、前項の規定を適用する。

第22条 自己の行為を完全に判断することができない成年者は、民事上の制限行為能力者とし、民事上の法律行為を行う際にはその法定代理人が代理し、またはその法定代理人の同意若しくは追認を経る。ただし、単に利益を得る民事上の法律行為またはその知力、精神的健康状況に相応する民事上の法律行為については独立して行うことができる。

第23条 民事上の行為無能力者、民事上の制限行為能力者の後見人は、その法定代理人となる。

第24条 自己の行為を判断することができない、または完全に判断することができない成年者については、その者の利害関係人または関係組織は、当該成年者を民事上の行為無能力者または民事上の制限行為能力者として認定するよう人民法院に申請することができる。

人民法院によって民事上の行為無能力者または民事上の制限行為能力者として認定された場合、その知力、精神的健康状態の回復状況により、本人、利害関係人または関係組織の申請を経て、人民法院は、当該成年者を制限民事行為者または完全民事行為能力者に回復したことを認定することができる。

本条に定める関係組織には、居民委員会、村民委員会、学校、医療衛生機構、婦女連合会、障害者連合会、法律に基づいて設立した高齢者組織、民政部門などが含まれる。

第25条 自然人は、戸籍に登録された居所またはその他の有効な身分登記に記載された居所を住所とする。継続的な居所と住所と一致しない場合には、継続的な居住地を住所とみなす。

第二節 監護

第26条 父母は未成年者の子に対して養育、教育及び保護の義務を負う。

成年者となった子は父母を扶養、扶助及び保護をする義務を負う。

第27条 父母は未成年者の後見人（監護人）である。

未成年者の父母がすでに死亡または後見人としての能力を有しない場合には、次に掲げる後見能力を有する者の順に後見人を務める。

(一) 祖父母

(二) 兄、姉

(三) その他後見人を務める意思を有する個人または組織。ただし、未成年者の住所地の居民委員会、村民委員会または民政部門の同意を経なければならない。

第28条 民事上の行為無能力者または民事上の制限行為能力者の成年者は、次に掲げる後見能力を有する者の順に後見人を務める。

(一) 配偶者

(二) 父母、子女

(三) その他の近親族

(四) その他の後見人を務める意思を有する個人または組織。ただし、被後見人の住所地の居民委員会、村民委員会または民政部門の同意を経なければならない。

第29条 被後見人の父母が後見人を務めている場合には、遺言により後見人を指定することができる。

第30条 法律に基づいて後見資格を有する者の間の協議により後見人を確定することができる。協議によって後見人を確定する場合には、被後見人の真実の意思を尊重しなければならない。

第31条 後見人の選任に対して争いがある場合には、被後見人の住所地の居民委員会、村民委員会または民政部門によって後見人を指定する。

関係当事者が、選任に不服を申し立てた場合には、人民法院に後見人の指定を申請することができ、関係当事者は直接人民法院に後見人の指定を申請することができる。

居民委員会、村民員会、民政部門または人民法院は、被後見人の真実の意思を尊重し、被後見人にとって最も有利であるという原則に従って法により後見資格を有する者の中から後見人を指定しなければならない。

本条第1項の規定に基づいて後見人を指定される前に、被後見人の人身権、財産権及びその他の合法的な権利・利益が保護する者がいない状況に置かれている場合には、被後見人の住所地の居民委員会、村民委員会、法律が定める関係組織または民政部門が臨時後見人を務める。

後見人を選任された後には、無断で変更してはならない。無断に変更された場合であっても、指定された後見人の責任は免除されない。

第32条 法に基づく後見資格を有する者がいない場合には、後見人は被後見人の住所地の居民委員会または村民委員会が務めることができる。

第33条 完全民事行為能力を有する成年者は、その近親者及びその他の後見人を務める意思を有する個人または組織と事前に協議して、書面をもって自己の後見人を指定することができる。協議によって選任した後見人は、当該成年者が民事上の行為能力の一部または全部を喪失したとき、後見責任を履行する。

第34条 後見人の責任は、被後見人を代理して民事的法律行為を行い、被後見人の人格権利、財産権及びその他の合法的な権利・利益を保護することなどである。

後見人が法律に基づいて後見人としての責任を履行することによって生じた権利は、法による保護を受ける。

後見人が後見人としての責任を履行せず、または被後見人の合法的な利益に損害を与えた場合には、法的責任を負わなければならない。

第35条 後見人は、被後見人に最も有利であるという原則に従って後見責任を履行しなければならない。後見人は被後見人の利益となる場合を除き、被後見人の財産を処分してはならない。

未成年者の後見人が後見責任を履行し、被後見人の年齢と知力の情況に基づいて被後見人の権利に関係することを決定する場合には、被後見人の真実の意思を尊重しなければならない。

成年者の後見人が後見責任を履行する際には、被後見人の真実の意思を最大限に尊重し、被後見人がその知力、精神健康状況に応じて民事上の法律行為を独立して履行することを保障し、かつ、これに協力しなければならない。被後見人が独立して処理する能力を有する事項に対して、後見人は干渉してはならない。

第36条 後見人に次に掲げる事由のいずれかがある場合には、人民法院は関係する個人または組織の申立てに基づいて、その後見人の資格を取消し、必要な臨時後見措置を手配し、かつ、被後見人に最も有利であるという原則に従って後見人を法律に基づいて指定する。

- (一) 被後見人の心身の健康に重大な被害を与える行為をなした場合。
- (二) 後見責任の履行を怠り、または後見責任を履行することができず、かつ、後見責任の一部または全部を他人に委託することも拒絶した結果、被後見人が困窮状態に置かされている場合。
- (三) 被後見人の合法的な利益に重大な損害を与える等他の行為をなした場合。

本条に定める関係者及び組織には、その他後見資格を法律に基づいて有する者、居民委員会、村民委員会、学校、医療衛生機構、婦女連合会、障害者連合会、未成年者保護組織、法律に基づいて設立した高齢者組織、民政部門などが含まれる。

前項に定める個人及び民政部門は人民法院に後見資格の取消しを遅滞なく申し立てない場合には、民政部門は人民法院に申立てをしなければ

ならない。

第37条 法律に基づいて被後見人の養育費、扶養費などを負担する父母、子女、配偶者などは、人民法院によって後見人の資格を取り消された後であっても、その負担する義務を継続して履行しなければならない。

第38条 被後見人の父母または子女が人民法院によって後見人資格を取り消された後、被後見人に対して故意による犯罪をなした場合を除き、後見人が真摯に反省している状況を確認されたときは、その申立てにより、人民法院は被後見人の真実の意思を尊重する前提で、状況に応じ、その後見人資格を回復させることができる。人民法院によって指定した後見人と被後見人の関係は同時に終了する。

第39条 次に掲げる事由のいずれかがある場合には、後見関係は終了する。

- (一) 被後見人が完全民事上の行為能力を取得するまたは回復した場合。
- (二) 後見人が後見能力を喪失した場合。
- (三) 被後見人または後見人が死亡した場合。
- (四) 人民法院が後見関係の終了を認定したその他の事由。

後見関係が終了した後、被後見人はなお後見を要する場合には、法律に基づいて後見人を別途選任しなければならない。

第三節 失踪宣告及び死亡宣告

第40条 自然人が行方不明になって満2年になった場合には、利害関係人は人民法院に当該自然人を失踪者とする宣告を申請することができる。

第41条 自然人の行方不明の期間は、当該自然人が音信不通となった日から起算する。戦争期間中に行方不明となった場合には、行方不明の期間は戦争の終結日または関係機関が確定した行方不明の日から計算する。

第42条 失踪者の財産は、その配偶者、成年の子女、父母またはその他の財産代理管理人を務める意思を有する者によって代理して管理される。

代理管理に争いがある場合、前項に定める者がいない場合、または前項に定める者が管理能力を有しない場合には、人民法院により指定した者が代理して管理する。

第43条 財産代理管理人は、失踪者の財産を適切に管理し、その財産の権益を守らなければならない。

失踪者の未払の税金、債務及び支払うべきその他の費用は、財産代理管理人は失踪者の財産の中から支払う。

財産代理管理人は故意または重大な過失によって失踪者の財産に損失を与えた場合には、賠償責任を負わなければならない。

第44条 財産代理管理人が、その代理管理の職責を果たさず、失踪者の財産の権益を侵害し、またはその代理管理能力を喪失した場合には、失踪者の利害関係人は財産代理管理人の変更を人民法院に申請することができる。

財産代理管理人は、正当な理由を有する場合には、人民法院に財産代理管理人の変更を申請することができる。

人民法院が財産代理管理人を変更した場合には、変更後の財産代理管理人は遅滞なく元の財産代理管理人に対して関係財産を引き渡し、かつ、財産代理管理状況の報告を求める権利を有する。

第45条 失踪者が再び現れた場合には、本人または利害関係人の申請により、人民法院は失踪宣告を取消さなければならない。

失踪宣告者が再び現れた場合には、財産代理管理人に対して遅滞なく関係財産の返還及び財産代理管理状況の報告を求める権利を有する。

第46条 自然人は以下に掲げる事由のいずれかがある場合には、利害関係人は人民法院に当該自然人の死亡宣告を申請することができる。

(一) 行方不明になってから4年が経過した場合。

(二) 不慮の事件により、行方不明になってから2年を経過した場合。

不慮の事件により行方不明になり、当該自然人の生存の可能性はないと関係機関による証明を経た場合には、死亡宣告の申請における2年という期間の制限を受けない。

第47条 同一の自然人に対して、利益関係者が死亡宣告を申請し、他の者が失踪宣告を申請した場合には、本法が規定する死亡宣告の条件を満たしたときは、人民法院は死亡を宣告しなければならない。

第48条 死亡宣告を受けた者は、人民法院の判決によって確定された日を死亡した日とみなす。不慮の事件により行方不明となり死亡宣告された場合には、不慮の事件が発生した日を死亡の日とみなす。

第49条 死亡を宣告されたにもかかわらず死亡していなかった場合には、当該自然人が死亡宣告を受けた期間になされた民事上の法律行為の効果に影響を及ぼさない。

第50条 死亡宣告を受けた者が現れた場合には、本人または利害関係人の申請により、人民法院は死亡宣告を取消さなければならない。

第51条 死亡宣告を受けた者の婚姻関係は、死亡宣告の日から消滅する。死亡宣告を取消した場合、夫婦関係は死亡宣告が取消された日に自動的に回復する。ただし、その配偶者が再婚していた場合または回復に同意しない旨を婚姻登記機関に書面により表明する場合はこの限りでない。

第52条 死亡宣告を受けた者は死亡宣告を受けた期間内に、その子女が法律に基づいて他人の養子になった場合、死亡宣告を取り消された後に、本人の同意を得ずに養子縁組関係の無効を主張してはならない。

第53条 死亡宣告を取り消した者は、相続法に基づいてその財産を取得した民事主体に対し、財産の返還を請求する権利を有する。返還することができない場合、適切に補償しなければならない。

利害関係人が真実の状況を隠蔽し、死亡宣告とその財産を他人に取得

させた場合には、現物を返還しなければならないほか、これによって生じた損失について賠償責任を負わなければならない。

第四節 個人工商業者（個人事業主に相当する）、農村請負経営者（小作人に相当する）

第54条 自然人が商工業に従事し、法律に基づいて登記を経た者は、個人工商世帯（個人工商戸）とする。個人工商業世帯は商屋号を付けることができる。

第55条 農村集団経済組織の構成員は、法律に基づいて農村土地請経営権を取得し、家族請負経営を行う場合、農村請負経営世帯とする。

第56条 個人工商業世帯の債務は、個人経営の場合、個人財産をもって責任を負う。家族経営の場合、家族の財産をもって引き受ける。区別することができない場合には、家族の財産をもって引き受ける。

農村請負経営世帯の債務は農村土地請負経営に従事する農業世帯の財産をもって引き受ける。農業従事者の一部の構成員が事実上経営している場合には、当該一部の構成員の財産をもって引き受ける。

第三章 法人

第一節 一般規定

第57条 法人は民事上の権利能力と民事上の行為能力を有し、法律に基づいて独立して民事上の権利を有し、民事上の義務を負う組織である。

第58条 法人は法律に基づいて設立されなければならない。

法人は自己の名称、組織機構、住所、財産及び経費を有しなければならない。法人を設立する具体的な条件及び手続きは、法律及び行政法規の定めるところによる。

法人を設立するには、関係機関の認可を経なければならない旨が法律または行政法規に定められている場合には、当該規定に従う。

第59条 法人の民事上の権利能力と民事上の行為能力は、法人の設立時から生じ、法人解散時に消滅する。

第60条 法人はその全ての財産をもって独立して民事責任を負う。

第61条 法律または法人の定款に基づいて、法人を代表して民事活動に従事する責任者を、法人の代表者とする。

法人の代表者は、法人の名をもって民事活動に従事し、その法律上の効果は法人に帰属する。

法人の定款または権力機構が法人の代表者の代表権に制限を加えた場合であっても、善意の第三者には対抗することができない。

第62条 法人代表者が職務執行により他人に損害を被らせた場合には、法人がその民事責任を負う。

法人が民事責任を負った場合、法律または法人の定款に基づいて、過失のある法人代表者に対して償還責任を請求することができる。

第63条 法人はその主たる事務所の所在地を住所とする。法律に基づいて登記手続きを要する場合、その主たる事務所の所在地を住所として登記しなければならない。

第64条 法人の存続期間中に登記事項の変更がある場合には、法律に基づいて登記機関に変更登記の申請を行わなければならない。

第65条 法人の実際の状況と登記事項が一致しない場合、善意の第三者に対して対抗できない。

第66条 登記機関は法律に基づいて法人登記に関する情報を遅滞なく公示しなければならない。

第67条 法人が合併した場合には、その合併後の法人が権利を有し、義務を負う。

法人を分割した場合には、その権利及び義務は分割した法人が連帯し

て権利を有し、義務を負う。ただし、債権者及び債務者との間に別段の約定が存する場合はこの限りでない。

第68条 法人は次に掲げる事由のいずれかがあり、かつ、法律に基づいて清算を完了し、抹消登記を終えた場合に法人が終了する。

- (一) 法人が解散した場合。
- (二) 法人が破産宣告を受けた場合。
- (三) 法律が規定する他の原因。

法人の終了について、関係機関の認可を経なければならない旨を法律、行政法規に定められている場合、その規定に従う。

第69条 次に掲げる事由のいずれかがある場合には、法人は解散する。

- (一) 法人の定款に定める存続期間が満了しまたは法人の定款に定める解散事由が発生した場合。
- (二) 法人の意思決定機関が解散を決議した場合。
- (三) 法人の合併または分割に伴って解散する必要がある場合。
- (四) 法人が法律に基づいて営業許可書若しくは登記証書を取り消され、閉鎖を命じられ、または抹消させられた場合。
- (五) 法律が規定する他の状況。

第70条 法人を解散する場合には、合併または分割の状況を除いて、清算義務者は清算人会（清算組）を設立して清算を遅滞なく行わなければならない。

法人の取締役（董事）、理事など執行機関または意思決定機構の構成員は清算義務者となる。ただし、法律、行政法規に別段の規定がある場合には、その規定に従う。

清算義務者が清算義務を遅滞なく履行せず、損害が生じた場合、民事的責任を負わなければならない。主たる管理機関または利害関係人は、関係者を指定して清算人会を設立して清算を行わせるよう人民法院に申請することができる。

第71条 法人の清算手続き及び清算人会の職権は、関係する法律の定めるところに従う。定めることがなかった場合、会社法の関係規定を参考して適用する。

第72条 清算期間において、法人は存続する。ただし、清算と関係がないことに従事してはならない。

法人を清算した後の残余財産については、法人の定款または法人の権力機構の決議に基づいて処理する。法律に別段の定めるところがある場合には、その規定に従う。

清算を終了し、かつ、法人の抹消登記を完了した場合、法人は終了する。法律に基づいて登記を行うことを要しない場合、清算が終了したときに法人は終了する。

第73条 法人が破産宣告を受けた場合、法律に基づいて破産清算を行い且つ法人の抹消登記を終えた場合に、清算手続きは終結し法人は終了する。

第74条 法人は法律に基づいて支店(分支機構)を設けることができる。支店に関する登記をすべきことが法律、行政に必要と定められている場合、その規定に従う。

支店が自己の名をもって民事活動に従事し、これによって生じた民事責任は法人が負う。またはまず支店が管理する財産をもって責任を負い、責任が足りない場合、法人がその責任を負う。

第75条 設立者が法人の設立のために行った活動は、その法律上の効果はその法人に帰属する。法人の設立ができなかった場合、設立者にその法律上の効果が帰属する。設立者が2人以上の場合には、連帯して責任を負う。

設立者が法人設立のために自己の名を持って民事活動を行ったことにより生じた民事責任について、第三者は法人または設立者を選択して民事責任を請求する権利がある。

第二節 営利法人

第76条 利潤を獲得し、かつ、その株主などの出資者に分配することを目的として設立した法人は、営利法人となる。営利法人は、有限責任会社（有限責任公司）、株式有限会社（股份有限公司）及びその他の企業法人が含まれる。

第77条 営利法人は法律に基づいて登記することを経て設立する。

第78条 法律に基づいて設立された営利法人は、法人登記機関が営利法人営業許可証を交付する。営業許可証の発行日が営利法人の成立日となる。

第79条 営利法人を設立する際には、法律に基づいて法人の定款を制定しなければならない。

第80条 営利法人はその権力機関を設けなければならない。

権力機関は、法人の定款の変更、執行機関、監督機関の構成員の選任または更迭、ならびに法人の定款に定めるその他の権限を行使する。

第81条 営利法人には、執行機関を設けなければならない。

執行機関は、権力機関会議の招集、法人の経営計画または投資案の決定、法人内部の管理機関設置の決定、または法人の定款に定める他の権限を行使する。

董事会または執行董事が執行機関になる場合、董事長、執行董事または経理が法人の定款の規定に基づいて法人の代表者としてその責任を担う。董事会または執行董事が設けられていない場合、法人の定款に定める主な責任者がその執行機関及び法人の代表者となる。

第82条 営利法人が監事会または監事などの監督機関を設けている場合、監督機関は法律に基づいて法人の財務を監査し、執行機関の構成員及び高級管理者による法人の執務行為を監督し、並びに定款に定める他の権限を行使する。

第83条 営利法人の出資者は、出資者としての権利を濫用して法人ま

たはその他の出資者の利益に損害を与えてはならない。出資者としての権利を濫用して法人またはその他の出資者の利益に損害をもたらせた場合、法律に基づいて民事責任を負わなければならない。

営利法人の出資者は、法人の独立した地位や出資者の有限責任を濫用して法人の債権者の利益に損害を与えてはならない。法人の出資者は法人の独立した地位や出資者の有限責任を濫用して、債務逃れをし、法人の債権者の利益に著しい損害を被らせた場合には、法人の債務に対して連帯して責任を負う。

第84条 営利法人の支配株主、実質的な支配者、取締役、監査役、高級管理者はその関連する関係を利用して法人の利益に損害を与えてはならない。関連する関係を利用して法人に損害を与えた場合には、損害を賠償する責任を負わなければならない。

第85条 営利法人の権力機関、執行機関が決議を行った会議の招集手続き、議決の方法が法律、行政法規、法人の定款に違反し、または決議の内容が法人の定款に違反する場合には、営利法人の出資者は、人民法院にその決議の取消を請求することができる。ただし、営利法人が当該決議に基づいて善意の第三者と締結した民事上の法律関係には影響を与えない。

第86条 営利法人が従事する経営活動を行うとき、商業道徳を遵守し、取引の安全を守り、政府と社会の監督を受け、社会的責任を負わなければならない。

第三節 非営利法人

第87条 公益目的またはその他の非営利の目的のために成立し、取得した利潤を出資者、設立者または会員に分配しない法人は、非営利法人となる。

非営利法人には、事業単位、社会团体、基金会、社会服務機関などが

含まれる。

第88条 法人の要件を備えて、社会経済の発展の需要に応じ、公益の服務を提供するために設立された事業単位は、法律に基づいて登記を経て設立し、事業単位法人の資格を取得する。法律に基づいて法人登記を要しない場合、設立した日から事業単位法人格を有する。

第89条 事業単位法人が理事会を設けている場合、法律に別段の規定を有する場合を除いて、理事会がその意思決定機関となる。事業単位法人の代表者は、法律、行政法規または法人の定款の規定に基づいて選出される。

第90条 法人の要件を備え、会員の共通の意思に基づいて、公益目的または会員共通の利益などを実現するために設立された非営利目的の社会団体は、法律に基づいて登記を経て設立し、社会団体法人格を取得する。法律に基づいて法人登記を要しない場合には、成立した日から、社会団体法人格を有する。

第91条 社会団体法人を設立するときには法律に基づいて定款を制定しなければならない。

社会団体法人は、会員大会または会員代表大会などの権力機関を設けなければならない。

社会団体法人は、理事会などの執行機関を設けなければならない。理事長または会長などの責任者は法人の定款の規定に基づいて法人の代表者を務める。

第92条 法人の要件を備え、公益の目的のために、寄付及び援助による財産を持って設立された基金会、社会服務機関などは、法律に基づく登記により成立し、寄贈法人資格（捐助法人資格）を取得する。

法律に基づいて設立された宗教活動の場所が、法人の要件を備えている場合、法人登記を申請することにより、寄贈法人資格を取得することができる。法律、行政法規に宗教活動場所に対して定めるところがある

場合には、その規定に従う。

第93条 寄付法人を設立する場合には、法律に基づいて定款を制定しなければならない。

寄付法人は、理事会、民主管理組織などの意思決定機関を設け、かつ、執行機関を設けなければならない。理事長などの責任者は法人の定款の規定に基づいて法人の代表者が担当する。

寄付法人は監事会などの監督機関を設けなければならない。

第94条 寄付者は、寄付法人がその寄付及び援助した財産の使用、管理状況について照会し、または意見と提案を提出する権限を有し、寄付法人は遅滞なく誠実に回答しなければならない。

寄付法人の意思決定機関、執行機関またはその法人の代表者の行った決定が法律、行政法規または法人の定款の規定に違反する場合、寄付法人などの利害関係人または主たる管理機関は、人民法院に対してその取消を請求することができる。ただし、寄付法人が当該決定によって善意の第三者と形成した民事上の法律関係に影響を与えない。

第95条 公益の目的のために設立した非営利法人が終了する場合には、出資者、設立者または会員に対して剰余財産を分配してはならない。剰余財産は法人の定款の規定または権力機関の決議に従って公益の目的のために用いなければならない。法人の定款の規定または権力機関の決議に従って処理することができない場合には、主たる管理機関は主導してその趣旨が同一または類似する法人に引き続き、かつ、社会公告を行う。

第四節 特別法人

第96条 本節に規定する機関法人、農村集団経済組織法人、都市・鎮・農村の合作経済組織法人、基礎大衆性の自治組織法人は、特別法人とする。

第97条 独立した経費を有する機関及び行政権能を担う法定機関が設

立された日から、機関法人資格を有し、職務を履行するために必要な民事活動に従事することができる。

第98条 機関法人が抹消された場合には、法人は終了し、その民事的権利及び義務はその職務を引き継ぐ機関法人が担う。その職務を引継ぐ機関法人が存しない場合、当該機関法人の抹消を決定した機関法人が担う。

第99条 農村集体経済組織は法律に基づいて法人格を取得する。

農村集体経済組織に対して法律、行政法規に規定がある場合、その規定に従う。

第100条 都市・農村の合作経済組織は法律に基づいて法人格を取得する。

都市・農村の合作経済組織に対して法律、行政法規に規定を設けている場合には、その規定に従う。

第101条 住民委員会、農村委員会は基礎大衆性自治組織（最も末端の住民自治組織）法人格を有し、その職能を履行するために必要となる民事活動に従事することができる。

農村集団経済組織を設立していない場合には、村民委員会は農村集団経済組織の職能を法律に基づいて代行することができる。

第四章 非法人組織

第102条 非法人組織は法人格を有しない。ただし、法律に基づいて自己の名をもって民事活動に従事することのできる組織である。

非法人組織は個人独資企業、組合企業、法人格を有しない専門的な服務機構などが含まれる。

第103条 非法人組織は、法律の規定に基づいて登記しなければならない

い。

非法人組織の設立について、関係機関の認可を経なければならない旨が法律または行政法規に定められている場合には、その規定に従う。

第104条 非法人組織の財産がその債務の弁済に不足する場合には、その出資者または設立者は無限責任を負う。法律に別段の規定がある場合には、その規定に従う。

第105条 非法人組織は1人または複数人を当該組織の代表と定めて民事活動に従事させることができる。

第106条 次に掲げる事由のいずれかに該当する場合には、非法人組織は解散する。

(一) 定款に規定する存続期間の満了、または定款に規定する他の解散事由が生じた場合。

(二) 出資者または設立者が解散を決定した場合。

(三) 法律に定めるその他の事由。

第107条 非法人組織を解散する場合には、法律に基づいて清算を行わなければならない。

第108条 非法人組織は、本章の規定を適用するほか、本法第3章第1節の関係規定を参照して適用する。

第五章 民事上の権利

第109条 自然人の人身の自由及び人格の尊厳は法律による保護を受ける。

第110条 自然人は生命権、身体権、健康権、氏名権、肖像権、名誉権、栄誉権、プライバシー権、婚姻に関する自己決定権などの権利を有する。

法人、非法人組織は名称権、名誉権、栄誉権などの権利を有する。

第111条 自然人の個人情報に法律による保護を受ける。如何なる組織及び個人も他人の個人情報を取得する場合には、法律に基づいて取得し、かつ、情報の安全を確保しなければならない、他人の個人情報を不法に収集、使用、加工、伝送を行ってはならず、他人の個人情報を不法に売買、提供または公開してはならない。

第112条 自然人の婚姻、家庭関係などによって生じた身分上の権利は法による保護を受ける。

第113条 民事主体の財産権は法による平等な保護を受ける。

第114条 民事主体は法律に基づいて物権を有する。

物権は、権利者が法律に基づいて特定の物に対する直接的に支配及び排他的な権利であり、所有権、用役物権及び担保物権が含まれる。

第115条 物には不動産及び動産が含まれる。権利を物権の客体とする旨が法律によって定められている場合には、その規定に従う。

第116条 物権の種類及び内容は、法律によって規定する。

第117条 公共の利益の必要のため、法律が定める権利及び手続に基づいて不動産または動産を収用、徴用する場合には、公平、合理的な補償を与えなければならない。

第118条 民事主体は法律に基づいて債権を有する。

債権は、契約、権利侵害行為、事務管理（無因管理）、不当利得及び法律のその他の規定により、権利者が特定の義務者に対して一定の行為をなすまたはなさないことを請求する権利である。

第119条 法律に基づいて契約が成立した場合、当事者に対して法律上の拘束力を有する。

第120条 民事上の権利と利益が侵害された場合には、権利を侵害された者は権利を侵害した者に対して損害賠償することを請求する権利を有する。

第121条 法定または約定の義務を有さず、他人の利益の損失を避ける

ために管理を行った者は、これによって支出した必要な費用の償還を受益者に対して請求する権利を有する。

第122条 合法的な法律上の根拠がなく不当な利益を取得したことにより損失を受けた者は、その不当利得の返還を求める権利を有する。

第123条 民事主体は法律に基づいて知的財産権を有する。

知的財産権は権利者が法律に基づいて次の各号に掲げる客体について専属的権利を有する。

- (一) 著作物
- (二) 発明、実用新案、意匠
- (三) 商標
- (四) 地理的表示
- (五) 商業上の秘密
- (六) 集積回路の配置設計
- (七) 植物新品種
- (八) 法律に規定する他の客体

第124条 自然人は法律に基づいて相続権を有する。

自然人の合法的な私有財産は、法律に基づいて相続することができる。

第125条 民事主体は法律に基づいて持分権及びその他の投資的権利を有する。

第126条 民事主体は法律が規定するその他民事上の権利を享有する。

第127条 データ、ネットワーク上の仮想財産の保護に対して法律に規定を設けている場合には、その規定に従う。

第128条 未成年者、高齢者、障害者、婦女、消費者などの民事上の権利の保護について法律に特段な規定がある場合には、その規定に従う。

第129条 民事上の権利は、民事上の法律行為、事実行為、法律に定める事件または法律が規定する他の方法によって取得することができる。

第130条 民事主体は自己の意思に従って法律に基づいて民事上の権利

を行使し、干渉を受けない。

第131条 民事主体は権利を行使する場合に、法律の規定及び当事者間
で合意された義務を履行しなければならない。

第132条 民事主体は、民事上の権利を濫用して国家利益、社会的な公
共の利益または他人の合法的な権利と利益に損害を与えてはならない。

第六章 民事法律行為

第一節 一般規定

第133条 民事上の法律行為は民事主体が意思表示に基づいて、民事上
の法律関係の設定、変更、終了を行う行為を指す。

第134条 民事上の法律行為は、双方または三者以上の意思表示の合致
により成立させることができ、また、一方の当事者の意思表示に基づい
て成立させるができる。

法人、非法人組織が法律または定款に定める決議方法及び決議手続き
に基づいて決議を行ったとき当該決議行為は成立する。

第135条 民事上の法律行為には書面形式、口頭形式またはその他の形
式をとることができる。法律、行政法規による規定、または当事者の合
意により特定の形式をとることを約定している場合には、特定の形式を
取らなければならない。

第136条 民事上の法律行為は成立した時からその効力が生じる。ただ
し、法律に別段の規定または当事者の間に他の合意がある場合を除く。

行為者は、法律の規定または相手方の同意を得ることなく、民事上の
法律行為の変更または解除してはならない。

第二節 意思表示

第137条 対話の方式をもって行った意思表示は、相手方がその内容を知った時にその効力が生じる。

非対話の方法をもって行った意思表示は、相手方に到達した時にその効力が生じる。非会話方法をもって行ったデータ電文方式をもって行った意思表示は、相手方が特定のシステムを指定した場合には当該データ電文が当該特定システムによって受信された時にその効力が生じ、特定システムが指定されていない場合には、相手方は当該データ電文が自身のシステムに受信されたことを知りまたは知ることができた時にその効力が生じる。当事者の間にデータ電文方法をもって意思表示の効力の発生時期について他の合意がある場合、その合意に従う。

第138条 相手方がいない意思表示は、表示が終えたときにその効力が生じる。法律に他の規定がある場合、その規定に従う。

第139条 公告の方法をもって行った意思表示は、公告を発したときにその効力が生じる。

第140条 行為者は明示または黙示の方法によって意思表示を行うことができる。

沈黙は法律の規定、当事者間の合意または当事者間の慣習がある場合に限り、意思表示と見なすことができる。

第141条 行為者は意思表示を撤回することができる。意思表示の撤回の通知は意思表示が相手方に到達する前に、または意思表示と同時に相手方に到達しなければならない。

第142条 相手方のある意思表示の解釈については、その使用する語句に従い、関係の条項、行為の性質及び目的、慣習、並びに信義誠実の原則を踏まえて、意思表示の意味を確定しなければならない。

相手方のない意思表示の解釈については、使用する語句に完全に拘ることなく、関係の規定、行為の性質及び目的、習慣並びに誠実の原則を踏

まえて、行為者の真実の意思を確定しなければならない。

第三節 民事法律行為の効力

第143条 次の各号に掲げる条件を備えた民事上の法律行為は有効とする。

- (一) 行為者が相応の民事上の行為能力を有していること。
- (二) 意思表示が真実であること。
- (三) 法律及び行政法規の強制的規定に違反することがなく、公序良俗に反しないこと。

第144条 民事行為無能力者が行った民事上の法律行為は無効とする。

第145条 制限民事行為能力者が行った民事上の法律行為であっても、単に利益を得る民事上の法律行為またはその年齢、知力、精神健康状態に相応する民事上の法律行為は有効となる。その他の民事的法律行為は法定代理人の同意または追認を得た後に効力を有する。

相手方は法定代理人に対し、通知を受けた日から1か月以内に追認するように催告することができる。法定代理人が表示を行わなかった場合、追認を拒絶したものとみなす。民事上の法律行為が追認される前において、善意の相手方は取り消す権利を有する。取消は通知の方法をもって行わなければならない。

第146条 行為者と相手が虚偽の意思表示をもって行った法律行為は無効とする。

虚偽の意思表示によって隠蔽した民事上の法律行為の効果については、関係法律の規定に基づいて処理する。

第147条 重大な錯誤に基づいて行った民事上の法律行為は、行為者が人民法院または仲裁機構に取消を請求する権利を有する。

第148条 相手方の一方が欺罔の手段をもって相手方の真意に反して行った民事上の法律行為について、欺罔された者は、人民法院または仲裁

機構に取消を請求する権利を有する。

第149条 第三者が欺罔行為を行い、当事者の一方が真意に反して行った民事上の法律行為について、相手方が当該欺罔行為を知るまたは知ることができたときには、欺罔を受けた者は人民法院または仲裁機構に取消を請求する権利を有する。

第150条 当事者一方または第三者が強迫の手段を用いて、相手方が真意に反して行った民事上の法律行為について、強迫を受けた者は人民法院または仲裁機構に取消を請求する権利を有する。

第151条 相手方が困窮状態にあり、判断能力の欠如などの状況を一方が利用したことにより、民事上の法律行為が成立したときに明らかに公平性を欠くこととなった場合には、損失を受けた一方の当事者は人民法院または仲裁機構に取消を請求する権利を有する。

第152条 次の各号に掲げる事由のいずれか該当した場合には、取消権は消滅する。

- (一) 当事者が当該取消の事由を知りまたは知ることができた日から1年以内に、重大な錯誤があった当事者が当該取消事由を知りまたは知るべき日から3ヶ月以内に、取消権を行使しなかった場合。
- (二) 当事者が強迫を受け、その強迫行為が終了してから1年以内に取消権を行使しなかった場合。
- (三) 当事者が取消事由を知ってから明示または自己の行為をもって取消権の放棄を表明した場合。

当事者が民事上の法律行為の効力が発生した日から5年以内に取消権を行使しなかった場合。

第153条 法律、行政法規の強行規定に違反する民事上の法律行為は無効とする。ただし、当該強行規定によって民事上の法律行為が無効にならない場合にはこの限りではない。

公序良俗に反する民事上の法律行為は無効とする。

第154条 行為者と相手方の間において悪意をもって通謀し、他人の合法的な権利と利益に損害を与える民事上の法律行為は無効とする。

第155条 無効または取り消された民事上の法律行為は初めから法的拘束力を有しない。

第156条 民事上の法律行為の一部が無効となり、その他の部分の効力に影響を及ぼさない場合には、その他の部分は依然として効力を有する。

第157条 民事上の法律行為は、無効、取消またはその効力が生じないことが確定した後、行為者は当該行為により取得した財産を返還しなければならない。返還することができないまたは返還する必要がある場合には、金銭に換算して補償しなければならない。過失のある一方当事者は、相手方がこれによって被った損失を賠償しなければならない。各当事者のいずれにも過失がある場合、各自が相応する責任を負わなければならない。法律に別段の規定がある場合、その規定に従う。

第四節 条件付き民事法律行為及び期限付き民事法律行為

第158条 民事上の法律行為には条件を付することができる。ただし、その性質にしたがって条件を付けてはならない場合この限りでない。効力が生じる条件が付された民事上の法律行為は、その条件を備えたときから効力が生ずる。解除条件付民事法律行為は、その条件を備えたときから効力を失う。

第159条 条件付民事上の法律行為は、当事者が自己の利益のために条件を成就することを不当に阻止した場合には、条件を成就したものとみなす。その条件を不当に成就させた場合、条件を成就していないものとみなす。

第160条 民事上の法律行為には期限を付することができる。ただし、その性質に従って期限を付してはならない場合はこの限りではない。効力が発生する期限を付した民事上の法律行為は、その期限が満了したと

きからその効力が生じる。終了期限付民事上の法律行為は、その期限が満了したときにその効力を失う。

第七章 代理

第一節 一般規定

第161条 民事主体は代理人を通して民事上の法律行為を行うことができる。

法律の規定、当事者間の合意または民事上の法律行為の性質に基づいて、本人が自ら行わなければならない民事上の法律行為については、これを代理してはならない。

第162条 代理人がその代理権限内において、本人の名をもって行った民事上の法律行為は、本人に対してその効力が生じる。

第163条 代理には委託代理と法定代理が含まれる。

委託代理人は本人の委託に従って代理権を行使する。法定代理人は法律の規定に基づいて代理権を行使する。

第164条 代理人がその職責を履行せず、または完全に履行せずに、本人に損害を被らせた場合には、民事責任を負わなければならない。

代理人と相手方が悪意をもって通謀し、本人の合法的な権利・利益に損害を被らせた場合には、代理人と相手方は連帯して責任を負わなければならない。

第二節 委託代理

第165条 委託代理が書面の形式をとる場合、授權委託書に代理人の氏名または名称、代理事項、権限及び期限を明記し、本人が署名または捺印をしなければならない。

第166条 数人が同一の代理事項の代理人となる場合には、代理権を共同して行使しなければならない。ただし、当事者の間において別段の合意がある場合を除く。

第167条 代理人は代理事項が違法であることを知りまたは知るべきでありながら代理行為を行った場合、若しくは本人は当該代理行為が違法であることを知り、または知るべきでありながら反対しなかった場合、本人及び代理人は連帯して責任を負わなければならない。

第168条 代理人は本人の名義をもって自己と民事行為をなしてはならない。ただし、本人の同意、追認がある場合を除く。

代理人は本人の名義をもって自己が同時に代理しているその他の者と民事上の法律行為を行ってはならない。ただし、代理する本人の双方の同意、追認がある場合を除く。

第169条 代理人は第三者に代理を再委託する場合には、本人の同意または追認を得なければならない。

代理の再委託が本人の同意または追認を得た場合、本人は代理事務について再委託先の第三者に直接的に指示することができ、代理人は第三者の選任及び第三者の指示のみについて責任を負う。

代理の再委託が本人の同意または追認を得ていない場合には、代理人は再委託先の第三者が行った行為に対して責任を負わなければならない。ただし、緊急事態の下で代理人が本人の利益を守るために第三者に再委託する必要がある場合はこの限りではない。

第170条 法人または非法人組織の任務を執行する者がその職務権限内の事項について法人または非法人組織の名義をもって民事上の法律行為を行った場合には、その効果は法人または非法人組織に帰属する。

法人または非法人組織がその任務を執行する者の職権権限に対する制限は、善意の第三者に対抗することができない。

第171条 行為者に代理権がなく、越権代理または代理権が消滅した後

に、再び代理行為を行った場合、本人の追認を得ない限り、本人に対してその効力が生じない。

相手方は通知の届いた日から1か月以内に追認するよう本人に催告することができる。本人が何らの表示をしなかった場合、追認を拒絶したものとみなす。行為者が行った行為を追認する前であれば、善意の相手方は取消す権利を有する。取消は通知の方法をもって行わなければならない。

行為者が行った行為が追認されなかった場合、善意の相手方は行為者に対して債務の履行または被った損害賠償を請求する権利を有する。ただし、賠償範囲は本人が追認したときに相手方が得ることのできる利益を超えてはならない。

相手方が代理人の無権代理を知っているまたは知るべきである場合には、相手方及び行為者は各自の過失に従って責任を負う。

第172条 行為者に代理権がなく、越権代理または代理権が消滅した後にも関わらず代理行為を行った場合であっても、相手方に行為者が代理権を有することを信じる理由があるときは、代理行為は有効となる。

第三節 代理の終了

第173条 次の各号に掲げる事由のいずれかがある場合、委託代理は終了する。

- (一) 代理期間の満了または代理事務が完了した場合。
- (二) 本人が委託を取消し、または代理人を辞任した場合。
- (三) 代理人が民事上の法律行為能力を喪失した場合。
- (四) 代理人または本人が死亡した場合。
- (五) 代理人または本人たる法人、非法人組織が終了した場合。

第174条 本人が死亡後に、次各号に掲げる事由のいずれかに該当した場合、委託代理人が行った代理行為は有効とする。

- (一) 代理人が本人の死亡を知らず、かつ、知り得ない場合。
- (二) 本人の相続人が承諾した場合。
- (三) 代理権が代理事項の完成時に終了することを授権にあたって明確にされている場合。
- (四) 本人が死亡する前に実施され、本人の相続人の利益のために代理を継続した場合。

本人たる法人、非法人組織が消滅した場合、前項の規定を準用する。

第175条 次の各号に掲げる事由のいずれかがある場合、法定代理は終了する。

- (一) 本人が完全な民事上の行為能力を取得または回復した場合。
- (二) 代理人が民事上の行為能力を喪失した場合。
- (三) 本人または代理人が死亡した場合。
- (四) 法律に規定するその他の事由が発生した場合。

第八章 民事責任

第176条 民事主体は法律の規定及び当事者間の合意に基づいて民事上の義務を履行し、責任を負う。

第177条 2人以上の者は責任を区分して負い、責任の区分を確定することができる場合には、各自が区分に応じた責任を負う。責任の区分を確定することができない場合には、均等に責任を負う。

第178条 2人以上の者が法律に基づいて連帯して責任を負う場合には、権利者は連帯して責任を負う者に対して責任の一部または全部についてを請求することができる。

連帯して責任を負う者が負う責任の部分について、各自の責任の区分に基づいて確定する。責任を区分することが難しい場合には、均等に責

任を負う。実際に負担した責任が自己の責任の割合を超えた連帯責任者は、その他の連帯責任者に償還を請求する権利を有する。

連帯責任は、法律が規定し、または当事者が約定する。

第179条 民事責任を請求する方法として、主に次のものがある。

- (一) 侵害の停止
- (二) 妨害の排除
- (三) 危険の除去
- (四) 財産の返還
- (五) 原状の回復
- (六) 修理、作り直し、交換
- (七) 履行の継続
- (八) 損失の賠償
- (九) 違約金の支払い
- (十) 影響の除去、名誉の回復
- (十一) 謝罪

法律に懲罰的な損害賠償が定められている場合、その規定に従う。

本条に規定する民事的責任を負う方法は、単独で適用することも、併せて適用することもできる。

第180条 不可抗力により民事上の義務を履行することができなかった場合には、民事責任を負わない。法律に別段の規定がある場合には、その規定に従う。

不可抗力は、予見することができず、回避することができず、かつ、克服することができない客観的な状況をいう。

第181条 正当防衛によって損害をもたらした場合には、民事責任を負わない。

正当防衛が必要な限度を超え、あるべきでない損害をもたらした場合には、防衛行為をなした者は適当な民事責任を負わなければならない。

第182条 緊急避難により損害をもたらした場合には、危険な状態の発生を招いた者が民事責任を負う。

危険が自然によって発生したものである場合、緊急避難行為者は、民事責任を負わず、適当な補償を与えることができる。

緊急避難のためにとった措置が不当であり、または必要な限度を超えたため、あるべきでない損害をもたらした場合、緊急避難行為をなした者は適当な民事責任を負わなければならない。

第183条 他人の民事上の権益を保護したため自己が損害を被った場合には、不法行為者は民事責任を負い、受益者は適当な補償を与えることができる。不法行為者が不存在の場合、逃亡した場合、または民事責任を負う能力がない場合において、被害者が補償を請求する場合、受益者は、適当な補償を与えなければならない。

第184条 自己の意思に基づいて行った緊急救助の行為により救助を受けた者に損害が生じた場合、救助者は民事的責任を負わない。

第185条 英雄烈士などの氏名、肖像、名誉または荣誉に損害を与え、社会的な公共利益に損害を与えた場合には、民事責任を負わなければならない。

第186条 当事者の一方の違約行為によって、相手方の身分の権益または財産的な利益に損害を与えた場合には、被害者は違約責任または違法責任を選択してその責任の履行を請求する権利を有する。

第187条 民事主体が、同一行為による民事責任、行政責任及び刑事責任を負わなければならない場合において、行政責任または刑事責任を負うことが民事責任に影響を及ぼすことはない。民事主体の財産が弁済に不足する場合、民事責任を優先して負わせる。

第九章 訴訟時効

第188条 人民法院に対して民事上の権利の保護を請求する訴訟の時効は3年とする。法律に別段の規定がある場合には、その規定に従う。

訴訟時効の期間は、権利者がその権利に損害を受けたこと及び義務者を権利者が知り、または知るべきであった日から起算する。法律に別段の規定がある場合、その規定に従う。ただし、権利者が損害を受けた日から20年を超えている場合には、人民法院はこれを保護しない。特段の事由がある場合には、人民法院は権利者の申請に基づいて延長を決定することができる。

第189条 当事者は同一債務について期限を分けて履行することを約定した場合、訴訟時効期間は最後の履行期限が満了した日から起算する。

第190条 民事上の無能力者または民事上の制限行為能力者の法定代理人に対する請求権に関わる訴訟時効期間は、当該法定代理が終了した日から計算する。

第191条 未成年者が性的な被害を受けた場合の損害賠償の請求権の訴訟時効期間は、被害者が18歳になった日から計算する。

第192条 訴訟時効の期間が満了した場合、義務者は義務を履行しないことにつき抗弁を提出することができる。

訴訟時効期間が満了した後に、義務者が自己の意思をもって履行に同意した場合、訴訟時効期間の満了を抗弁してはならない。義務者はすでに任意で履行している場合には、返還請求してはならない。

第193条 人民法院は訴訟時効の規定を自ら進んで適用してはならない。

第194条 訴訟時効期間の最後の6か月内において、次の各号に掲げる事由によって請求権を行使することができない場合、訴訟時効は停止する。

- (一) 不可抗力
- (二) 行為無能力者または民事上の制限行為能力者に法定代理人がないとき、または法定代理人が死亡し、代理権を喪失し、または民事上の行為能力を喪失していた場合。
- (三) 相続が開始後、相続人または遺産管理人を確定していない場合。
- (四) 権利者が義務者またはその他の者によって支配されていた場合。
- (五) その他の権利者が請求権を行使することができない障害がある場合。

時効停止の自由が除去された日から6か月が経過した場合に、訴訟時効期間は、満了する。

第195条 次の各号に掲げる事由のいずれかがある場合には、訴訟時効は中断する。

中断または関係手続きが終了した時から、訴訟時効は改めて計算する。

- (一) 権利者が義務者に履行請求を提出した場合。
- (二) 義務者が義務の履行に同意した場合。
- (三) 権利者が訴訟または仲裁を申し立てた場合。
- (四) 訴訟の提起または仲裁の申し立てと同様な効果を有するその他の事由。

第196条 次の各号に掲げる請求権には訴訟時効の規定を適用しない。

- (一) 侵害の停止、障害の排除、危険の除去の請求。
- (二) 不動産物権及び登記された動産物権の権利者による財産の返還請求。
- (三) 扶養費及び養育費の支払請求。
- (四) 法律に基づいて訴訟時効を適用しないその他の請求権。

第197条 訴訟時効の期間、計算方法及び停止・中断事由は法による定め、当事者間の合意は無効とする。

訴訟時効の利益について当事者による事前放棄は無効とする。

第198条 法律に仲裁の時効に規定がある場合には、その規定を適用する。規定がない場合には、訴訟時効の規定を適用する。

第199条 法律の規定または当事者間の合意による取消権、解除権などの権利の存続期間は、法律に別段の規定がある場合を除いて、権利者はその権利の発生を知り、または知るべきであった日から計算し、訴訟時効の停止、中断及び延長に関する規定が適用されない。存続期間が満了した場合には、取消権、解除権などの権利は消滅する。

第十章 期間の計算

第200条 民法が指す期間は西暦の年、月、日、時間で計算する。

第201条 年、月、日に従って期間を計算する場合、開始の当日は算入せず、次の日から計算を開始する。

時間により期間を計算する場合には、法律の規定、または当事者間が約定した時から計算を開始する。

第202条 月、年により期間を計算する場合には、期間が到来する月の相当する日を期間の最終日とし、相当する日がない場合には、月末の日を期間の最後の日とする。

第203条 期間の最後日が法定休日である場合、法定休日が終了した翌日を期間の最終日とする。

期間の最終日の満了時間は24時とする。業務時間がある場合には、業務活動の停止時間を満了時とする。

第204条 期間の計算方法は本法の規定に従う。ただし、法律に別段の規定があり、または当事者の間に他の合意がある場合はこの限りでない。

第十一章 附則

第205条 民法にいう「以上」、「以下」、「以内」及び「満了」には、その数字が含まれ、「未満」、「超過」及び「以外」には、その数字が含まれない。

第210条 本法は2017年10月1日から施行する。

追記：この翻訳は、2017年3月27日に脱稿したが、掲載が遅れた。

本翻訳と同様なものは下記のとおりである。

朱嘩・小田美佐子〔訳〕「中華人民共和国民法総則（小特集 中国における「民法総則」の制定）」法律時報 89 (5)、67-78、2017年5月

王晨翻〔訳〕「中華人民共和国民法総則草案（第三次審議稿）（全国人民代表大会常務委員会、2016年12月）」法学雑誌 63 (2)、465-433、2017年6月

錢偉榮〔訳〕「中華人民共和国民法総則」松山大学論集 29 (2)、251-293、2017年6月

胡光輝・王毓茜〔訳〕「外国法邦訳 中華人民共和国民法総則の概説と邦訳（上）」戸籍時報 (759)、34-43、2017年10月

胡光輝・王毓茜〔訳〕「外国法邦訳 中華人民共和国民法総則の概説と邦訳（中）」戸籍時報 (761)、20-29、2017年11月

胡光輝・王毓茜〔訳〕「外国法邦訳 中華人民共和国民法総則の概説と邦訳（下）」戸籍時報 (762)、33-42、2017年12月

愛知学院大学語学研究所規程

(名称・所属)

第1条 本研究所は愛知学院大学語学研究所（以下「本研究所」という）と称し、愛知学院大学教養部に設置する。

(目的)

第2条 本研究所は建学の精神に則り、外国語の総合的研究につとめ、外国語教育の向上を目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は下記の事業を行う。

- (1) 外国語及び外国語教育に関する組織的研究
- (2) 外国語教育活動の調査と分析
- (3) 研究成果の発表及び調査・分析の報告のための研究所報の刊行
- (4) その他設立の目的を達成するに必要な事業

(組織)

第4条 本研究所の所員は本学教養部語学担当の専任教員から成る。

(役員・任期)

第5条 本研究所に次の役員をおく。

所長1名、副所長1名、委員若干名

任期はいずれも2ヵ年とし、再任を妨げない。

(所長)

第6条 所長は、所員会議の議を経て、学長これを委嘱する。

- 2 所長は本研究所を代表し、運営全般を統括する。

(副所長)

第7条 副所長は所員会議の議を経て、所員の中から研究所長これを委嘱する。

- 2 副所長は所長を補佐する。

(運営委員会)

第8条 本研究所に運営委員会をおく。

- 2 運営委員会は、所長、副所長、委員から成り、所長は運営委員長を兼務する。運営委員会の規程は別に定める。

(所員会議)

第9条 本研究所に所員会議をおく。

- 2 所員会議は全所員をもって構成し、その過半数の出席をもって成立する。
- 3 所員会議は所長が召集し、その議長となる。但し、全所員の4分の1以上の請求があった場合、その請求より2週間以内に所長は所員会議を開催しなければならない。

(経費)

第10条 本研究所の経常費は愛知学院大学の年間予算をもってこれにあてる。

(規程の改正)

第11条 本規程の改正は、全所員の3分の2以上の賛同をえ、教養部教授会の議を経て、学長の承認をうることを要する。

附 則

本規程は、昭和50年4月1日より施行する。

本規程は、平成11年2月12日より改正施行する。

『語研紀要』投稿規定

(投稿資格)

第1条 本誌に投稿する資格をもつ者は、原則として、語学研究所所員とする。

(転載の禁止)

第2条 他の雑誌に掲載された論文・研究ノート・資料・翻訳は、これを採用しない。

(著作権)

第3条 本誌の著作権は当研究所に、個々の著作物の著作権は著者本人に帰属する。

(インターネット上の公開)

第4条 本誌はインターネット上でも公開する。

(原稿の形式)

第5条 投稿に際しては、つぎの要領にしたがって、本文・図および表を作成する。

- (1) 原稿は原則として電子媒体による入稿とし、プリントアウトを一部添付する。
- (2) 本文の前に、別紙で、つぎの3項目を、この順序で付する。
 - (i) 題名および執筆者名
 - (ii) 欧文の題名および執筆者名
 - (iii) 論文・研究ノート・資料・翻訳の区別
- (3) 原稿の欧文箇所は、手書きの場合、すべて活字体で書く。
- (4) 図は、白紙または淡青色の方眼紙を墨書し、縮尺を指定する。
- (5) 写真に、文字または印を入れるときは、直接せずに、トレーシング・ペーパーを重ねて、それに書き入れる。

(6) 原稿は、原則として、刷り上り18ページ（和文で約16,000字）以内とする。

(原稿の提出)

第6条 投稿希望者は、運営委員会の公示する提出期限までに、同委員会に提出する。締切日以降に提出された原稿は、掲載されないことがある。ただし、申込者が、所定の数に達しないか、または、それを超える場合には、同委員会がこれを調整する。

(原稿修正の制限)

第7条 投稿後の原稿の修正は、原則として、これを行わないものとする。やむをえない場合は、初校において修正し、その範囲は最小限にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されたときは、追加費用を個人負担とすることがある。

(校正)

第8条 校正は、原則として、第2校までとし、本文については執筆者がこれに当り、表紙・奥付その他については、編集委員がこれに当る。

(抜き刷り)

第9条 抜き刷りは、論文・研究ノート・資料・翻訳各1篇につき、30部までを無料とする。これを超える分については、実費を執筆者の負担とする。

付則

1. 本規定の改正には、語学研究所所員の3分の2以上の賛成を要する。
2. 本規定は、平成3年4月12日から施行する。
3. 本規定は、平成13年4月27日に改正し、即日施行する。
4. 本規定は、平成14年5月9日に改正し、即日施行する。
5. 本規定は、平成14年10月15日に改正し、即日施行する。
6. 本規定は、平成28年11月25日に改正し、即日施行する。

申合せ事項

- ◇ 第1条の「投稿する資格をもつ者」には、運営委員会が予め審議した上で投稿を認めた非所員を含むことができる。
- ◇ 運営委員会が、非所員の投稿の可否を審議対象とするのは、以下の場合である。
 - (1) 語学研究所所員との共同執筆による投稿
 - (2) 語学研究所所員が推薦する本学教養部の外国語科目担当非常勤講師（本学非常勤講師と学外者の共同執筆も含める）の投稿
 - (3) 語学研究所の講演に基づいて作成されたものの投稿
- ◇ 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、運営委員会を開いて投稿の可否を決定し、その投稿希望者に通知する。
- ◇ 投稿原稿の掲載に際しては、次のようにする。
 - 上記(1)(3)の場合は原稿料および抜き刷りは1篇分とする。
 - 上記(2)の場合は抜き刷りは1篇分とし、原稿料は支払わない。
- ◇ 第4条に関連して、本誌は国立情報学研究所が電子化した上でインターネット上に公表し、利用者が無料で閲覧できるものとする。
- ◇ インターネット上の公開は第28巻第1号から適用する。

語学研究所 第23回講演会

日時：令和1年6月21日(金) 17時00分～18時30分

会場：2号館4階 会議室

講師：中村 正廣 愛知教育大学名誉教授

演題：「ウィリアム・ギルモア・シムズとアメリカ旧南部の文学」

語学研究所 第34回研究発表会

日時：令和1年11月22日(金) 17時00分～18時30分

会場：2号館1階 2108教室

講師：杉浦 克哉 教養部講師

演題：「英語史における動名詞・分詞の構造変化について」

執筆者紹介（掲載順）

- 吉 井 浩司郎 : 本学教授・英語担当
藤 田 淳 志 : 本学准教授・英語担当
Russell Notestine : 本学外国人教師・英語担当
R. Jeffrey Blair : 本学外国人教師・英語担当
堀 田 敏 幸 : 本学教授・フランス語担当
David Dykes : 本学非常勤講師・英語担当
大門ゴーフ裕子 : 本学非常勤講師・英語担当
水 町 いおり : 本学非常勤講師・フランス語担当
李 承 俊 : 本学非常勤講師・韓国語担当
李 智 基 : 本学非常勤講師・中国語担当
加 藤 幸 英 : 本学非常勤講師・法務支援センター

語学研究所 所員一覧

英語

- 石川一久
川口勇作
近藤 浩 (委員)
佐々木 真
澤田真由美
杉浦克哉
西谷茉莉子
○藤田淳志
山口 均
○吉井浩司郎 (副所長)
鷲嶽正道
○R. Jeffrey Blair
Heather L. Doiron
Glenn D. Gagne
Jane A. Lightburn
○Russell L. Notestine
David A. Pomatti

ドイツ語

- 糸井川 修 (委員)
福山 悟

中国語

- 勝股高志
朱 新建
中村 綾 (委員)
前山慎太郎

フランス語

- 堀田敏幸 (所長)

韓国語

- 文 嬉眞 (委員)

(○印は本号執筆者)

編集後記

『語研紀要』第45巻第1号をお届け致します。本誌には論文9篇、翻訳1篇の玉稿をお寄せいただきました。ご寄稿頂いた先生方に厚くお礼申し上げます。

春には、愛知教育大学名誉教授の中村正廣先生に、「ウィリアム・ギルモア・シムズとアメリカ旧南部の文学」という演題で講演をして頂きました。先生が英語で書かれた博士論文をアメリカのサウス・カロライナ大学出版局から出版される際のご苦労話も織り交ぜられ、刺激と示唆に富んだ講演内容で、大いに勉強になりました。

ところで、現在、愛知学院大学全体で、学内で発行している機関誌のデジタル化が議論されています。今年度と来年度は移行期間ということで『語研紀要』を紙ベースで発行できますが、再来年度からは電子化になる予定です。今後、そのことに備えて検討課題もいろいろ出てくるかもしれません。

更に来年度からは、日進キャンパスに加えて、名城公園キャンパスや楠元キャンパスに出向いて授業を担当される先生方が多数おられます。研究時間の確保という点で工夫を要するかもしれませんが、そのような中でも、今後ますますの投稿を切にお願いする次第です。

(吉井浩司郎 記)

令和2年1月20日 印刷 (非売品)

令和2年1月30日 発行

愛知学院大学教養部 語学研究所 所報

語研紀要 第45巻第1号 (通巻第46号)

編集責任者 所長 堀田敏幸

発行所 愛知学院大学 語学研究所
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

Tel.0561-73-1111～5番

印刷所 株式会社あるむ

名古屋市中区千代田3-1-12

Tel.052-332-0861(代)

CONTENTS

ARTICLES

- Thomas Hardy and the Law
.....Koshiro YOSHII (3)
- “Fighting the Same Fights”:
How the Revival of *Angels in America* Relates to Present Day America
.....Atsushi FUJITA (21)
- Teaching the 1960s to Japanese College Students
.....Russell NOTESTINE (37)
- Vocabulary Acquisition: Verbs First
.....R. Jeffrey BLAIR (51)
- Beckett, existence de l’absent
.....Toshiyuki HOTTA (71)
- Animal-Animal and Human-Animal Relationships in Proverbs,
Fables and Stories: Interpretations and Responses
.....David DYKES (95)
- Federation of American Immigration Reform (FAIR)
and Racist Discourse Yuko OKADO-GOUGH (115)
- Une étude entre les gens et les livres du 19ème siècle
—du point de vue des cabinets de lecture et des églises à Bordeaux—
..... Iori MIZUMACHI (135)
- Attempts to use a translation in Korean language education
—Taking Ōe Kenzaburo *The Silent Cry*’s Korean translation as an
example—
.....LEE Seungjun (157)

TRANSLATION

- General Provisions of the Civil Law of the People’s of China
..... Tomoki RI • Yukihide KATO (177)

FOREIGN LANGUAGES & LITERATURE

Vol. 45 No. 1 (WHOLE NUMBER 46)

ARTICLES

- Thomas Hardy and the Law
..... Koshiro YOSHII (3)
- “Fighting the Same Fights”:
How the Revival of *Angels in America* Relates to Present Day America
..... Atsushi FUJITA (21)
- Teaching the 1960s to Japanese College Students
..... Russell NOTESTINE (37)
- Vocabulary Acquisition: Verbs First
..... R. Jeffrey BLAIR (51)
- Beckett, existence de l’absent
..... Toshiyuki HOTTA (71)
- Animal-Animal and Human-Animal Relationships in Proverbs,
Fables and Stories: Interpretations and Responses
..... David DYKES (95)
- Federation of American Immigration Reform (FAIR)
and Racist Discourse Yuko OKADO-GOUGH (115)
- Une étude entre les gens et les livres du 19^{ème} siècle
—du point de vue des cabinets de lecture et des églises à Bordeaux—
..... Iori MIZUMACHI (135)
- Attempts to use a translation in Korean language education
—Taking Oe Kenzaburo *The Silent Cry*’s Korean translation as an
example—
..... LEE Seungjun (157)

TRANSLATION

- General Provisions of the Civil Law of the People’s of China
..... Tomoki RI • Yukihide KATO (177)

Published by Foreign Languages Institute

AICHI-GAKUIN UNIVERSITY

Nagoya Japan, January 2020